

91-147x



•1200701744919•

增訂版·第十四版

法學博士 田尻稻次郎 著

乾

訂正 財政と金融
増補 財政と金融

東京

同文館藏版

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4

始



増訂版・第十四版

法學博士 田尻稻次郎 著

訂正 財政と金融
増補 財政と金融



東京

同文館藏版

緒言

財政金融の關係は世運の進歩と共に年々新相を生じ月に繁多を加へ正に刻下研究を要すべき一大問題たり于時 神武紀元二千五百六十年即ち西曆千九百年に當り將に文明の新紀に臨まんとし此の如き明治の 聖代に遭遇し我國文武の機運大に發達し將來斯道の教育亦之に應ずるの方針を取らざる可らず是に於て東京高等商業學校夙に時勢に鑑み大に其學科を擴張し新に財政金融の一科を加へ余に囑するに其講筵を以てす余欣然之を諾し聊か考慮する所あり速記技手を請傭し以て每筵講述する所を筆記せしめ譯文正に成るを告ぐ然れども我國言文一ならず聽聞に便なる所は誦讀に便ならず一得一失亦已む



80W47160

を得ず故に今之を通用の文章に改作し以て印刷に附し世に公
にす然るに事固より學術に涉り敢て文章の流麗を期するに非
ず唯論理を誤らす事實を矯めざるを以て目的とす故に意義廻
・旋行文流暢なるを得ず所謂意到り筆隨はざるを恥つ看官請ふ
之を諒せよ

明治三十四年八月

著者誌

第三版緒言

本書第一版は其緒言に於て記載せる如く前學年中の講義筆記
を通用の文章に改作せしに過ぎずして専ら學生の便を計り本
學年當初より其教科書に充てんと欲し計表、圖解方式等は之を
教場の揭示に譲り所謂拙速を尊ひ之を發兌せり、第二版は第一
版を隔つる僅かに月餘にして校正増補の暇なく已む事を得ず
全然第一版を襲へり第三版は第一版を隔つる凡そ三閱月固よ
り未だ十分なりと云ふを得ずと雖も多少校正増加の猶豫を得
以て計表、圖解方式等を加ふるを得たり而して其間諸學友の注
意寄稿を得て頗る第一版の缺を補ひ面目を改めしもの少なか
らず就中第四章第二款決算の如きは多年職を帝國會計検査院

に奉し學識經驗兼備の名士文學士中隈敬藏氏の寄稿に係るものにして蓋し得難きの好文章なり、又信用狀の方式の如きは東京工業學校教授鈴木純一郎氏の寄贈に係り少しく取捨したるものなり、又信託會社に關する法制比較研究は第一銀行の厚意に依り得たるものなり、今哉第一版を隔つる僅に三箇月公務及教授の餘暇を以て訂正増補して第三版を發兌し第二版の缺漏を補ふを得たるは實に前記學友諸君等の助力に依る而して其發行印刷に就ては同文館主の勞亦少しとせず記して以て之を江湖に告ぐ

明治三十四年十二月

著 者 誌

第十四版緒言

世運の進歩と共に本書掲載の事項年に加はり月に新たなり明治三十四年第一版を發兌せしより歳月を経る既に少なからず其間條項頗る加はり前に精なる者は今や方さに其要を失ひ昨の粗なる者は正に以て精ならざるを得ず是に於て編纂の順序亦稍やく亂れんとす、夫れ物極まれば必ず變ず變ずれば則ち通ず、今哉我國一大戰役の後を受け諸般の事項大に改まり財政亦隨て疇昔の觀を留めず、將に進んで以て目耳を改め大に劃策する所なくんば啞齋の悔ある蓋し遠きに非ざるべし、依て今回第十四版の發兌を機會とし改竄増補次を逐ふて規繩を正し以て閱覽の資に供し併せて索引の便に備へんとす、頑石の間固より

夜光を得るを期せずと雖も世に寸益あらば幸甚

明治四十年九月

著者誌

六

自序

財政と金融とは世運の進歩に伴ひ日に親密を加へ兩々相携へて離る可らざるは理の最も見易き所にして又事實の既に證標する所なり、彼の公債の募集其種類の選定性質種類の區分、利子の支拂元金の償還、證書額面の大小等一として其影響を金融市場に及ぼさざるはなく、租税の種類、性質、租率の輕重、納期の當否、徵收方法の良否等亦大に貨幣市場に關係す、而して豫算の編製、執行、經常費、臨時費の區分及其支辨の方法、年度の區分、金庫の組織等は主として財政の整理に關し、延て其影響を貨幣市場に及ぼし、決算の順序、系統亦大に考究すべきものあり、貨幣制度に就ては本位の選定、補助貨の制限、造幣の注意、貨幣の秤量、兌換券發行の方法、正貨準備の維持増殖等より、不換紙幣發行の注意及其弊害等に至るまで論究すべきもの固より少しとせず、而して銀行制度に於ては其全體の組織、各特別銀行の關係、中央銀行の設置、資本の多寡、利率の高低、預金の放下、割引、貸付に關する注意、手形、小切手の取

扱營業準備の多寡、本支店の關係等重要の問題枚舉に遑あらず。若し夫れ之が本末順序を誤り、緩急伸縮其宜きを制する能はざるときは、小にしては貨幣市場に影響し、大にしては一國の經濟、財政に波及す。豈に夫れ之を忽にするを得んや。今や我邦中興の大勢に乘じ、大に四海に雄飛せんとする時運に際會し、吾人の前途亦樂むべきものあり。然りと雖も、國運の進歩は事物の關係を繞密ならしめ、事情の衝突を生じ、其狀恰も亂麻の如く、又磐根錯節の如くなるは、勢の免れざる所なり。豫め之に備ふる所あるに非ずんば、或は不測の變あらん。夫れ先憂後樂は、聖賢の教ゆる所にし。て理世の要訣たり、之を切斷處理するは、到底因循姑息の慣習俗論の能くする所に非ず。一定動す可らざる學理の刀斧を措て、他に恃むべきものなし。事複雑なるが如しと雖も、恰も亂絲を釋くが如く、頭緒先づ尋ね得て之を古今内外の閱歷に鑑み、學理、經驗相須ち以て研究せば、則ち庶幾は正鵠を誤らざるべし。抑々眞理は修めざれば、顯はれず、證せざれば、得ることなし。請ふ編を重ね、卷を積み、章を逐ひ、以て之を陳述せん。

改増
版訂
財 政 と 金 融

乾

第一編 第一卷 公 債

訂正増補
第十四版
財政と金融(財務及會計)

乾

目録

第一編 財務

第一卷 公債

第一章 確定公債	一
第一節 種類及名稱	一
第二節 一時拂公債	二
第三節 有期定期拂	四
第一目 定期拂は財政の屈伸力を奪ふ	四
第二目 借換の便を缺く	五
第四節 有期隨時拂	六
第五節 永遠公債	八

第六節 各種の配合

第二章 流動公債

第一節 總論

第二節 大藏省證券

第一目 大藏省證券の身分

第二目 直税國と間税國とに於て大藏省證券發行の

必要の差違

第三目 大藏省證券發行制限の方法及期限

第四目 大藏省證券の利用併に中央銀行との關係

第五目 大藏省證券額面に就ての注意併に一般公債

法との關係

第三節 國庫預金

第一目 預金機關及資金放下の區域

第二目 危險の豫防併に利率定め方の注意

第三章 年金

第一節 總論

第二節 終身年金

第一目 設定の根據

第二目 效用

第三目 組換の必要

第三節 有期年金

第一目 効用

第二目 公債整理の爲にする利用

第四節 トンチン法

第一目 方法及組織

第二目 生存者の實例及數字的説明

第三目 公債整理の爲にする利用

第四章 特別公債

第一節 籤札付公債

第一目 總論

第二目 籤札付公債に關する注意の要點

第三目 籤札付證書發行の實例

第二節 特別募集

第五章 募集及發行

第一節 總論

第二節 平價發行及呼價發行

第一目 總論

第二目 呼價發行の不利

第三目 呼價發行の利用

第四目 結論

第三節 年金附證書の發行

第四節 發行價格及無減少免許

四四
四四
四五
四七
六一
六三
六三
六四
六四
六五
六九
七〇
七〇
七〇
七二

第一目 總論

第二目 高價無減少免許

第三目 小額無減少免許

第五節 募集に際し事實を蔽ふの弊

第一目 佛國の弊習

第二目 露國の遺線

第六節 間接發行の組織

第七節 募集雜件

第一目 一時及部分募集併に拂込回数

第二目 保證拂併に部分拂の方法

第三目 募集初年の利子及募集費の支拂

第六章 利子拂

第一節 利子拂回数

第二節 利子拂と租税の納期及市場との

八五
八五
八四
八三
八一
七九
七八
七七
七七
七五
七三
七二

關係

第三節 利札の割引併に利子繰上拂

- 第一目 利子の割引に就ての注意……………八九
- 第二目 繰上拂の實例及新案……………九〇

第七章 元金償還……………九一

第一節 償還の時期……………九一

第二節 償還に付き債權者の意向……………九三

第三節 償還の方法……………九五

- 第一目 總論及抽籤償還……………九五
- 第二目 買上償還……………九七

第四節 公債償還に關する注意……………一〇三

- 第一目 總論……………一〇三
- 第二目 減税……………一〇四
- 第三目 減債……………一〇五

第四目 事業の擴張……………一一六

第五節 償還の必要……………一一八

第六節 償還の財源……………一二〇

- 第一目 臨時收入……………一二〇
- 第二目 償還基金……………一二二
- 第三目 官有財産併に租權の離權……………一二四

第八章 公債費負擔の輕重及難易……………一二八

第一節 元金の多少及利子拂……………一二八

第二節 政府歳入との比較……………一三一

第三節 國民の收入との比較……………一三二

第四節 起債の原因……………一三三

- 第一目 生産的と不生産的との差違……………一三四
- 第二目 明治二十七八年前の我國の實況……………一三五

第五節 内外債の區別……………一三六

第一目	外債は公債費を重ふするの傾向を有す	一三六
第二目	債權國と債務國に於ける輸出入の關係	一三七
第九章	公債の募集が經濟上に及ぼす影響	一三九
第一節	巨額の起債は資本の分配を素亂す	一三九
第二節	外國有價證券の所有と國債應募力との關係	一四二
第一目	英國の外國投資	一四二
第二目	佛獨等の外國投資	一四四
第三目	北米合衆國の趨勢	一四四
第四目	結論	一四五
第三節	生産的募集	一四七
第十章	非常準備と國債との關係	一四八
第一節	國債動産の所有と準備金と	一四八

の比較	一四八	
第二節	中央銀行の正貨準備を強大にするの必要	一五一
第十一章	公債に關する契約の變更	一五三
第一節	債務不履行の場合に於ける國と會社との比較	一五三
第二節	擔保物の選擇	一五五
第三節	整理の精心及目的	一五六
第十二章	地方債	一五八
第一節	國債と地方債との區別	一五八
第一目	地方債の期限	一五八
第二目	地方債と國債との間に存する法律上の差違	一六〇
第三目	各國に於ける地方債に關する法制の差違	一六一
第二節	地方債の原因	一六二

第一目	市街の成長	一六二
第二目	自治体の發達	一六三
第三目	市設事業増加の傾向	一六四
第三節	地方債の效力増加の方法	一六九
第一目	轉貸法	一六九
第二目	證券用紙の供給	一七二
第三目	地方債に關する特別機關	一七四
第四目	地方債の特別財源	一七五
第五目	地方債の長所及短所	一七七
第四節	地方債の監督	一七九
第一目	監督法の分類	一七九
第二目	起債權の源泉	一八二

第一編第一卷目錄終

訂正増補 第十四版 財政と金融 〔財務及會計〕 乾

法學博士 田尻稻次郎著

第一編 財務

第一卷 公債

第一章 確定公債

第一節 種類及名稱

確定公債とは法規を以て債額、募集額及償還金高を確定するを得る所の公債にして整理公債及事業公債等の如き即ち是なり、今其種類及名稱を擧れば左の如し

- 第一 一時拂公債
- 第二 有期、定期、支拂公債

第一章 確定公債 第一節 種類及名稱

第三 有期、隨時支拂公債

第四 永遠公債

等是なり、各種其特質を有し、長短を異にす、請ふ先づ一時拂公債より之を説ん

第二節 一時拂公債

第一即ち一時支拂公債は最も單純なる者にして期限に至り一時に其元金を償還すべきものとす、元來一時支拂法は巨額の公債を起すに適せず、目今我國に於ては幸に其例なしと雖も曾て第十五國立銀行より借入れたる征討費借入は即ち此種に屬し彼の西南事件に際し一千五百萬圓を借入れ、明治三十年營業滿期の時に於て一時に支拂ふべき契約たりしなり、然るに此約を履行するときは著しく市場に影響するのみならず貸借の各當事者に不便にして其不利共に堪へ得べき所に非ず、故に實際の處分は兩者此契約に依らざることに歸着せり、今其沿革を尋ぬるに第十五國立銀行は明治十年の設立に係り當時其資金甚だ裕かなりき、然るに政府は征討費として多額の資金を要したるを以て乃ち双方共に貸借を便利とし、第

實例

十五國立銀行は五分の低利にて政府に此巨額を貸付せり、斯の如く該行は國事に盡したるの功少からざりしを以て其發行紙幣の準備金を減少するとを許され他の國立銀行よりは其資本に對して割合に多くの紙幣を發行することを得たり、幾くもなく西南事件平定し尋で紙幣増發の弊を生じ之が消却の必要起れり、元來此増發紙幣は政府發行の紙幣のみならず國立銀行の發行紙幣も其一部を構成するを以て、獨り政府紙幣の引上のみを以て其弊を矯むるを得ず、故に政府は明治十六年に於て第十五國立銀行に政府は五百萬圓を返還すべきを以て同行は其増發に係る紙幣を引上ぐべき事を申込たり、幸にして此契約整ひ政府は同時に國立銀行紙幣合同消却の計畫を立てることを得たり

是に於て曩日の約即ち明治三十年營業滿期に一時に返還することは事實上止みしを以て當時既に契約の一部分は變更せられたり、然れども殘額尙ほ一千萬圓を存し、此巨額を明治三十年即ち營業滿期に至り一時に返還せられん乎、嘗に双方に困難なるのみならず財界上既論の如き憂あるを以て漸次之を返還すべしとの協議整ひ遂に三十年營業滿期に至りて未償還額は僅に凡そ四百萬圓となり平穩

結末

に其局を結ぶことを得たり。由是觀之、一時支拂の如き理財上、屈伸の餘地なき計畫は巨額の公債の場合に於て採用すべきものに非ず。假令債務者が返債力を有するも一時に巨額の返濟を受るときは債權者も多少不便を感ずべく、又債務者が負債返却の力を有せざる場合には債權者損失を免れざるなり。要するに一時支拂法は債權者債務者双方の爲め不便にして小額の公債に適すべきも到底巨額の公債に適合すべきものに非ざるなり。

第三節 有期定額拂

第一目 定額拂は財政の屈伸力を奪ふ

有期定額支拂の方法も亦圓滑を缺き財政に屈伸の餘地を存せず、即ち其方法は例へば五箇年据置き六箇年目に若干額七箇年目に若干額と云ふ如く以下順次此の計算法に依り償還することを募集當時に於て約するものなり。故に此方法に據る時は假令財政に餘裕あるも進て國債を償還する能はず、餘裕なきも強て返還せざる可らず。故に或は高利の公債を起して舊債を返還せざる可らざるの窮境に陥

ることなしとせず、而して此法は概ね償還期の第一年に於て返濟したる元金の利子は次年の元金償還額に加へ滿期に至るまで漸次此方法を以て進行し、所謂元利濟崩法に依るものにして財政の緩急を問はず其規約は必ず之を施行せざるを得ず。若し然らずんば國の信用地に墜るを以て已むを得ざれば元金償還の爲め不良の租税を起し或は新債を起すの手段に依らざる可らず。然れば即ち舊債の利率に比して新債の利率却て高きを見るの結果あるやも測り難く財政當局をして圓滑なる操縦を試みるに由なきに至らしむるの虞なしとせず、既に我國に於ても此法に依り外債を起したること前後二回なりしも幸に明治三十年に至り總て其義務を果し今や全く消却し了れり。事既往に屬するを以て今日之を論ずるも益なしと雖も當時外國市場に就て我國の信用今日の如くなるを得ず此方法に依るの已むを得ざりしは吾人の甚遺憾とする所なり。然れども幸に其債額少かりしを喜ぶ

第二目 借換の便を缺く

又此種の公債は前記の不便の外借換を爲すに便ならず、之を我國の經驗に徴するに彼の外國新公債なる者は明治六年の起債に係り其年利七分にして其期限は

我國の實

同三十年なり、故に爾來明治十九年に至り紙幣消却の結果我國の市場好況を呈したるを以て六分利以上の公債は之を五分利に借換ふるを得たり。故に此時を機とし五分利附公債を起し直に之を償還するを得策とせしも如何せん起債の方法其宜を得ざりしを以て十有餘年の間七分の高利を支拂はざるを得ざるの已を得ざる窮境に陥れり。募債方法の以て注意せざるを得ざる夫れ斯の如し。然れども今や此の如き外債全く其跡を絶ち、明治三十二年の一千萬磅の公債は有期隨時支拂にして我に屈伸の餘地あるものとす。凡そ世の事を處するや時と場合とに依り屈伸するの權能を有し、變通の餘地を存するに非ずんば到底時局の平穩を望むを得ず。其据置年限を以て之を論ずれば前記一千萬磅の公債は十箇年にして少しく長きに失するが如き憾なきに非ずと雖も、近年は長期据置の法最も行はれ我國亦一般風潮の餘勢を免れざるものあるに似たり。

第四節 有期隨時拂

有期隨時拂なるものは例へば五箇年据置き六箇年目より向ふ五十箇年間に隨

我國の經

想像し得べき一の缺點

時現金を拂ひ盡すの法にして此法に依れば政府は財政の都合により据置き年限經過後は何時たりとも最長期限までの間に隨時元金を償還するも又或は五十年目に至り一時に償還するも法の問ふ所に非ず。幸にして我國現在の内外國債は概ね此方法に依り彼の金祿公債等皆此類に屬し、獨り舊公債の年賦支拂の制に依るある耳。是に於てか我國は借換整理を行ふに障害なく明治十九年に至り始めて正式の借換法を施行することを得たり。今日に於て之を視れば殆ど試験の觀なきに非ざるも、亦以て財政の好例たるを失はず。隨時支拂の法に據るときは不幸にして過般の北清事件の如き變亂發生し意外の費用を要するに際しては公債の償還を停止し以て一時の急を支へ事情治まるの後除るに償還法を講ずるの便あり。是れ此法に屈伸の餘地あるの賜ものにして財政と市場との關係を圓滑ならしむるに與て力あるものとす。若し夫れ定額支拂ならん乎到底運用の妙なし。

然りと雖も隨時支拂も亦其缺點なきを得ず。他なし此法に依れば債務の最長限例へば五十箇年迄は償還を施行せざるも隨意なるに反し其期に至れば財界の不利を顧るに暇あらず償還の義務を果さざるを得ざること是なり。不幸にして一旦

財政を誤り償還を等閑に付し疫病饑饉戦争の如き不慮の事變其償還期に至りて發生せば一層の困難を加ふるの虞あり天下此の如き不幸は容易に之あらざるべきも常に注意し天の未だ雨らざるに牖戸を網繆するは爲政者の正に力むべき事に屬す慎まざるばある可らず

第五節 永遠公債

確定公債の最も發達したる者を永遠公債とす此法は例へば五箇年擱置き六箇年目より隨時償還し償還期限を定めざるものなり故に此法は債權者に期限の利益を與へざるものとす是れ一見甚だ理由なきものゝ如しと雖も大に翫味すべきものあり元來公衆が國債の募集に應ずる所以のものは其目的元金の償還にあらずして利子を得るにあり若し夫れ然らざれば公債價格の昇降に乗じ投機を爲さんとするにあり故に公債證書の所有者は必ずしも元金の償還を必要とせず若し又其所有者にして事業を企圖せんとするときは公債を擔保となして借資する歟又は之を賣却する歟資金を得るの道頗る容易なり且つ公債を所有するは現金を

特色及便宜

所藏するより寧ろ安全なれば信用ある文明國に於ては近時最も此方法を實施す我國の如きは未だ之を行ふに至らずと雖も他日多額の借換を施行するに際しては此法に據るを得策とす然れども公債は國の負債にして其何種に屬するを問はず結局の償還は之を努めざるを得ず政府は法の責むる所なきを奇貨とし償還を等閑に付するを得ず蓋し今日に於ては我國の人情期限なきの貸借を見て奇異の感を起すなきに非ざるべしと雖も其目的前述の如くなるを以て一も怪むべきとなし元來公衆が元金の償還を欲するは公債價格の下落する場合の外之なしと云ふを得べし永遠公債の便利なる已に此の如くなるを以て英佛の如きは永遠公債の法大に行はる亦偶然に非ざるなり我國に於ても到底此法に歸依するや知るべき耳何となれば此法は法則簡略にして市場及財政上に交々便利なればなり

第六節 各種の配合

公債は永遠公債を本とし他種の公債は便宜の爲め少額を存するを可なりとす若し夫れ然らずして期限に至り必ず多額を支拂ふの要ある有期定額支拂公債が

一國公債の多額を占むるときは所謂屈伸の餘地なく且つ借換の手段を取るに苦しむべし、夫れ借換は變に依らず奇に頼らず當然債務の辨濟を施行するの一方方法にして財政上最も便益あるものとす、古今内外の名士にして苟も財政に志ある者の小心翼翼唯其機を逸せざらんことを恐る眞に故あるなり

今一例を設けて之を論ぜんに例へば現に市場に於て公債に放下したる資金の利廻り五分なるに、政府の支拂ふ公債の利子八分なれば是れ宜しく借換を決定するの時なり、然らば即ち國家は利率の差三分を利するを以て國費を減少する尠少なからず、加之市場の状況斯の如くなるに尙は八分利を拂はん乎公債は平價以上に飛躍し其間無用に投機を惹起するの患あり、蓋し予の論旨は或は投機者流の喜ばざる所なるべしと雖も國家全軀より之を視れば永遠公債は利あつて害なきの法とす、只其便利大なるを以て當局者が償還を怠慢に附するの弊を生ずる杞憂なきに非るも當局者は固より其職を盡すものと推定せざれば天下の事其根據を得るに由なし、之を要するに公債は永遠公債を根元とし其他の種類は漸次其使用を減少するは人文の發達上自然の趨勢なるべし、果して然らば財政の一角安全に歸

し、金融亦非常の變動を受けず兩者常に密着して屈伸自在の道を得るや必然たり、苟も然らずして一たび屈伸の餘地を失ふときは遂に無理の處置に出でざれば止まざるに至るべし、故に此の如く公債の種類を組立て國庫の必要に應じ財政の屈伸を圖り貨幣市場を調和するを以て得策とす、其注意を要する哉論を俟たず

第二章 流動公債

第一節 總論

確定公債に就ては粗々之を陳述せり、故に今一步を進めて流動公債の事に論及せん、此種に屬する公債の實體は大藏省證券郵便貯金預金規則に依る所の預金及保管金、供託金等にして其金額に限度あるに非ず、政府の需用なきも多額に昇り、其需用あるも少額に止まり、隨意に其高を増減する能はざる所のものたり、預金の如きは利率の昇降を以て多少其増減を計るを得べしと雖も、斯の如きは民設預金機關の利害に關し甚きに至りては之と競争を惹起すべきを以て斷じて國家の爲す

べき事に非ざるなり、故に預金政策が受働の地位を守るは素質上已むを得ざるの情勢なり。今是等諸債務に流動公債の名稱あるは確定公債に對する反稱に外ならず、而して預金制度は佛白兩國に於て最も發達す。抑々國家が此の如き施設を爲すは其目的種々あり、請ふ先づ大藏省證券より之を説かん

第二節 大藏省證券

第一目 大藏省證券の本分

元來大藏省證券なる者は國庫一時の融通の爲め利付若くは割引にて發行する短期の公債證書にして其表面に元金の金額は勿論償還期日及利子又は割引歩合等を記載したる者なり。世人多くは之を以て國庫の發行する行政上の手形となし債券に非ずとするも、其存在は即ち國庫の負債の成立を示すものにして廣く之を解釋するときは固より一種の債券たるに外ならず。我國の大藏省證券は明治十七年布告第二十四號(三十五年法律第一號を以て第三條及第四條改正せらる)に依り發行するものにして、其目的は會計年度内に於ける一時の歳入不足の填補をなし

年度限り
の大藏省
證券

以て年度の進行を全ふするにあり而して償還は發行年度の收入を以て之を爲すものとす。抑々經濟裕かにして財政整頓したる國に於ては決算に至り歳入の不足することなく多少の歳入殘餘を見るべしと雖も年度進行中にありては一週年過不足なきを期するを得ず、然れども國家の歳入歳出は單に國庫出納の都合を以て之を左右するを得ず、租税の納期は納税者の便宜及市場の景況に注意せずして之を定む可らず、然れども又國家は納期至らざるの故を以て支拂を延滞する能はざるなり、唯々金融上より之を視るときは例へば益暮の如き民間恒例の決算期に於ては國庫に收入する者は成るべく之を少くし其出る者は之を多くし以て融金の調和を圖らざる可らず、故に支出の多き月に必ず收入を多くし支出少き月に收入を少くするは至難の業にして又多少市場に有害の影響を及ぼすなきを保せず、此の如き時に當り其過不足を調和補綴するは實に此證券の動作與て力あるものと云ふべし

前記の如く我國大藏省證券の償還は其發行年度の收入を以てする規定にして現行法の下に於ては年度を越す所の證券は之を發行する能はずと雖も、外國に於て

年度の補綴
の爲に發行
する大藏省
證券

は往々年度を超越する所の大藏省證券類似の短期公債の例なしとせず、即ち英國に於ては此種の公債三種ありて、一をツレジュリビル、即ち金庫手形と稱し、三箇月据置き九箇月間に隨時償還する者にして我大藏省證券に酷似す、二をエキスチエカピル、即ち國庫手形と稱し、毎年一回期日を報告し所有者の請求に應じ其一部分を償還し、五箇年間に悉皆償還し盡すものとす、三をエキスチエカホント、即ち國庫證券と稱し、六箇年間に豫め期限を定めて償還すべきものとす、而して三種共無名記にして、第三種に限り所有者の請求に依り記名に書換ゆることを得べきものとす。我國は今日に至るまで年度閉鎖の爲にする大藏省證券發行の必要を見ざりしと雖も、國勢の進歩に隨伴し用度多端に赴き早晚之が必要に遭遇することなきを保せず、然りと雖とも此の如きは固より冀望すべきことに非ず、而して特別の必要あるときは議會の協賛を経て短期の公債を募集し得べく敢て永久に一般法を以て年度を補綴する所の短期の證券即ち英の國庫手形若くは國庫證券の如き者を豫想し置くの必要なかるべく、斯の如きは却て濫用の虞あるを以て寧ろ之なきを好しとす。

第二目 直税國と間税國とに於て大藏省證券發行の必要の差違

夫れ大藏省證券の効用概ね此の如し、而して其必要直税國に多くして間税國に於ては比較的は少し。例へば茲に同じく二億圓の收入ある甲乙兩國ありて、甲は直税を以て收入の基礎とし乙は間税を以て其基礎とするとせん、然るときは甲國に於ては納期と支出期との間に懸隔あるは其常勢なりと雖も、乙國に於ては歳入滾々として國庫に入り間斷あることなく月々の收入高に大差あることなし、果して然らば甲國に於ては比較的多額の大藏省證券の發行を要するや知るべき耳、我國の如きは輒近間税の收入年に多を加ふと雖も尙ほ未だ直税國たるを免れず、而して酒税の如き其素質間税に屬するも尙ほ一定の納期ありて本問題上直税と選ぶ所なし、然るに二十七八年前後數年間殆ど大藏省證券の發行を見ざりしは頗る奇異の感なきに非ざるべし、然りと雖も是れ明治二十七八年以前は屢々歳入に餘剰を生し其處分を要せしも時方に憲政の初期に當り其動作圓滿なる能はず屢々議會の解散に遭遇し國債を償還せんとするも、租税を減少せんとするも議會の協賛

過去我國數年
間發行の原
因の發しな

を得るに由なく國庫は徒らに巨額の剩餘金を有せしに由るものなり、爾後其餘剰金を支出し畢りしと雖も、暫時は償金其他各種の特別會計の現金存するありて甲乙彼是の間融通をなし大藏省證券を發行するの必要を見ざりしに由るものなり。然れども將來如何なる事故あるやも計り難く、風波長なへに穩かなるを期するを得ず吾人も亦世人と其苦しみを分つの期あるべきは疑を容れず、既に三十四年以來大藏省證券の發行は殆ど財政上の常事となり寧ろ憂ふべきの現象を呈せり、豈に寒心せざる可ん哉。

第三目 大藏省證券發行制限の方法及期限

大藏省證券の發行には其制限を設けざるを得ず而して之を設くるに二方法あり即ち

- 一 毎年の豫算に於て現發行高の最高額を定むるもの
 - 二 發行額を定めずして利子金額を定め其範圍内に於て發行するもの
- 是なり。兩者孰れが善良なる乎敢て定説あるに非ず、我國に於ては會計法第九條に毎年豫算を以て現發行の最多額を定むることを規定す、獨佛兩國の例亦た大同小

法律を以て期限を以て不定するを以て不便とする

異にして獨は一億馬を以て限度とし年度後六箇月を以て失効の期とし其範圍内に於て全權を大藏大臣に付與す。佛は毎年の豫算法を以て之を定め、例へば發行年額を四億法とし期限の長短に依り利子に等差を付す、例へば四箇月期の者は一歩五厘五毛、五箇月乃至十二箇月の者は之を二分とするが如し、兩國共に證券の月數を定めざるに似たり、凡そ法規を以て大藏省證券の月數を定むるは不可なり、我國に於ても當初は三箇月六箇月九箇月と定めたりと雖も、多年の實驗上頗る其不便を感せり、何となれば國庫が現金を要する期間は一箇月なることあり、四箇月乃至七箇月なることあるに舊法の如く之を限定するときは、例へば一箇月間の要あるに當ても三箇月の證券を發行せざるを得ず、四箇月の必要に對しても六箇月の證券を發行せざるを得ず、國庫は償還し得べき餘金あるに拘はらず、此期限の爲に徒らに利子を拂はざるを得ざるの不便あればなり、當時は一の特例行はれ、國庫に餘金あるときは期限に拘はらず償還を爲し之を繰上償還と稱せり、然れども斯の如きは獨り國家の機關のみが應募者たる時は之を行ふを得べきも然らざる場合に於ては所謂期限の利益を奪ふものなるを以て固より爲し得べきの業に非るなり。

故に明治二十五年に至り法律第十九號を以て舊制を改め證券發行期間の最長期間を十二箇月とし其範圍内に於て伸縮し得るものとせり、即ち國庫の入用期間一週なる時は一週間十日なる時は十日限りの證券を發行し得るものとし大藏省證券に關する政策茲に一進歩を呈せり

第四目 大藏省證券の利用併に中央銀行との關係

大藏省證券は一時の遊金を放下するには便利なるものにして銀行の貸付の質物に供するが如きは最も然りとす、即ち之に資金を投ずるは殆んど手形を割引するが如く某月某日に於て現金を得ること明了にして而かも其確實なるは商業手形に異ならず、市場の情況に依りては其上位に居るものと云ふを得へし、然るに我國往時の經驗に依るに、其應募者は國庫の預金部と日本銀行とにして一二の場合の外公衆の之に應せし者なかりき、是れ蓋し其創設以來年を経る久しからず、加ふるに發行甚稀にして世人未だ其便利を知らざりしに由るなきを得ん哉、然れとも今や即ち然らず人智大に發達し復た往日の比に非ず需用甚だ廣く發行容易なり

英國の如きは各種の大藏省證券市場に行れ資金放下の爲め頗る便宜なる者と

國庫の爲
に於ける中
央銀行の
融通

認めらる、英國々庫金の取扱は別に述ぶる所あるべしと雖も、今其一端を説かんに英國に於ては國の歳入は中央銀行營業部の預金となし、國庫の支出は中央銀行宛の切手を以てす、而して其預金中央銀行に拂底する時は、直ちに大藏省證券を發行し其高を預金とし、以て國家必要の支出に充つるものとす、然る時は中央銀行は市場の情況を觀察し徐ろに他の銀行其他資本家又は公衆に之を轉賣す、又時に外國人の之を購入する者なしとせず、然れども外人は概ね長期の公債を好み短期證券に向て資金を投ずる甚だ稀なり何となれば短期證券は信用の度合同等なれば之を他國に求むるより自國に求むるの便利なるに如かざればなり

右の外國庫の融通上にも甚だ便利なり則ち佛、白、埃、匈、帝國の中央銀行は若干額を國庫融通の爲め貸付するの義務を有す、此の貸付に對し大藏省證券を發行し時としては無利子なり佛國は此權能を利用し西曆千八百七十八年に同千八百九十六年までの期限を以て八千萬法を一分の低利を以て借入れ期限満了に至り無利子を以て之を借繼けり、元來政府が斯の如き借入を爲すは國庫の融通上時に或は已を得ざるも其金高は中央銀行資本額以内にあるを要す、何となれば資本金は概

して準備中にあるを以て之を政府の借入證と爲すも確定公債證書其他の確實なる證券と爲すも差違なしと雖も、其高を超過するときは預金又は發行紙幣を使用せざるを得ず金融上に影響するを免れざればなり、而して政府借入の爲め制限外發行を促がす如きは最も不可なり何となれば市場の爲め發行するものは事業上の需用ありて後ち發行するも國庫の爲めにするものは市場の需用に應ぜざればなり

之を要するに大藏省證券は財政上缺く可らざる器具にして且つ金融上便利なるものなりと雖も、無謀に之を發行して多額に至るときは償還上非常なる困難を惹起すべし即ち大藏省證券は其期限短く操縦の餘地なきを以て其額巨大なるに至れば財政を窮局に陥るゝの虞なしとせず、故に一時補綴の爲め小額の發行は已を得ざるも多額の發行は大に慎まざるを得ざるなり

第五目 大藏省證券額面に就ての注意并に一般公債法との關係

大藏省證券は之を長期公債證書に比して賣買其他の取扱一層便利なるを以て

其額面金額過少なるときは、或は紙幣の代用物となり物價に關係するとなきを保せず、故に其證書の額面は之を相當の額とし過少なからざるを要す、而して記名證券は授受の際書換の手續を要するも無記名證券は之を要せざるを以て額面金額過少なるときは流通殊に速かにして市場を紊亂するの虞なしとせず、只大藏省證券は利子の關係あるを以て假令額面小なるも紙幣の如く流通に便利なること能はざる耳、即ち證券は利子拂の期に臨めば價格騰貴し、利落なるか若くは其支拂期に接近する時は下落するを以て之を物品と交換するに當り煩密なる計算をなすの困難あり、然れども其額面過少なるときは多少紙幣に代用せらるゝや疑ひなし、以上は大藏省證券の割引を以て發行せらるゝ者に就ても亦同じ、佛國の如きは此弊を慮り、證券は普通公債證書たると、大藏省證券たるとを問はず、五法以下の利子を生ずるものを發行せざるの規定を設く、然れども其額面尙ほ過少なるの憾あり、即ち五法の利子を生ずる證券は利率を年五分とすれば百法の證券なり、今百法は凡そ我三十八圓七拾錢なるを以て其額頗る少なりと云はざるを得ず

元來此の如き事項は一般公債法を以て之を規定するを便利とす、我國に於ては

三十九年法律第三十四號及同年大藏省令第二十三號を以て國債法及國債規則を發布し後者第五條に國債證券の額面は特別の規定あるものを除くの外五十圓、百圓、二百圓、五百圓、千圓、二千圓、五千圓、一萬圓の八種とすと規定し特別の場合の外は證券は五十圓を以て最少とし、債權の登録、元利の時効の如きも同法律を以て之を規定す蓋し當を得たりと云つべし、國債證券の登録等に關する手續等は甲種附録第二號參觀)

第三節 國庫預金

第一目 預金機關及資金放下の區域

國庫預金の事を述るに當り先づ指を屈するものは郵便貯金とす、此種の預金は諸國に於ては非常の巨額に達し英國の如きは西曆千九百年の一億三千五百五十萬九千餘磅より年々増加し西曆千九百五年に於ては一億五千二百一十一餘萬磅となり預金人員九百九十三萬三千四十九人の多きに達せり、其他伊太利は四億千三百五十餘萬圓佛國は約三億三千萬圓、白耳義は二億九千五百六十九萬餘圓、其他

供託金及
保管金

枚舉に違あらず、而して佛、白の預金寄託部即ち、ケイ、ス、デ、ボ、リ、エ、リ、コンシグナシオンなる者は頗る廣大にして殆ど完全に發達せる機關なり、該部は金錢の外賣物及貴重書類等も亦之を預る、我國に於ては未だ此の如き盛大の域に進まずと雖も、已に預金規則十八年布告第十三號の外供託法三十二年法律第十五號及保管金規則二十二年法律第一號ありて年々發達伸張の勢あり、元來供託に關しては商法中賣買の章及民法中債務辨濟の款に規定ありて吾人の權利を保護し又は義務解除の上に頗る便利を與ふ、然れども其供託金安全ならざる時は其効用皆無に歸すべきに依り別に方法を設けて其保管を嚴にするの必要あり、是れ國家が預金部を設くる所以なり、其他預金部は民間の貯金機關と併行し其及ばざる所を補足するを目的とす

資金放下
の區域

流動公債の素質凡そ斯の如し、而して國庫の預金にも民間預金の如く定期預りと當座預との別あり、國庫と雖も其預金の利殖を圖らず徒らに國費を以て預金者に利子を拂ひ得べきものに非れば確實なる方面に向て之を運轉し、國庫の損失を豫防せざる可らず、而して其資金放下の目的物に就ては嚴重に之を規定し、單に利の

厚きを選まず、有効且つ確實に之が放下を爲さざるを得ざるや論を俟たず、然れども又地方經濟及社會の改良を目的とする設備に對し、援助的貸付を爲すは、撰擇其宜きを得たるものと云つべし、佛の地方債應募、白耳義の建築會社貸付の如きは即ち其好例なり。

元來流動公債は大藏省證券と雖も期限短くして償還を延引すること能はず、而して預金、保管金の如きは定期のものを除き何時引出さるゝやも計り難く、財政上専門的に之れを稱して爆發的原素と云ふ、英語に所謂「エキस्पローシヴ、エレメント」なる者即ち是なり、今單に國庫の都合より之を視れば預金の如きは一厄介物と謂ふを得べし、然るに國家が何を以て之を引受くるや、是れ實に趣味の存する所なり、知るべし、彼の供託の如きは權利の保全又は義務の解除の如き要項に關し、預金の場合に於ては利益を主とせず、公益を主とす、民間貯金機關の効力固より大ならざるに非ざるも、凡そ民設の機關は利益を主とせざれば成立の道なく、常に公益若くは慈善的の目的に副ひ難きの憾なしとせず、故に之を官設の機關と同視する能はざるは眞に勢の已むを得ざる所なり、固より貯金事業の如きは純粹なる營利

官設預金
機關の必
要

事業に非ずして慈善の趣旨を加味するを要すべしと雖も、民設機關は結局利を捨て以て進行する能はず、政府の預金機關と雖も、其損失を國民に負はしめ預金者を保護するが如きは固より其道を得たるものと云ふを得ず、然りと雖も政府事業は、割賦支拂の要なく、只其基金部の收支を償ひ預金の元利支拂に差支へざるを以て足れりとす、而して其の支拂は國庫全體の力を以て之を擔保することを得べくして、國庫は國民の爲め安全に其の預金を保管し其の利益を圖り得べき地位に居るものと云ふを得べし。

然るに今預金事業を獨り民設に委ねん乎、利益小なるを以て小額預金の取扱ひを厭ふは必然の勢なり、假令廣告の爲め一錢と雖も預るべしと揚言するも、實際は泰山の土壤を譲らす大海の細流を辭せざるが如くなる能はず、百圓の預金持參者に對すると一錢の預金者に對するとは言語面容自から異なる所なきを保せず、是れ情勢の已む可らざる所とす、今一錢を持參する者日に幾萬人ありとせん乎、其取扱の手數は一口百圓を持參する同數の預け人あると選む所なく同一の順序を盡さざるを得ず、故に單に利益の點より之を見れば預金機關の爲には大小預金の得

私設機關
の弱點

失比較せずして明かなり、然るに政治の目的は利益を求むるに非ずして當然公益を高むるにあれば、貯蓄獎勵の爲め假令些少の費用を要するも或は之を爲すの必要なしとせず、只特に之か爲め納税者の負擔を増さざれば即ち可なり、況や收支相償ふの場合に於てをや、凡そ公益慈善の意を含むこと多き事業は之を公設とするに適し、民設とするに適せず、然れども貯金事業の如きは民設機關も亦必要なるを以て二者相須て細大洩さず、緩急相應じ、以て民の利益を計るは國家の經濟上實に策の得たるものにして殆ど必要の事項と云ふを得べし。

第二目 危険の豫防併に利率定め方の注意

斯の如く國家は貯蓄の爲に盡力すべきも之が爲め國庫の損失を生ず可らず、夫れ當座預金は預金者に於て何時と雖も之を引出し得るは世人の熟知する所なり、而して定期預金も亦期限に至れば預金者は之を引出し得るの權利を有す、故に預かる者は常に其義務を果し得る地位にあるを要す、加之預金には利子を附せざるを得ざるを以て常に利殖の道を圖らざる可らず、而して引出しの最も多き時期は國庫も亦概ね餘裕なき時なれば或は預金の操縦に困難を來すも計り難きを以て

預金金額の制限

引出の豫防を要するは必然の事とす、然れども其方法たる決して貯蓄者に不利不便を與ふるものたるを得ざるは論を俟たず。

元來國立の預金機關は前記の如く零碎の資金を集めて以て民利を厚ふせんとする主意なるを以て若し多額を出納するの要あらば獨り國立機關に依らず民設の機關により充分其目的を達するを得べし、故に豫防策の一として各國概ね一年中の預金高及び其極度高例へば二百圓、五百圓と云ふが如きに制限を置かざるなし、其理由は五百圓以上と云ふ如く纏りたる金員の預入者は官設機關に依らずして普通の貯蓄銀行に依るも決して妨げなく、銀行亦之を歓迎すべく、而して政府亦之に依り多少危険を免るべしと云ふにあり、然れども民設機關若し堅固ならざれば此豫防法も亦實際に望む可からざるなり。

次の豫防法は預金の金高若干以上に達するときは、預金部は預入者の望に依り又は國家の權能に依り之を公債證書に組換其所有に係る者と引換るを通例とすること、是なり、例へば預入高二百圓に達するときは預入者の請求に依り之を公債證書に組換へ又は千圓以上に至れば假令預入者の請求なくとも國家は出納の安

預金を公債に組換ふる方法

全を期するに必要なりと認むる場合に於ては公債證書に組換ふる權能を保有することあり、此の如き豫防行爲を以て國家は預入者の利益を害せざる限り自衛の爲め出納の安全を計らざる可らず。元來預金は不時の引出請求に遭遇するの虞ありと雖も、公債の利子は其年度の豫算に上り増減あることなく、而して其率亦預金利率より高きを以て毫も組換を得たる者の利益を害することなし。固より預金と云ひ公債と云ひ同じく國の債務たるも預金は其性質危險を加味して安全ならず、爆發質を帶て破裂の虞あり、之を公債證書に組換ふるは國庫の爲めには危險の元素を除き預金の爲には利益を増加し一舉兩全の良法たるや疑を容れず。我國に於ては明治二十三年法律第七十五號預金に制限を置き公債證書に交換の件及同年法律第六十三號郵便貯金條例の如きは頗る吾人の意を得たるものあり、只其制限金額に就ては世の進歩に隨ひ當否の差違を生ずべきは勢の然らしむる所たり。今便宜の爲め現行の制限金額を示さん、預入者の請求に依り預金を公債に組換へ得るは預金の高三百圓以上に達したるときにして政府の職權上預金を公債に組換へ得るは預金が二千圓以上に達したる場合とす、然れども後者は幸にして其必要

を生せず未だ實施せられたることなし

又外國の例を見るに、輒近英國に於ても郵便貯金部に於ける公債の購入漸次増進し、年に其件數と金額とを増加するの勢あり、是れ近年公債價格の降下せしに由るもの多きに依るべしと雖も、抑々亦組換が公私の爲め少なからざる便宜を與ふるに依るなきを得んや、試みに其實況を掲載すれば左の如し

外國に於ける公債の買換機關

第一表の一

西曆年次	件數	金額	公債價格
一八九九	二六、五三一	一六、七〇三、五四〇 ^円	一〇七、四分の一
一九〇〇	四一、〇三〇	二八、三〇九、一八〇	九九、八分の五
一九〇一	四六、五五〇	三一、九二一、五四〇	九四、四分の一
一九〇二	四〇、八九三	二六、九四四、四七〇	九四、八分の三
一九〇三	四七、七二六	三一、三一七、二二〇	九〇、四分の三

又爾後の英國の景況は左の如し

第一表の二

	西曆千九百四年	同千九百五年
預金者の爲の購入	二五、〇七五、四六〇 ^円	二二、一二二、八五〇 ^円
賣却	一一、三一五、四三〇	一五、〇七二、二一九
年末公債所有者	一三八、五八二 ^人	一三九、九九二 ^人
右の金高	一七三、五七九、五〇〇 ^円	一七八、七七六、四四〇 ^円
收支不足	一一、二〇、九〇〇	八八〇、九四〇

右不足の減少は明治三十八年一磅以下の預金を受取らざる事に爲せしに由る、是れ公債利子の減少より生ずる収入の減少に起因するものにして豈に郵便貯金制度設置の本旨ならんや

佛國に於ても國庫を経て賣買する公債の高年に増加し西曆千九百五年の第二期(四五六ノ三ヶ月)に於ては賣二千三百五十餘萬法、買六千二百六十餘萬法にして同千九百四年の同時期には賣二千七十萬餘法、買五千七百九十餘萬法にして買の方何れも多し、而して西曆千九百五年の購入價格は四月は九十九、二五、五月は九十九、三六、六月は九十九、〇六にして利子は共に三分なり。英國に於ける西曆千九百六

郵便貯金
に關する
我國の
例を
立る

民設機關
との衝突
を避る
るを
要す

年三月を以て終る年度の購入高は一八、一二六、四八八磅にして購入價格は九〇、五〇〇なり

郵便貯金に就ては明治二十三年法律第六十三號を以て一人一度の預金高を十錢以上とし一人一日の預入高を五十圓以下とし、其總高は元利合せて五百圓に限り、然るに政府は卅七年法律第二十三號を以て前記五十圓の制限を解き單に十錢以上とし五百圓を改めて一千圓と爲せり、今兩者の長短優劣を比較考慮するに後者は前者の事理整然たるに若かさるの憾なしとせず、組替に就ては新法は其の第六條を以て新たに制限超過に對する強制組替の道を聞き舊法の不備を補ひ、更に第七條を以て郵便切手及び支拂期開始の證券を以て預入金に充當するの道を聞き聊か預入者及金融の便を圖り、尋て遞信省令第三十六號を以て郵便貯金規則を發布し切手預入に關する規定は第四十七條以下證券預入に關する規定は第五十一條以下を以て之を定め頗る面目を改めたり

危険の豫防凡そ斯の如し、然り而して商賈の資金は其額大にして出入の時期定まらず、故に其資金は當然普通銀行に預け入るべきものにして細民の零碎なる資

金と大に其性質を異にす、又官設機關の預金利子は民設銀行預金利子よりは少しく歩合を低くし、以て預金吸收の競争を避け且つ容易に歩合を動かさざるを好しとす

第三章 年金

第一節 總論

區別

確定公債及流動公債の如何は粗々之を論結したるを以て茲に年金の事に論及すべし、凡そ年金の普通公債と異なる所以のものは普通公債は元利を區分して之を支拂ひ、元金償還に至るまでは只利子のみを支拂ひ、満期若くは當籤の時に至りて元金を拂ふも、年金は即ち然らず、其期限中元金の一部分と殘留元金に對する利子とを毎年支拂ひ、元金は遞減して逐年減少し終に消滅に歸するものとす、而して年金に二種あり

- 一 終身年金
- 二 有期年金

組方の方法

是なり、其他賞勳年金又は英國に行はるゝ死後拂渡すべき年金等ありと雖も前者は國家が勳功に酬ゆる者にして、後者は生命保險の類に屬し本款論ずる所の年金と全く其類を異にす、其所謂終身年金なる者は、例へば茲に千圓を拂込む人あらんに政府は其者に對し終身毎年若干金額を拂ふことを契約し、其人の生命の上に權利を設定するものなり、有期年金は政府が若干金額を受取り、其元利支拂の爲め例へば十箇年若くは三十箇年の期間に毎年若干金額を拂ふの法とす、而して年金の期間三十箇年なりとせば、政府は毎年元金の三十分の一に利子を加へたる金高を拂ひ以て進行す、故に其元金は年々遞減し隨て其利子を減少す、即ち初年は元金の三十分の一を支拂ひ、其利子は拂込み元金の全軀に對する者なるも、次年に於ては元金の三十分の一及其元金の三十分の廿九に對する利子を支拂ひ、以下此の如くして進行すべきなり、然りと雖も斯の如くなるときは年金者の年々得る所の金額一定せざるを以て受領者の爲に便利ならず、故に其受領金額を一定せんが爲に期間中に支拂ふべき元利總額の平均を取り毎年仕拂ふべき高を一定するものとす

第二節 終身年金

第一目 設定の根據

有期年金は其取扱甚だ單純なりと雖も修身年金に至りては多少複雑なるを免れず、即ち人の壽命は之を知る可らざるを以て、修身年金の額を確定するには多少の想像を用ひざるを得ず、生命保險會社の如きに就き年金者の生命の平均を推定し以て計算の基礎を定むるの外他に方法ある可らず、通例は三十歳に至らざれば修身年金を許さざることとし、凡そ六十歳迄生存するものと假定し以て年金の額を定む、故に年金者若し六十歳以内にして死去すれば多少の損失は之を免れざるも年金者幸にして七十歳八十歳迄生存するときは其利徳となるべし、然るに今や生命保險の術大に進歩し其經驗亦久しきを以て生命の平均數概ね違算なく長短相補ひ、得失相償ふとを得るに至れり

元來國民全體の生命に就て之を論ずれば、其平均年齢は凡そ二十七八歳なるべしと雖も、年金の關係に於ては此平均年齢を用ふべきものに非ず、抑々相應の資産

兩者の比
較は相當
なり

を有し年金を得て其生涯を送らんとするの人は生計に幾分の餘裕ありて中等以上位する者なり、而して生命保險に加入し子孫の計を爲すを得る者も亦幾分餘裕ある者たらざるを得ず、故に此二つの階級に屬する人は身體自衛の點より見るも又智識上に基づく諸般の注意を怠らざる點より視るも、之を同一等級の者に屬せしむるを得べきを以て、生命保險會社の成績は終身年金の基礎とするに頗る適當のものたるべし

第二目 効用

終身年金は人の死亡に至るまで毎年若干金額の給付を約したるものなれば年金者にして早世すれば國は仕拂の義務を免れ、其者長命なれば國家は多額を拂はざる可らず、故に終身年金證書は無論其讓渡を許さず、然れども個人の生涯中最も安全に最も多額の収入を得ることを要する場合に於ては、此年金は頗る便利なるものとす、例へば茲に父母養老の爲に其費用を得んと欲する者あり、以爲らく一年五百圓以て父母に奉ずるに足らんと、乃ち五百圓の歳入ある公債證書又は他の有價證券を買入れんとすれば、頗る多額の資本を要すべし、然りと雖も年金の法に依

れば元金の一部は毎年其利子と共に拂ひ戻さるゝを以て年額五百圓を得るに割合に多くの資本を要せざるのみならず、幸にして父母長壽なれば却て當初の拂込金額以外の所得を利するを得べく以て其便益の一端を知るに足らん

第三目 組換の必要

茲に終身年金に付き一の注意を要するは、終身年金は讓渡を許さざるを以て従軍者の爲に之を他の公債若くは年金に組換へ得る方法を設けざる可らざることは是なり。是れ國家は國民の生命の上に設定したる權利を其天壽を終らざるに先ち消滅せしめ得べき原因となり得べき事を強ゆるに忍びざるの理由あればなり。如斯微妙の點は往々立法者の注意を脱することあるを以て茲に一言す。固より一片の婆心に過ぎざるなり

第三節 有期年金

第一目 効用

有期年金の効用

有期年金は前陳の如く有期の權利にして人に專屬せざる者なれば、其證書の賣

買は固より自由なり而して或る年期間或出資に對し最も多額の歳入を得るを要する場合に最も適當す。今其適切なる例を擧ぐれば茲に一學生あり正當の教育を受け今より五年の後は必ず高等の學校を卒業し、公私の事業に従事し、大に爲すあらんことを期すと雖も、固より在學中自ら營利の業に従ふ能はず到底父兄若くは知友の助力を受けざるを得ざる者少からず。此の如き場合に當り若し父兄等が公債證書の如き者を以て學資に充んとせば一時多額の資金を要するも、五箇年の有期年金證書にして一年の學資に對する高を生ずる者を購買せば、比較的少額の資金を以て其目的を達するを得べし。獨り學生のみならず茲に若干の資本を父兄より分與せられ生産事業を開業するもの亦同様の事情あり。元來新設の事業は其開業當時より直に利益あるものに非ず、當初三五年間は多少の困苦を忍ばざる可らざるは蓋し普通の情勢なりとす。然れども衣食住の費用は其間と雖も到底免る可らず、生計の爲め其分與金の一部を銀行に預けん乎、利子安し而して方今文明國に於ては當座預金に對しては利子を付せざる場合少しとせず

然らば公債證書の如き者を購買せん乎、頗る多額の金を要すべし。此等の場合に

於ては年金證書を購買するを最も便利とす、何となれば創業の時期に當り肝要なる營業基金を比較的減少せざるの利あればなり、其世上に需用多きは固より偶然に非ざるなり、加之有期年金は讓渡自由なるを以て金融上亦終身年金より便利なり、而して國と年金者との間に利害の衝突なく最も穩當なるものとす、然れども長期間の年金は利子歩合の變動上兩者の間に幸不幸を生ずるの虞あるを以て之を避くるの方法を按出せざるを得ず、即ち四五十年と云ふが如き長期の年金を約する必要がある場合には例へば十年乃至十五年經過の後は減じたる利子相當に組替を爲すの權利を國家に保存し置くを好しとす、年金の効用夫れ斯の如し然れども昔時英國に於て行はれたる如く普通の公債利子を殊更に低廉にし年金を以て之を填補するが如きは年金の濫用にして一種の流弊と云つべし

第二目 公債整理の爲にする利用

有期年金は之を公債償還の爲に利用することを得べし、例へば茲に一千萬圓の公債を償還せんとするに當り其財源を求むるに頗る巨額にして支出に少なからざる困難を感ずることなしとせず、然る時は政府は宜く普通の公債を有期年金に

長期の
年金は
組換の
便を
得る
可
と
す

組換ふるの方法を採るべきなり、組換は固より人之を冀望せざれば行はれざるべしと雖も年金は前述の如く種々の事情に適合して便利なるものなれば、普通公債所有者中年金證書の所望者あるべくして、巨額に非ざる以上は組換は容易に行はるゝものとす、然る時は例へば政府は一千萬圓の年金證書を賣却して普通の公債を償却し其年金を三十箇年期の者とすれば毎年元金の三十分の一即ち三十三萬餘圓を三十箇年間支拂へば漸次元金を消却し以て年々の利子を減ずるを得べし、三四億圓の歳出を取扱ふ國家に於いて三四十萬圓を節約するは蓋し容易の業たるべし、而して其組換を受る方に於ても例へば五分利付百圓の三十箇年の公債なれば利子百五十圓元金百圓合計二百五十圓なるべく百圓拂込八圓の三十箇年賦の年金なれば三十ヶ年間に二百四十圓を得べく其間僅かに十圓の差あり、然るに年々償還せらるゝ三圓の元金を複利法にて増殖すれば三十箇年間に十圓十二錢餘を得べし、是に於て英國に於ては此事盛んに行はれて好結果を收む、グラッドストーン氏の如き最も之を主張せり實に老練の手段と云ふべし、我國に於ては其例なきのみならず未だ年金に關する法律も存在せず、是れ我財政上一の缺點たり方

に進んで適當の設備をなすの必要あり、人文の發達上此問題の輿論となるや疑を容れず、豫め研究を積み以て他日遺算なからんこと冀望に堪へざるなり

第四節 トンチン法

第一目 方法及組織

茲に又終身年金の一種にしてトンチン法と號くる頗る巧妙なる一方法あり、抑々此方法は西曆第十七世紀の半に於て佛國に移住し當時奇智を以て有名なりし伊太里の一銀行家ローレン、トンチン氏の考案に係り、西曆千六百八十九年始めて佛王ルイ第十四世の採用する所となり、直ちに考案者姓氏に依り之を號け爾來歐洲に於て頗る行はる、名法は名主を得て行はる實に奇遇と云つべし。今試に其意義に依り之を命名せば生存者分取法と謂て可ならん乎、我國未だ其例を見ずと雖も固より利用の道なしとせず、其方法は例へば國家若くは地方團體が年金法にて借金するの必要あるに當り普通の方法に依るときは八分割戻に非ざれば其目的を達する能はざるときに次の方法に依り借り入るべきに付き五分割戻にて應募せ

んとを同年齡例へば滿三十年の若干人例へば千人に交渉し此千人中一人死去すれば其取分は之を九百九十九人の生存者に分配し、二人死亡すれば其取分は九百九十八人に分配し、此の如くして進行し最終の生存者は自己の分の外九百九十九人分を受取ることを得べき條件を附するものなり、然る時は人の自負心に富むや此千人中乃公先づ第一に死去すべしと思ふ者一人もなく假令其終局の死亡者たるを望まざるも其半數に先ちて死すべしとは何人も思ひ懸けざる所なるべし。故に此交渉は意外に纏り易くして成功に難からず、トンチン氏は實に能く人情の機微を察し奇巧の一方法を按出せるものと云つべし、識者の考慮實に人意の表に出づ奇絶精妙鬼神を驚かす世の好評を博す誠に故あるなり

第二目 生存者の實例及數字的説明

歐洲に於ては此方法頗る行はる、曾て佛國に於て老婆九十六歳まで生存し英國に九十二の老翁あり共にトンチン法に依り金満家となりし話柄あり、已に九十歳の末路に瀕して金満家たるも其自身に於て別に必要なかるべしと雖もトンチン法に應せし者は生存者の數全數の半に達するまでは未だ必ずしも身老いたるに

非れば多少前途に望みあり、殊に慾望は人類の免れざる情にして現に肺病の如き不治の症に罹る者も自身人に先ちて死すべしと決心するは殆ど稀れなるべし況や普通健全なる者に於てをや假令百歳以上の壽を保ち全數に殿たるを得ざるも七十歳内外までは安全に生存し得るならんと自負するは人情の常なりと云ふ蓋し誣言に非ざるべし

今試に數字を以て之を推論せんに一人の出金を百圓とし應募者千人とせば其總出金高は十萬圓にして、割戻年金額の割合五分なれば、年金總額は即ち五千圓なり。今之を千人に分配すれば一人一年の取分は五圓なり、然るに數年を経て千人中五百人死去し五百人生存せん乎、五千圓を五百人に分配すれば可なるを以て一人一年の取分は十圓となるべし。是より死亡者漸次其數を増加し、生存者五十人とならん乎、五千圓を五十人に分配すれば即ち可なり、茲に於て一人一年の取分は百圓となり、其高當初の出金高と等く既に巨大の利益なり、況や十圓より百圓に至るまで生存者の爲に年々取分を増加するの利あるに於てをや人心の是に傾向するや知るべき耳、尙ほ一步を進め生存者十人に至れば一人一年の取分は五百圓にして

數字的説

最後の生存者は五千圓の全部を受領するを得るを以て、公衆も之を以て利益ある放銀法と爲すは人情の趨く所にして蓋し怪むに足らざるなり

第三目 公債整理の爲に利用するを得

此方法は一見手數頗る繁密にして巨額の公債募集に適せず國債より寧ろ地方債に適當す、然れども國家に於て之を試んとせば地方に支部を置き、各所に於て募集して募集額を中央に収集すれば必ずしも多額の募債に適用し難きに非らざるなり、而して國家は此の方法を以て低利の公債を起し高利公債の償還をなすも亦可なり、元來此法の如きは頗る巧妙にして決して人に應募を強ゆるに非れば毫も迷惑を民に及すことなく實に一舉兩全の策なりとす、加ふるに之を以て高利の公債を償還するは財政の一助たり、往時は此方法を以て會社の資金を得んと試みしことありしと雖も成功を見る能はずして止めり、蓋し私法人は之を公法人に比して其壽命長きを得ず、其閉鎖分散豫め測り知る可らざるものあはればなり、トンチン法の利用亦其限度ありと云つべし

利用の限

第四章 特別公債

第一節 籤札付公債

第一目 總論

確定公債、流動公債及年金の一國財政上に必要なるは論を俟たず其要項は既論の如し、然るに茲に又一二特種の公債あり、何ぞ哉籤札付公債、特別募集公債等是なり、請ふ籤札付公債より之を述べん

籤札付公債とは抽籤に際し花籤を設け射倖的利益を約する者なり、元來公益に基く特別の理由なく此方法に據り公債を發行するは固より不可なりと雖も、天下の變は豫め測る可らず公益の爲め倒行逆施を忍ぶは時に或は已を得ざるの場合なしとせず、相當の注意を以て其發行を試みるは或機宜を制するの一方方法たらざるを得ず然れば則ち其發行機關は必ず競争なき特種の者を選ばざるを得ず、若し其必要あるときは勸業債券發行の場合に特許するが如き方法に依る外他に方法なかるべし、我國に於ては未だ其例なしと雖も歐洲に於ては其例に乏しからず、抑

公益に基く特別の理由を要する

發行者は競争なき要するを

第一注意の點

々籤札付公債の發行は射倖心を挑發するものなれば純理上其不可なるや論なしと雖も、種々の關係上より其必要を認め勸業銀行の債券に對して之を添付することを認許するの例なしとせず、坤二編二卷第一章參看然れども籤札付公債の發行は假令如何なる便宜あるも競争をなし得る場合には決して之を許す可らず、何となれば競争の結果は其濫發となるの虞あればなり、起債權は公共團體獨り之を有するを理由とし、政府は時に或は之を發行することありと雖も、籤札付公債の發行は公益上の利益が射倖心獎勵の弊を償ふて餘りある場合の外容易に施行すべきものに非ざるなり、只天下の事固より膠着なるべきに非ずして豫め其要なきを期する得ず、萬一之が施行を要する場合に遭遇せば、其方法に就き大に注意する所なくんばある可らず、請ふ次目に於て其要を摘述せん

第二目 籤札付公債に關する注意の要點

第一に注意を要するは拂込みたる元金は必ず償還せらるべく、利子は普通率よりか幾分か低廉なるべしと雖も必ず支拂はるべきこと是なり、若し不當籤者は全く元金を失ひ、當籤者は一時に意外の巨金を得るの結果を來すが如きことあるは

甚だ不可なり、必ずや不當籤者と雖も亦其元金を失はず、且つ利子は聊か低歩なるも必ず之を得ること、せざる可らず、然らば即ち自家の出金は擧て之を當籤者に取り去られ、一方に大失望者を生じ、一方に倏忽暴富を得る者を生し、賭博と擇ぶなきの弊害を生ずべし、故に應募者は元金は勿論利子と雖も普通の率より少く低きは已を得ざるも、必ず之を受るの仕組とせざる可らず、例へば普通の利子が五分なるときは之を三分となし、五分と三分との差額即ち二分は之を發行者と當籤者との間に分配する様に組織するが如きを必要とす

第二に注意すべきは籤數は可及的多數にして當籤者を多からしめ、又一人に向て多額を支拂はず、小額を多數の人に拂ひ、當籤するも暴富を成さず、當籤せざるも亦甚だしき損害を被らざるを度とし、勉めて射倖心を和くるにあり、凡そ是等の點に注意せば籤札付公債も實際に於ては敢て大なる弊害を生ぜざるべく、時に或は貧弱なる小國の公債にして非常に價格の變動する者よりは却て安全なるやも亦知る可らず、伊佛等に於ては此類の公債の發行せらるゝに際し人民之に應ずるが爲め特に節儉し、小賣商買に影響することは吾人の耳にする所なり、雪に和して泥

第二注意の點

を踏む夫れ或は妨げなき乎然りと雖も戒根虧くれは定惠據る可らず、若し夫れ清禁を慎まざれば術巧緻なるも其終を全ふする能はず、顧みずんばある可らざるなり

第三目 巴里萬國博覽會に於ける籤札付證書發行の實例

一 費用の供給

籤札付證書發行に就き注意すべき諸點は前目に於て略陳せしが如し而して其施行は一時特別の事情と必要とに由り生ずる破格の場合たらざるを得ず、彼の博覽會(一時にして唯一なるものなり、此證は書小形に製し携帶の便を圖るを良しとする)の費用を徴收するが如き即ち其一例たり、今佛國が西曆千九百年萬國博覽會開設の爲め施行したる所の籤札付證書の發行の如きは頗る奇巧にして好結果を收め世の耳目を惹けり、請ふ少しく之を述ん

西曆千九百年佛國が巴里萬國博覽會を開くに當り其總經費として一億法を要し、其財源は巴里市及國庫より各二千萬法を支出し之に宛て殘額六千萬法は五大銀行と協議して富籤の方法に依り之を募集することを決せり、所謂五大銀行とは

土地抵當銀行(クレヂー、フオンシエ)里昂銀行(クレヂー、リヨネー)、割引銀行(コントウ
アール、ナシヨナル、デスコント)、商工銀行及、ソシエター、ゼテラル是なり。是等五銀行
は開會に先ち西曆千八百九十五年既に其發行に着手し、其發行したる籤札付證書
の数は通じて三百二十五萬枚、一枚二十法にして發行額面總計六千五百萬法の巨
額に達せり、其中政府に納入すべき金額は六千萬法にして、自餘の五百萬法中三百
二十五萬法は之を募集引受人の保證手数料とし、百七十萬法を以て籤札付證書の
製造發行、抽籤拂渡、諸廣告等に關する諸費用に充てたり。

抑々佛國が博覽會の費用支辨の爲め籤札付證書の發行を試みしは今回に始ま
るに非ず、前回即ち西曆千八百八十八年に於て既に之を舉行し頗る好結果を得た
り。然るに前には發行手数料は發行額に對して一割なりしに、今回は其手数料六千
五百萬法の發行に對し五百萬法に過ぎずして其割合八分に達せず、五銀行が國家
に貢獻せし所蓋し少しとせざるなり。

斯の如く前記五銀行は富籤の發行を引受け、籤札付證書千枚を一株として各々
自ら二十株乃至二十五株を引受ると同時に、佛國は勿論諸外國に於ても廣く其引

當籤者に
支拂ふに
き財源へ

受人を募集し、若し一定の期間に公衆の募集に應ずる者少きときは、五銀行は更に
豫定の比例を以て自ら應募し、其不足を補ふものとし、又萬一應募者中に拂込を怠
る者あるときは銀行自ら其責に任ずべきものとせり。然るに實際に於ては募集頗
る盛況を呈し、是等豫備決議の執行を要せず、總計三千二百五十株に達し、應募株數
五千四百九十九に上り、其金額一億九百九十八萬法に達し、爲に二株以上の申込者
は總て之を二株に引下ぐるの已むを得ざるに至れり、而して籤札付證書には入場
券の普及と觀客の來集とを目的とし、一枚毎に其價二十法に相當せる二十枚の入
場券(入場料を一法とせり)を添附せしを以て六千五百萬枚の入場券は、博覽會開會
前既に世上に賣り出されたり。

斯の如くして五大銀行は籤札付證書三百二十五萬枚を發行し、政府に納付すべ
き六千萬法と手数料其他の費用とに充つべき五百萬法は之れを得たりと雖も、籤
札付證書の所有者には開會中一枚に付き二十回博覽會場に入るとを得るの權利
を附與せし外、爾後五箇年間即ち西曆千八百九十六年より同千九百年十月廿五日
まで二十九回の抽籤を以て當籤者に總計六百萬法の金額を支拂ふものとし、當籤

者の總數は之を四千三百十三人とせしを以て政府は尙ほ此金額に對する財源の必要を感じ、今此六百萬法を總費額一億法中より支出せんか、忽ち豫算に不足を生ずべきを以て政府は先づ預金局と交渉し、五大銀行より得たる納金六千萬法を該局に定期預けと爲し、西曆千八百九十六年一月より同千九百年十二月三十一日まで据置き之に對して年二分五厘の利子を受くるの契約を結び、當籤者に支拂ふべき資金は先づ之を得るとを得たり。然るに尙ほ茲に残る所の一困難は政府及巴里市の負擔に屬すべき彼の四千萬法は五箇年間の繼續費なりしを以て兩財源の支出は年々其一部たるに過ぎずして到底廣大なる博覽會諸般の設備の爲め要する經費に應ずるに足らず、當局者も頗る其處理に苦心し、終に一方法を按出せり、即ち政府は佛蘭西銀行と交渉を開き、嚮に預金局より領收したる六千萬法の預り證書を擔保として參千萬法の當座勘定を博覽會事務局の爲に開くの特約を結び、佛蘭西銀行は事務局が政府及巴里市の支出金を以て諸建築其他の設備の費用を支辨する能はざる場合に於て商務大臣の請求あるときは一分二厘五毛の利子を以て三千萬法を限り何時にても政府に貸附すべき者とし、而して其償却は西曆千九

諸般の設備
費の財源

百年十二月末日までとし、免許料其他材料賣却代等を以て利子支拂に充つる者とせり。是の如く佛蘭西銀行は單に預金局より出したる一片の預金證書を擔保とし、壹錢の現金をも預るとなく能く薄利に甘じて參千萬法の當座勘定を開くを諾したるは畢竟該行が公共心に富むの致す所にして國家に貢獻する厚しと云つべし。右の方法に依れば博覽會開會中事務局が使用し得べかりし金額は政府及巴里市より支出すべき四千萬法と當座勘定に由り佛蘭西銀行より借入れ得べき前記の參千萬法とにして合計七千萬法に限れり。故に今表面より之を見れば資金の用意頗る薄弱なるが如しと雖も實際に於ては諸建築物を始めとし、諸般の施設中直に代價の支拂を要するもの意外に少く、多くは事業の結了後短くも六箇月後に支拂ふべきもの多きを占め、前記當座勘定の如きは引出甚だ少く、單に萬一の準備たるの實況を呈せり。

二 籤札付公債附帶の特權

籤札付證書には前記の如く一枚毎に一枚一法の博覽會入場券二十枚を添付したるを以て、籤札付證書一枚を有する者は開會中二十回入場觀覽の自由を得るは

籤札付公債
に附帶する
權利

勿論實際の利益、五箇年間に二十九回執行せらるべき抽籤の權利、想像上の利益を有するが故に好運者は四千三百十三個の一又は數個の當籤の望あること前陳の如くなるに搗て之に第三の特權を加へ籤札付證書の所有者には左に擧ぐる二個の利便中一を擇ぶの特權を有せしめたり、即ち

第一 籤札付證書の所有者は博覽會開會中場内に於て舉行する諸興行を觀覽せんと欲し其入口に於て證書を示せば、入場料の三割五分の割引を受けることを得

第二 籤札付證書の所有者は指定の鐵道會社及汽船會社に對して博覽會の開期間は往復共に二割五分の割引を請求することを得

其收入を得る方法の巧緻にして觀客の便を圖る亦周到なりと云ふべし

三 籤札付證書發行の好況

斯の如く籤札付證書の所有者は種々の利便を享受せしを以て其賣れ行き非常に好況を呈し佛國は勿論全歐洲其他殆ど世界到る處に廣まり其分配の比例は佛國六割全歐洲二割、米國一割にして其餘の一割は濠洲地方其他東洋の各殖民地に

於て賣捌かれたり而して此の籤札付證書は日々巴里の取引所に於て賣買せられ其價格最初は額面を下ることなかりしが博覽會の開期に近くに從ひ入場券と籤札付證書と分離して賣買せられ、證書の買手は單に當籤の希望のみを以て之を買ひ入るゝに至れり、前記の如く籤札付證書の抽籤は西曆一千八百九十六年八月に始まり同千九百年十月を以て最終期となし、其間二十九回の抽籤を行ふべきものにして西曆千八百九十九年までは入場券の添付しあると當籤の見込少なからざるとの故を以て證書の額面以上の價格を保てり、然れども西曆千九百年に入りては餘す所の抽籤僅に六回に過ぎずして當籤の望漸次薄弱となり、相場次第に下落し、同千九百年七八月の頃に至りては證書一枚、入場券と分離したる者、參法五十三參内外を昇降し、證書より分離したる入場券の價も博覽會開會の當時は一法より七八十參の間を昇降せしに、漸次下落し開場に近づくに隨ひ二十參乃至十參に下落せり、是れ自然の數にして固より怪むに足らざるなり

四 當籤金額の配合

前陳三百二十五萬枚の籤札付證書に對する四千三百十三個の抽籤は西曆千八

百九十六年八月に第一回の者を行ひ第二十九回即ち最後の者は同千九百年十月二十五日を以て之を舉行せり。今西曆千八百九十六年に於ける五回の抽籤に伴ふ當籤の總數及金額を擧ぐれば左の如し

第二表

年月日	當籤の數	各等當籤の數	金額	總金額
第一回 西曆千八百九十六年 八月廿五日	百六十八個	五拾萬法の當籤一個 壹萬法の當籤二個 五千法の當籤五個 壹千法の當籤十個 百法の當籤百五十個	五拾萬法 貳萬法 貳萬五千法 壹萬法 壹萬五千法	五拾七萬法
第二回 年九月廿五日	百五十八個	拾萬法の當籤一個 五千法の當籤二個 壹千法の當籤五個 百法の當籤百五十個	拾萬法 壹萬法 五千元法 壹萬五千元法	拾參萬法

第三回 年十月廿五日	百五十八個	五千法の當籤二個 壹千法の當籤五個 百法の當籤百五十個	壹萬法 五千元法 壹萬五千元法	拾參萬法
第四回 年十一月廿五日	百五十八個	拾萬法の當籤一個 五千法の當籤二個 壹千法の當籤五個 百法の當籤百五十個	拾萬法 壹萬法 五千元法 壹萬五千元法	拾參萬法
第五回 年十二月廿五日	百五十八個	拾萬法の當籤一個 五千法の當籤二個 壹千法の當籤五個 百法の當籤百五十個	拾萬法 壹萬法 五千元法 壹萬五千元法	拾參萬法
合計 以下略す	八百個			百九萬法

西曆千八百九十七年乃至同千九百年の四ヶ年間に執行したる抽籤の方法は抽籤の度數を一ヶ年六回に増したる等多少の差異ありと雖も畢竟大同小異のみ只注意を要するは最後の年に於ては一等籤札を最後の抽籤に置きしこと是なり。今

之を略陳すれば西曆千八百九十七年乃至千八百九十九年の三ヶ年に於ける當籤總數は二千八百六十五箇にして其總金額は參百七拾五萬法なり。又西曆千九百年の當籤數は六百四十八箇にして其總金額は百拾六萬法即ち五箇年間の合計當籤數は四千三百十三箇にして總金額は六百萬法なり。

右の中毎抽籤に伴ふ當籤金額の各等級殊に各抽籤期に於ける最高當籤の配置に付ては頗る注意すべきものあり例へば西曆千八百九十六年以來同千八百九十九年に至るまでは第一等の當籤即ち五拾萬法の籤は毎年初回の抽籤期に之を置きたるも最後の年即ち西曆千九百年に於ては第一等の當籤は却て之を最後の抽籤期に置けり是れ籤札付證書の所有者は人情として速かに巨額の當籤を望むべきを以て最初四ヶ年は成るべく前に最高價の當籤を置き以て人心を收攬し最後の年に至ては一等の當籤を最後の抽籤期に譲り將に去らんとする所の人氣を牽き以て籤札付證書の所有者をして尙ほ萬一を僥倖せんことを望ましめ最後に至るまで之に對し愛惜の情を斷たしめざるの方策にして當局者の注意亦盡せりと云つべし。

五 籤札付證書發行の成績

西曆千九百年巴里萬國博覽會開會に當り籤札付證書の所有者に鐵道會社、汽船會社に對し二割五分の割引を請求するの特權を附與せしは、實に三百二十五萬枚の證書の賣行を容易ならしむるの目的に出でたるのみならず又之れに因りて多數の觀客を巴里に集中せんとするの趣旨を含むものたるや疑を容れず當時方略其當を得三百二十五萬枚の籤札付證書は發行後幾千もなくして賣却し盡したるのみならず略々其相場を維持したるは前述の如し此くの如くにして西曆千九百年の大博覽會は豫定の如く開設せられ大成功を收め政府は豫期の如く西曆千九百年十月二十五日限り籤札付證書の償還を結了することを得たり要するに西曆千九百年の巴里萬國大博覽會は其大體に於て非常なる成功を示せしと同時に其財政に於て大功を奏したるは萬目の認むる所にして政府は貳千萬法を五箇年間の繼續費として毎年比較的少額を支出し善く壹億法の支出を要する世界大博覽會を舉行し巴里市は貳千萬法を五箇年繼續費として年々其幾分を支辨し而して市に吸収せし所の金額凡そ貳拾五億法に達せしは内外人の共に信して疑はざる

所なり。今之を前回即ち西曆千八百八十九年の博覽會に比較するに前回は佛國大革命を祝するの意に出たるものなりしを以て列強國中感情自ら平かなるを得ず、或は參同せざる者あり或は參同したるも熱心なる同情を示すに至らざるものありしは掩ふ可らざるの事實なりしも當時巴里市は尙ほ八百萬法を支出し其成功を援け能く拾貳億五千萬法を市に吸収し得たるは世人の知る所たり、今回は之に反し古來未曾有の世運を進めたる第十九世紀を送り併せて新世紀を迎ふるの趣意に出でたるものなれば、世界何の國と雖も之に參同せざるはなく、其成功の大なるは殆ど之を豫期するを得べかりき、而して實際は其豫期に違はず開幕に至り四海各國の士女雲の如く簇り來り以て空前の盛況を呈し日々々の觀客數十萬に上り其最も盛なるに際しては六十萬人以上を數ふるに至り巴里市一時の繁榮實に人目を驚かし其吸収せし金額少くも前回に一倍せしや疑を容れず、博覽會の成功及市の繁榮斯の如くなりしを以て其財政に參與せし彼の五大銀行より組織せられたる「シンヂケート」も利する所ありて損する所なく、籤札付證書の賣れ行き最も好況なりしを以て、表面其負擔せし重大なる責任は實際に於て其履行を要せず僅少

の危険に對して參百餘萬法の手數料を收得せり。其他預金局は二步五厘の低利を以て六千萬法の定期預りを爲し、佛蘭西銀行は三千萬法の當座勘定を開きたるの報償として一步二厘五毛の手數料を得、關係の各方面共に好成績を見ることを得たり

六 籤札付公債應募者の利害并に交通機關

籤札付證書發行の方面より之れを論ずれば如上の好成績を見たるは瞭然として夫れ明かなり、今一步を進めて證書を購求したる一般公衆の利害如何を見るに是れ亦利ありて損なし。抑々此籤札付證書一枚の價格は二十法にして之に入場券二十枚を添付せしを以て其購求者にして觀覽する以上は既に損失を受ることなし、況や之に加ふるに鐵道會社汽船會社の貸錢の割引あり、又會場内に於ける凡百の興行に對して其入場券の割引を受るの權利を有するをや、單に汽車の一事を以て之を例せんに、籤札付證書一枚を所有する者が二百哩以上の間を往復するときは僅に貳拾法の證書一枚を以て貳拾法以上の割引を求むるの特權を有す、其便益知るべき耳、獨り是のみを以て論ずるも其投下したる資金を償ふに餘りあり、加之

應募者の
得失

證書一枚を以て二十九回の抽籤に與ることを得るが故に五拾萬法當籤の僥倖なきを必せず、然らざるも大小籤四千三百餘箇中の一に當籤するの希望あり、宜なる哉、參百餘萬の多數の籤札付證書をも一たび發行せらるゝや忽ちにして賣り盡され機を逸して來りたる購買者は謝絶に逢ふて徒に其遲きを悔ゆるの盛況を呈したり

又交通機關即ち鐵道、汽船會社の如きも其貨錢に於て二割五分割引の義務を負ふと雖も博覽會の爲に平常に比して幾十倍の旅客を増加し、管に損失なきのみならず相當の利益を得たるは疑を容れず、然らば即ち西曆千九百年巴里世界大博覽會の財政計劃は各方面皆等しく利益と便宜とを享受し、籤札付證書發行の好成績を得たるものとして特筆するの價值あるものと云はざるを得ず

七 結論

然りと雖も漫然之を發行して此の如き好成绩を得たるに非ず、是れ畢竟するに當局者が之に處するに精巧の術を以てし、而かも勉勵能く事に當りしの結果と云はざるを得ず、實に其施設は大に後世の參考となるもの少からず、不當籤者は表面

交通機關
の得失

上元金の全部を失ふの嫌あるが如しと雖も、入場券の添付は能く其缺を補ひ、只一等當籤の金額大に失するの觀ありと雖も、臨時特別の場合に於て或は恕すべきの事情なしとせず、多少の變通は蓋し免れ難きの勢と云ふを得べく、全面の施設概して財政學の適用上趣味なしと云ふを得ず、記して以て後學研究の資に供すと爾云

第二節 特別募集

次に論ずべきは特別募集なりとす、元來此方法は方面を限り公債を募集するものにして所謂限地法なり、例へば東京灣築港を必要とせん乎、東京は全國の首府たるを以て同胞悉く其利益を受くべきも其厚薄自ら差違なきを得ず、其最も厚きは即ち東京市なりとす、今明治三十一年の實況に據るに横濱の輸入貨物凡そ九十四萬千噸にして、其東京に入る者は總額の九割以上にして南下せし者は僅に六分五厘に過ぎず、他の理由は暫く之を措き單に此の一事に由りて之を觀るも築港が東京人士に利益を與ふるの多大なる推て知るべき耳、斯くの如く此築港の業は前途有望の事に屬し、東京市民自ら進で之に當るは大に喜ぶべきも人心未だ此に傾か

限地法

ず。仍て國家は其力を以て之を起すの決心をなし債を起さんとせば先づ五分利を拂はざるを得ざるの市況なるときは、政府は東京市民に交渉して利害を説き、府内に於て三分乃至三分五厘にて特別に築港公債を募集するものとす。募集は獨り府内に限らず若し直接に築港の利益を受ける地方あらば之を募集區域内に入るゝも決して不可なるなし。然れども直接の受益地外に募集區域の範圍を廣むるを許さず。佛國の如きは屢々此方法を利用し、マarseイユ、ドンキルク、ルイアン、カレイ等の如き其築港の爲め之に類似したる方法を施行せり。

然るに我國に於ては未だ其例なし。是れ他なし。我國は未だ一地方の富能く巨額の募集に應ずる能はずして募集區域を廣めざるを得ざるの實あればなり。例へば水戸市に新に師團の設置せらるゝことありとせば約二萬餘の人馬來て此處に屯集し市内爲に賑ひ其澤に浴する最も多きは水戸市内の人民たり。此の如き場合に若し政府が其一地方に限り特別募集を爲せば其資金を得るに便にして、亦結局其市の繁榮を助長するを得べく所謂一舉兩得の方法と云つべし。

我國には例なし

第五章 募集及發行

第一節 總論

別兩者の區

公債の募集と發行とは其關係恰も兄弟の如く其間明了なる差別なしと雖も而かも亦大牀に於て自ら區別なきに非ず。即ち募集は資金の事に關し、發行は證書のことに係る。讀者是に注目せば自ら之を辨別するに苦まざるべし。今や吾人は前節に於て各種公債の得失と其配合を苟もする能はざる所以を略陳せしを以て一歩を進めて募集及發行の事に論及し得るの地位にあり。夫れ償還の事難うして其財政と市場に影響するの大なるは既論の如し、而して募集の事豈に亦容易の業ならん哉。其方法宜きを得ずんば偶々國庫に餘裕あるも之を償還に使用するを得ず。空しく高利を拂ふて憾を千歳に貽すの虞なしとせず、又或は國庫に急を告るあるも強て償還を爲さざるを得ざるの窮局に陥り時に高利の新債を起して比較的低利の舊債を償還するの不利を忍ばざるを得ざることなきを保せず。夫れ斯の如くにして豈に財政の鞏固を保つを得ん哉。償還の施行上に屈伸の餘地を存せんと欲せ

ば、必ず哉募集に際し公債の種類を精選し、其全株の配合をして巧緻ならしめざるを得ず、而して發行の方法亦大に注意せざるを得ざるものあり、抑々發行に平價發行、呼價發行の別あり、請ふ少しく之を辯せん

第二節 平價發行及呼價發行

第一目 總論

公債證書の發行には平價發行あり、呼價發行あり、蓋し平價發行とは例へば百圓證書を百圓を以て發行するものを云ひ、呼價發行とは例へば五分利を以て募るときは平價にて證書を發行するを得べきも、殊更に利率を四分とし、發行價格を八十圓とし之に對して百圓の證書を發行するもの、如きを云ふ、呼價發行の不當なるは固より論を俟たず、而して其最も不利なるは價格變動の區域廣きこと是なり、若し夫れ五分利を以て平價にて募らん乎、世運進歩し、利子低落し、五分利公債平價以上となり、利落計算にて百二三圓の價格を保つに至れば、則ち借換を行ひ五分以下に利子を減じ得るを以て其價格非常に上下するの餘地を存せず

呼價發行
の不利

然りと雖も平價以下例へば八十圓にて發行せば其價格百圓に至り、百圓より更に進んで百圓以上に昇る時間は甚だ長時間ならざる可らず、八十圓より利落百二三圓に達するまで價格變動の區域甚だ廣きのみならず、公債價格が利落百二三圓に至らざれば借換を爲す能はざるを以て其間徒らに尨大なる元金に對して四分利を拂はざるを得ず、國庫の損失多大にして納税者に不利を與ふるや知るべき耳、然るに投機者流は却て此價格の變動を冀望し、呼價發行を冀望するの情弊あり、斯の如く發行の方法其宜きを得ざるときは公債證書の如き安全にして且つ純良なる者と雖も尙ほ投機者流の玩弄物となるの虞なしとせず、慮らざるを得ざるなり、若し夫れ物價の變動をして自然の情勢に發し、毫も人爲に依らざるものたらしめば、是れ實に已むを得ざるべしと雖も、人爲に依り物價に非常の變動を惹起するが如きは國家經濟上努めて之を避けざる可らず、今國家の爲に之を謀るに公債の發行は平價發行を基礎とし、臨機應變自在に借換を爲し得るの餘地を存し併せて公債をして投機の器具たらしむ可らざるなり

第二目 呼價發行の不利

元來平價發行は借換を容易ならしむるも呼價發行は即ち然らず、例へば八十圓にて百圓の公債證書を發行せば、國家の手取り金手数料等は暫く不問に措き、八十圓にして償還の義務ある金額は百圓たり、是れ假令其利子低廉なるも一考を煩はざるを得ざる所以なり、若し夫れ五分利平價を以て元金八千萬圓を募らん乎、四分利八十圓にて額面一億圓を募るものと利金及手取金に於て同一なるも平價發行の公債は借換を爲し得るの時機早く至り夙に八千萬圓に對して四分を拂ふて足るの好結果を見ると容易なるべし、然れども呼價發行に係る四分利一億圓の負債は容易に四分利以下にて借換を爲し得べき時期に遭遇し難く、長期間徒らに一億圓に對して四分利を拂はざるを得ず、之を五分なる八千萬圓公債の容易に借換を爲し得るものに比するに其得失固より同年の論に非ざるなり、今之を史乘に徴するに英國は實に吾人の般鑑たり、世人の知る如く英國の公債は主としてナポレオン戦争の時に起れり、當時市場の利率は實際五六分の間に入出したるも英國は所謂呼價發行の法を採り發行價格を低廉にし三分利を以て多額を募集せり、其理由とする所は利子制限法を避け、又は高利を拂ふは一國の信用を傷くと云ふ如

英國に於ける實例

ゴッスシエン氏の功績

き極て皮想の論に在り、凡そ是等の事實は普通財政論に記載しあるを以て茲に之を説くの要なし、只其政策の結果不利の甚しきものあるを一言せば以て足れりとす、當時英國が平時にて五分乃至六分利を以て公債を募集せしとせば西曆千八百三十年代に於て既に低利公債に借換ゆるを得、大に國費を減じて元金償還の餘地を得たるは必然たりしに、計茲に出でず當初低利にて呼價發行をなしたるを以て、如何に英國の富四海に冠たるも、二分利以下の公債に借換ふるは容易の業に非ず、漸く同千八百八十九年に至りゴッスシエン氏の盡力により二分七厘五毛公債に借換へ後滿十四箇年を経過し同千九百三年に至り利率を二分半となすべきことを定むるを得たり、要するに利を高くして元金を少なからしめば後年に至り借換の機會を得ること容易にして、比較的少額の元金に對して低利を拂ふを得るに至るべきも之に反し低利呼價發行の方法を採るときは長期間多額の元金存し多額の利金を支拂はざるを得ざるの不利に陥るは自然の結果なりとす、豈に鑑みざる可けん哉

抑々國家が公債を募集するは或目的の爲め金錢の必要あるを以てなり、故に當

手取金の
多きを利
とす

初は假令少しく高利を拂ふも寧ろ手取金の多きを得策とす。例へば四分利八十圓にて呼價發行をなせば、一億圓の證書に對し八千萬圓を實收するものを得べし。然るに五分利平價發行にて八千萬圓を募集すれば證書額面は實收と同額にして利子金額は即ち前者と同一たり何を苦んで乎八千萬圓を實收して空しく一億圓の借財證文を入手に渡すの要あらんや、或は曰ん是れ表面の利子歩合低下なると資金需要の急に應ずるを得るの利ありと。然りと雖も斯の如きは未だ其一を知て二を知らざる者とす。試に考慮せよ、五分利公債八千萬圓を發行すると四分利公債一億萬圓を發行するとは借換の活法を用ゆるに果して如何の難易ありや、即ち後年五分利を四分利に變ずるは容易なるべきも四分利公債を三分利以下の公債に借換ふるの機會は容易に到らず、荏苒依々數十年の久きに亘るや必せり。然るに平價發行に依れば永く五分利を持続するの要なく五分利公債を四分に四分利公債を三分に借換へ、八千萬圓の證書に對し四百萬圓の利子を支拂ふ代りに三百二十萬圓又は二百四十萬圓を支出するを以て足るが如く漸次に利金を減少するを得べし。公債の募集發行の方法其宜きを得ざるの結果動もすれば長期の間不必要に巨

借換後も
尙ほ元金
不大利あり

額の元金に對し依然當初の利子を拂はざるを得ず、數十年の後假令之を低利に借換ふるを得るも尙ほ元金巨大なるの不利あり、般鑑遠からず彼の英國にあり顧みずんばある可らず。

第三目 呼價發行の利用

然りと雖も呼價發行亦時に利用の道なしとせず、請ふ試に之を辯ぜん抑々起債の額大ならず償還期限久しきに涉らず、而して毎元利濟崩抽籤法例へば有期定期支拂を以て償還する公債の場合の如きは、呼價發行法の使用意外の功を奏するなしとせず、何となれば此場合に於ては確實に利子を得るの利益と應募價格若くは買入價格と償還價格との差違より生ずる想像上の利益と相綜合し以て公債價格を高むるの勢あればなり、夫れ名工は材を棄てず直者は採て以て柱と成し曲者は則ち以て梁と爲す然れとも此法に依りて發行する公債は各種公債の間に挿入し時機の宜きを制して發行するときは大に妙味あるべきも、一に之に偏するは固より不可なり、凡そ天下の事を處する固より膠柱鼓瑟を忌む然りと雖も事の良否は自ら大體に於て區分あり、路に當る者須らく考慮せざる可らざるなり。

第四目 結論

然らば即ち發行の方法果して如何にすべきや、他なし平價發行は綱領にして、平價發行は節目たり、已に綱領あれば又節目なかる可らず本末の順序は固より之を誤まるを得ざるなり故に大躰に於ては平價發行を採り其補助として平價發行と定期拂法とを併用し機に臨み變に應ずるは策の最も得たるものにして利害の關係判然たり復た何をか疑はん、然るに世人多くは平價發行を喜ぶの弊ありて堂々たる商賈銀行家にして尙且つ之を好む者なしとせず勝て歎ず可んや抑々國家經濟上より之を視れば平價發行の如く變動の餘地廣大にして進行の軌道定まらざるものは固より良法とするを得ざるなり

第三節 年金附證書の發行

英國に於ては尙ほ一種奇異の公債を起したるの例あり、他なし年金附證書の發行是なり是れ亦ナポレオン戦争の時に在り、當時英國政府は當然の道に依り金を借らんとすれば到底五分利若くは六分利に非らざれば其目的を達し得ざるに、強

呼價發行
の商業上
の不利

て三分利にて之を借入れ其差額二分若くは三分の損失補填に該當する所の年金を十五箇年乃至二十箇年間其公債に添附せり、蓋し此方法を案出したる者の意に以爲らく年金の満期後は自ら此公債の利率は三分となるべし實に空前絶後の良法なりと然るに是れ亦一兒戯たるに過ぎざるなり、何となれば普通の公債證書を發行し同時に年金證書を發行し同一の事に對して重複の手續を盡し、又公債證書若くは年金證書の孰れか一方讓渡せらるゝ場合に於ては一負債に對し二債權者を生ずるの不便を生ずればなり、畢竟此の如き不便の法を設けしは當時借換の觀念未だ政治家の頭腦中に發達せざりしに由るものにして學術尙ほ幼稚の位置にありしを證するに餘りあり而して呼價發行は證書價格の變動を大にし其擔保品たるの地位を危ふし取引上に便ならず元來取引に供する擔保品は其價格の變動少なきを便利とす、故に獨り財政上のみならず金融上にも呼價發行法の不利なるは明了なり然るに尙ほ之を喜ぶ者の多きは實に一種の奇觀と云はざるを得ず

第四節 發行價格及無減少免許

第一目 總論

發行價格のこと亦頗る注意を要す政府にして例へば一億圓を望むに應募申込高二億圓に至れば其一半は之を返戻せざる可らず今市場實際の景況に依れば發行價格は正に百圓なるべきに若し之を九十圓とせば應募申込多數に昇るは必然たり此場合に於ては發行價格以上にて申込みたる者に對して先取權を與へ、發行價格にて申込をなしたる者のみに對して割戻をなすを得策とす是れ學術上無減少免許と稱するものにして頗る奇巧の方法なりとす元來公債の募集に際しては當局者の市場金融の情況を按して利率其他の要件を定め以て遺算なきを期すと雖も萬一豫期に反し應募額にして需用額に達せざるときは發行者の信用に重大なる關係を及ぼすを以て發行者頗る疑懼の念を抱き所謂臆病風に誘はるゝは蓋し免れ難きの勢にして時に或は恕すべきの情なしとせず斯の如く發行者が萬一の失策を恐れ多少低價若くは高利を以て公債を發行するの結果應募額需用高に超過したるとき例へば募集額一億圓なるに申込高之に超過し二億圓に達すると

きは其一億圓は之を返戻せざる可らず今純理以て之を論ずれば其超過額は申込高に比例して之を割戻さざる可らず然れども其減少をなすに當て多少の斟酌を加へ以て國庫の損失を避け併せて少額の應募者に便利を與へ社會的の利益を收むるの方法を講ずるも亦經綸の一策とす其方法は高價無減少免許及小額無減少免許の二者とす請ふ次を逐ふて之を辯せん

第二目 高價無減少免許

高價無減少免許一名高價發行法とは公定發行價格以上の高價を以て應募申込を爲す者に對しては前目記載の減少を爲さざる方法なり例へば茲に五分利平價發行にて一億圓を募集するに際し其應募額二億圓に達し其半額は之を割戻さざる可らざる場合に於ては發行價格以上の申込者に對しては其申込の全額に對する證書を發行し發行價格の申込者に對してのみ割戻をなすを云ふ此場合に於ては公定發行價格はこれを名けて「ミニマム」即ち最低價格と云ふ是れ異名同物たり又發行者の一方より之を見れば證書は高價に發行せらるゝを以て其方法を高價發行法と云ふ此方法に依るときは假令發行價格低廉なるも市場に競争起り公債證

書の價格相當に騰貴し遂に發行價格以上の申込の中にて需用を充たすに足るとあり斯の如き時は最低價格以上の申込の中に就き價格高きものより順次に募入し以て公債證書を交付し、需用額に達するに至りて其交付を止む、故に其結果公定發行價格の申込者は全く排斥せられ募入せられざるに至ることあり史乘其例に乏しからず

我國に於ても中仙道鐵道公債募集に際し曾て之を經驗せり、今當時の實況を談するも亦研究の一材料たるべし、當初法律は發行價格以上の申込者に對し證書を交付するの規定をなせしに該公債第二回の募集をなすに至り發行價格以上の申込のみにて需用高を超過し、第三回募集も亦同一の勢を呈し或は更に一層の好況を現出するの傾向ありしを以て法律の規定茲に改まり、申込價格の高き者より漸次募入し需用高に至りて止むることゝなれり、高價無減少の方法は我國に於ては夙に此時より行はれ爾來他の各公債に適用せられ幾多の經驗を得て圓滿に實行せらる元來公債の應募は應募者の任意に屬す公定發行價格を以て申込を爲すと公定發行價格以上の申込を爲すとは一に應募者の自由選擇にありて毫も國家の

干涉する所に非ざるなり、只國家は市場の情況に依り損失を避くるの方法を講ずる耳、是れ亦奇巧の一方と云はざるを得ず

第三目 小額無減少免許

小額無減少免許なる者は小額の應募者例へば二百圓以上の申込者に對しては應募超過の場合に於ても減少せざるの方法なり、而して其目的は社會の下層に成るべく公債證書の所有者を増加し細民の利益と國家の利益を一致せしめんとするにあり、今減少を小額の申込者に及ぼすときは非常に無理を生じ失望者多く隨て小額の應募者なきに至るべし、例へば茲に百圓の申込者ありて、其の者は眞乎貯蓄の爲に公債證書を望む者なるに假令一錢にても割戻を受くるときは百圓以下の證書ある場合の外全然證書を得る能はず果して然らば其失望果して如何ぞや、斯くの如きは獨り其者の失望に止まらず抑々亦貯蓄を獎勵する所以の道に非るなり、元來小額面の證書を細民間に流布するときは政治上社會上善良の結果を生ずるは論を俟たざる所にして、社會黨傾向の如き忌むべき現象の發生を豫防するに與て力あるを疑はず、加之小額の證書が細民間に普及するときは證書は彼等の

巨額の申
込者は自
由に力を
有する

爲に善良なる金融の器具となり從來の質屋又は高利貸等の悪弊も多少驅除せられ財政上金融上共に善良なる結果を見るや疑を容れず而して又多額の公債に應ずる力ある者は自ら金融上自由なるに由り市場の景況を洞察し眞實五萬圓の應募を望むに當り其半額より多くの募入をば得る能はずと思惟するときは十萬圓の申込を爲し得べきも僅に百圓二百圓の申込をなす者は固より金融自由ならざるを以て若し空算を掛け悉く募入せられたるときは之が拂込をなす能はず其幸は却て不幸となるべし故に何れの點より之を視るも小額申込者の利益を計るは是れ仁政の一端と謂て可なるべし然れども天下の事固より完全無缺なるものなく此の如き小額の公債證書所有者を増加するときは元利拂其他の手續を増加するを理由とし大體に暗さの徒は頗る之を忌むの勢あり然れども是の如きは固より顧慮するに足らざるなり

我が國に於ても小額無減少免許は整理公債條例第七條第二項二十一年勅令第四十六號にて追加に其規定ありて二百圓以下の應募者には減少を行はざるを得るものとし其他の公債は皆之に準據す我國の慣例は先づ申込價格の高き者より

應募に付
きて我國
の慣例

募入し不足を告るときは二百圓以下の申込の全額を取り尙ほ不足するに至り發行價格にて申込し者に及ぼし需要額に超過すれば茲に初めて減少を行ふを通例とす法律の發行に注意する實に周到なりと云ふべし

第五節 募集に際し事實を蔽ふの弊

第一目 佛國の弊習

元來公債募集の結果は募集高に過不足を生ぜざらしむるを以て第一の妙手とす抑々公債の應募高を多大にするは容易の業たり若し市場の情況平價五分利公債の應募に堪ふるに當り五分公債を七十五圓乃至六十圓にて募集するときは天下皆響應せざるなし畢竟應募申込の募集高より非常に超過するは施設の巧妙ならざるに在り然れども申込の募集高に達せざるも亦迂拙の致す所たり要するに結果の善悪は信用の厚薄と施行の巧拙にあるを以て利率又は價格に注意し其過不及無きを度とせざる可らず佛國の如きは概ね呼價發行法を採り露國、葡國の如きは平價以下發行法を採り以て非常に應募者を増加したるの例あり此の如きは

施設其宜を得ず徒らに流通貨幣を一方に集め後に至り過剩額は拂戻さるべしと雖も一時は必ず金融に變動を起し市場に不利なる影響を及ぼし取扱上亦徒らに費用を増加し手数を繁ならしめ獨り國庫に不利を與ふるのみならず亦隨て市場に害毒を及ぼす豈に慎まざる可んや

第二目 露國の遺線

又募集に際し種々の方法を用ひ其表面を蔽はんとすることあり今最近の例を示せば近時露國政府が其内債募集に方り採りし所の方法なり請ふ之を略陳せん抑々西曆千九百五年以來露國政府が巴里伯林の市場に於て募債に志を得ざりしは世人の熟知する所にして今更嗽々するを要せず然るに時局は素より募債の難易に由り輕重を生ぜざるも時局の發展は募債の難易に多大の影響を及ぼすは論なく露政府は外債の難きを發見し終に初志を翻し資を内債に需むるの已を得ざるに至れり然るに露國は素より工商の國に非ずして資金に裕かなる能はず陽に二倍の應募ありしと雖も實は公衆の之に應ぜし高甚だ少なく或時は募集額の八分の一に達せず或時は全く之を見合せたり故に已む事を得ずして非常なる干渉

を用ひ市町村會社等の公法人私法人は勿論總ての方面に向ひ非常の壓力を加へ應募を強制せり然るに此等の法人等と雖も素より餘資あるに非ず大に中央銀行に向て金融を需め結局中央銀行をして主たる應募者と爲らしめ尙ほ其需要を充す能はずして政府は郵便貯金其他國家機關の預金を國債に投下し其代替物としては特に紙幣の發行を見るに至れり國債の募集に方り多少の駆引を爲すは時に或は免れ難き事なりと雖も前陳の如きは古今に通じて蓋し稀なり實に時局の爲軍資の供給は焦眉の急を告げ露國政府は前記の借入を以て足れりとする能はず終に進で四分利付の公債五億馬を獨蘭兩國の市場に賣出さんと試み數回の交渉の後ち終に九十五の相場を以て募集するを得しと雖も爾後獨は其引受けたる二億馬の幾分を佛白兩國銀行に引取らしめ危難を輕うせんと欲して頗る焦慮し西曆千九百五年十二月に至り八十五則ち一割以上の損失を以て頻りに賣拔きを試みたり

第六節 間接發行の組織

公債募集に當り「シンデケート」即ち應募組合を組織することあり、是れ學術上間接發行と稱するものにして近時最も行はる其得失の如きは一般財政學に詳論するを以て茲に畷々するを要せず、方今倫敦等に於て外國政府の募債に應ずる場合の如きは専ら此法に據る。元來巨大なる金額は到底二三資本家の能く調達し得る所に非ず又一般公衆が之に應ずるや否やを豫測すること難く實驗上有力なる「シンデケート」を組織するの便利にして且つ安全なるは直接發行に優るものあるを證せり。固より組合は多少の手数料又は報酬を要するも是れ所謂専門家に或る事件を依頼すると均しく無報酬の能く辨ずべき所に非ず、或る場合に於ては直接發行の方便利なるが如き感なきに非ずと雖も後者は其便宜到底前者に及ぶべきに非ざるなり。然り而して其組織は「シンデケート」の下に「オンドルライタ」即ち下請人あり、又「ブローカ」即ち仲立人あり、「ブローカ」にも主任者即ち「チーフブローカ」なる者あり、通常員あり、各々其分を守り結局の分益を期す。方今公債募集の機關斯の如く夫れ巧緻なり、豈に夫れ之なくして募債に成功するを得んや、募債を輕視するの輩正に一考すべきの事に屬す（甲種附録第一號參觀）

第七節 募集雜件

第一目 一時及部分募集併に拂込回数

國債の募集に付き尙ほ二三の注意すべきものあり何ぞ哉、部分拂込一時拂込、拂込回数等の事はなり、事固より重大ならずと雖も亦研究に値するものなしとせず、請ふ一時及部分拂込より左に陳述せん

公債の募集は之を一時に施行すべきや、又は之を漸次になすべきやは實地問題に屬し固より一定の標準存するなし、元來公債は必用の費途ありて初て募集すべきものにして必要なきに之を募り資金を庫中に睡眠せしめ以て利子を支拂ふが如きは財政上より視るも金融上より視るも共に不利なるは論を俟たず、然りと雖も理論と實際とは必ずしも並行し難く、公債の募集は金融緩漫なるときに之を爲し以て其拂込を爲さしめざれば應募者に苦痛を感ぜしむることなしとせず、慮らずんばある可らず、而して其目的を達するに二方法あり、其一は異種の公債を隨時に募り其口を分ち以て需用の資金を得るもの、其二は時を分て同一の公債を幾回にも分ちて拂込ましむるものにして所謂部分拂込法是なり、後者は通例實際の成功

一時募集
及部分募
集

拂込回数

一時に巨額を要する場合

拂込方法

容易なりと雖も抑々此二方法の得失は國土人情に依りて自ら異なる所あるを知らざる可らず、民の貯蓄心に富むこと佛國の如きは募集金を幾回にも分ちて以て拂込ましむるを好しとす、即ち此の如くするときは第一回到相當の金額を拂込み第二回よりは儉約勉勵して貯へたる金を以て拂込を繼續するを以て隨て應募者多きも、我國に於ては例へば初度の拂込を四分の一とし爾後は節儉勉勵日常得るものものを貯蓄し第二回繼續拂込の準備を爲す者蓋し稀なり、佛國の如きは其少きも八回多きは二十回内外に拂込を分ちしことあり、是れ國民の性行に鑑みしものにして至當の處置なりと云ふを得べし

然れども政府は時として多額の資金を一時に要することあり、即ち公債の借換をなす場合若くは償金を一時に拂ふ場合の如きは是なり、彼の有名なる償金拂ひの時に於ては佛國に於ても一時に全額を拂ひ込む者には幾分の利便を與ふべしと規定したるの例あり、斯の如く金額の必要なる度合を測り其宜きを制するは最も緊要にして事老練家の方寸に存して決して一片の推理を以て豫め机上に定め得べきものに非ざるなり

第二目 保證拂併に部分拂の方法

次に論ずべきは保證拂の事はなり、元來保證拂は募集の終結を完全ならしむる爲め必要にして其目的を達するには必ず之なかる可らず、例へば茲に百圓の申込をなす者あらん乎若し保證金の拂込なくんば一旦應募申込をなすも他に利益多き放資の道開くるときは申込を顧みず資を之に向け拂込をなさざることをなさを保せず故に違約を豫防するが爲め保證拂金を徴收するの必要あり、今日の實況は概ね申込額の一割即ち百圓に付十圓を保證金とし申込の際之を拂込ましむるを通例とす、蓋し應募者は一割を先取せらるゝときは他に之に超過すべき營利の事業あるに非れば拂込の意思茲に確定すべければなり、而して一旦拂込の申込をなせし者が拂込の時期に於て拂込をなさざる時は例へば拂込期より一箇月の後は申込は無効に歸し保證金は沒收せられて政府の有に歸す、元來保證拂は公債募集上必要缺く可らざるものにして其割合は一般の形勢上元金の一割を程度とするが如し、而して所謂部分拂なる者も歩合を以て之を定めず、一回何圓と金額を以て定むるを便利とす、例へば第一回は百圓に對し十圓、第二回は五圓、第三回は五圓五

拾錢と定むるが如し、單に外形の美に拘泥し第一回は一割、第二回は五分、第三回は五分五厘と定むるが如きは之が爲め不便なる端數を生じ取扱に便ならず、是れ一小瑣事に屬すと雖も亦以て一顧の値なしとせず、而して保證拂は第一回の拂込に振替へ應募者をして特に拂込の爲め送金を爲さしめざるを便とす

第三目 募集初年の利子及募集費の支拂

本節を終るに及び一言すべきは募集初年に於ける利子拂及募集費は之を募集金より支拂ふべき哉否哉の問題是なり、蓋し豫算に於て豫期し得べき募集の場合に於ては其必要なしと雖も豫期するを得ざる巨額の募集を要する場合例へば兵亂、騷擾、天變地殃の爲め起債を要し、又は借換の爲め市場の情況に依り巨額を募集するときは初年又は月割利子借換ふべき公債の利子支拂期後に借換起りたるときは其月割利子及手数料等は之を豫算中に求むることを得ず、勢ひ募集金より支拂ふの外道なかるべし、然れども是れ甚だ然る可らざる事なるを以て其必要ある場合に於ては法律を以て之を規定せざる可らず、目下歐米諸國皆然らざるはなし、此の如きは實際の必要上時々其例を見る所にして固より己を得ざるに出るもの

とす、事甚だ小なるも亦以て留意すべきの事に屬す

第六章 利子拂

第一節 利子拂回数

公債多額に達すれば歳出爲に増加するは當然の數にして、其元利支拂は多大の影響を市場に及ぼすや論を俟たず、就中利子支拂に關しては最も深重の注意を要す、今各種公債箇々に就て之を見れば我國に於ては公債利子の支拂期は之を分つて年二期とす、然りと雖も元金漸やく多きに至れば二期の利拂は國庫の爲め市場の爲め甚だ便ならず、英國の如きは之を四期に分つと雖も尙ほ著しく金融に影響し、坊間特に「利拂月」の稱號あり以て其影響の大なるを卜するに足れり、佛國亦四期拂の法を採る抑々亦故あるなり、其二期なると四期なるとを問はず、利子拂は俗に所謂「盆暮」西洋流に「盆暮」のごときものなし、取引は二ヶ月若くは三ヶ月と云ふが如く、箇々循環旋轉す故に金融は周年平均を保つを得と云ふが如き市場決算期前に於てするを最も便利とす、此期間を經過せば、常に便利ならざるのみならず却て金

融の緩漫を來すの虞なしとせず其金額多大なるに至れば四期の分割亦已むを得ざるべし。目下我國の公債利子支拂期は種々にして左の如き實況を呈す即ち

- 一 海軍公債 五月 十一月
- 二 整理及軍事の二公債 六月 十二月
- 三 帝國五分鐵道事業及北海道鐵道 三月 九月 五月 五分
六月 十二月 四月 四分
- 四 事件の爲に起りたる新債

内債	五分	三月	九月	六月	十二月
	六分	三月	九月	六月	十二月
	六分	四月	十月		
外債	四分半	二月	八月	一月	七月
	四分	一月	七月		

我國は通じて十二

なりとす。故に各種の公債に就て之を論ずれば其利子支拂期は一箇年二回なりと雖も全躰に通計しては即ち年八回となり多少紛雜の跡なしとせず、他日一大整理を爲すの必要を生ずるや疑を容れず、其時に當り誤りて利子支拂期を二期とせば

甚しき不便を生ずべし、豫め之を内外の實例に鑑み研究する所なくんば恐らくは臍を噬むの悔を貽さん豈に顧みざる可ん哉

第二節 利子拂と租税の納期及市場との關係

往時公債の利子支拂は府縣廳に於て之を爲したるも、今や國家は其取扱を中央銀行に一任す、是れ事理當然の事に屬し固より其處とす、而して利子の四期拂は前陳の如く市場を調和する上に於て頗る有効なりと雖も單に事を銀行事務取扱上の便否上より論じ其繁多なるを理由とし物議を試みる者なきを保せず然れども斯の如きは大體に通ぜざるの俗論にして固より一考の値なし、納税の時期亦大に金融に關す其詳細は之を次卷に譲るべしと雖も、納期は公債利子拂の期と相待て之を定めざるべからざるや明かなり請ふ試に一言せん

茲に一納期間の租税既に納入せられ政府が百般の事業用度に向て之を拂ひ出すに際し國債利子の支拂之に伴ふときは市場に通貨の流通を増加し物價に影響すべきは數の免れざる所なり、元來通貨の循環行動の關係は理財上最も緊要の事に

納期の前
後に注意
を要す

屬す、故に公債の利子支拂の期は事情の許す限り租税納期の前にあるを便宜とす。然りと雖も納期を定むるには納税者の税金納附の難易亦大に慮らざるを得ず、獨り國庫と市場との情況に依り之を決する能はざるは論を俟たず、正に三者の關係を折衷斟酌し以て其宜きを制せざる可らず、抑々金融の狀況は各國其趣を異にす、然りと雖も我國の如き非常の異變ありざる限りは金融緩急の時期粗々一定すること恰かも大潮時、小潮時の一來一去して其季節あるが如し而して其干満の程度豫め測知するを得べく、假令其間小波なきに非るも亦大差なきを得べし、吾人之を既往に徴するに我國の金融は春夏に緩にして秋冬に急なるは普通的情況なりしと雖も近年事情一變せり、是れ綿業の爲に生じたる變化なり、今や國內綿業の中心たる大阪の金融其影響を蒙ること少々に非ず、即ち我國にては秋季に於ける資金の需用は依然大なるに、尙ほ春季に於て金融繁忙なるに至れり、注意せずんばある可らず、若し國債利子の支拂を以て其急に應ずることを得ば市場を調和する蓋し鮮少に非ざるべし、利子支拂の時期其宜を得ると否とは市場に至大の關係ある哉疑を容れざるなり

金融

第三節 利札の割引併に利子繰上拂

第一目 利札の割引に就ての注意

以上の事を論ずるに當り敢て直接の關係なきが如くなるも、近頃頻りに支拂期限の未だ來らざる利札を以て之を割引し以て一時の融通を計るべしと論ずる者あり、是れ一見頗る活達の方法なるが如しと雖も、元來此事たる公債が据置年期中に在る場合か、若くは其切取りたる利札の屬する證書が其利札の支拂期までに當籤せざる見込確定するかの場合に非れば時に或は一方の損失に歸することなしとせず、例へば本年末に至り支拂はるべき利札を期限前に切斷し之を擔保として金融を得るとせば蓋し一時の融通其目的を達すべしと雖も、元來公債は成規に依り償還の事あり、何ぞ知らん前きに利札を切斷したる後に抽籤の執行ありて其公債證書が次の十二月に至るまでの間に偶然當籤するも、其利札は財界を轉帳し遙に浦鹽、上海等の如き遠隔の地方に流出し假令利札の歸るあるも已に請求の權利を失ひ遂に無効に歸することなきを果して然らば利札の割引を得たる者は爲に損失を蒙ることなかるべしと雖も割引を爲したる者は非常の損失を蒙るべし、

安然に割
引を爲し
合得べき
場

而して翌年の上半期に支拂はるべき利札は抽籤の不履行を知るに非ざれば之が割引をなす能はず、何となれば公債の償還に際しては利子は概ね月割にて支拂ふを以て若し一月二月に於て當籤するときは四五ヶ月分の利子は全く割引人の損失に歸す可ければなり、要するに此方法たる便は則ち便なるも、一國の財政上切取りたる利札の支拂期までに償還の事なきを確知する場合の外安然に之を行ふことを得ざるなり

第二目 繰上拂の實例及新案

右の外市場逼迫に際し利子の繰上拂を爲し救済を試みることをなしとせず、今其實例を舉れば西曆千八百七十三年の恐慌に於て米國政府は十一月拂の利子を繰上げて九月に支拂ひ、又西曆千八百九十年倫敦のパーリン恐慌の餘波を受け市場非常の壓迫を感じしとき救済の爲め大に其國庫を開き利子の繰上拂を斷行し千二百萬九千九百十五弗第二編第二章第三節參觀即ち凡そ二千四百二萬圓を支出せしことあり、我國に於て未だ其の例なしと雖も頗る參考すべきの價值あり、今一步を進め繰上拂金高は支拂當時の利率を以て割引するものとせば市場を

實例

繰上拂の割引

濕ほすと同時に國庫に損失なく更に妙ならん、即ち例へば六月渡の利札に對し三月に繰上支拂を爲すときは六月に交付すべき利子金額より其金高に對する三ヶ月分の利子を差引きたる金額を交付するものとするの類是なり、其他支拂期に前たち先づ以て例へば三月までの月割利子を支拂ひ置き六月に至り更に四五六の三ヶ月分の利子を支拂ふも一方法なるべしと雖も斯の如きは繁冗の手續を要するを以て前記割引法の簡易なるに若かざるなり

第七章 元金償還

第一節 償還の時期

公債利子の支拂が金融に影響するは上來論ずる所の如し、請ふ今一步を進めて元金支拂の事を説かん、抑々公債償還の時期は何れの國に於ても大藏省證券有期一時支拂又は有期定期支拂の場合の外某月某日若くは某月に之を施行すべしと契約的規定をなすものなく、其元金は財政の許す時期に於て之を支拂ふを以て殆ど其常とす、則ち償還の抽籤は甲年度に於て之を爲すも、乙年度に於て爲すも可な

り而して同一年中に於ては其何の月に於て之を爲すも事固より行政當局の任意にありて毫も法規の檢束する所なし然れども獨り財政一方の便利に依り金融の如何に留意せず一時に巨額の償還を爲し又は抽籤の時期に注意せざるときは忽ち市場に影響す慎まざればある可らず

償還の許す事
情の初期に
限り年度
の初年度
す之を執行
すべし

元來公債の償還は市場平穩何等の凶兆なく又單に財政上より達觀するときには國庫に餘力あれば事情の許す限り可成速かに之を執行するを得策とす何となれば公債の償還は利子支拂の義務を消滅せしむればなり例へば四月一日より始まる新年度の科目に千萬圓の國債償還の額ありとせん乎若し年度の初に於て幸に多少の繰越金あるの見込あれば前年度末に於て抽籤を執行し新年度の始に元金を支拂ふべし是れ他なし蓋し年度の區分あるは國庫出納の爲にして償還抽籤の執行を律するものに非ざればなり然りと雖も現金は徒らに國庫に睡眠するものに非ず又假令遊金あるも國庫全鉢の收支の状況を慮らず輕卒に公債を償還し爲に國庫空虚となるときは忽ち他の經費支拂に故障を來し短期公債を起し補缺を爲すの必要を生じ其結果時として彼是の利子を比較し是の利子を高むるの已む

現金豊富
なりと雖
も償還は
他の對し
て之を執
行するに
必要あり

を得ざることなきを保せず故に假令金庫に餘金あるも前後の關係を慮らず漫然償還を執行するが如きは固より策の得たるものに非ざるなり

第二節 償還に付き債權者の意向

抑々債務者が其債務を辨濟するは當然の道理にして國家も亦其負債償還の義務を等閑に付する能はざるは論なき耳然りと雖も國家は其行爲に於て個人と其趣を異にし萬般の利害總て公益上より之を割出さざるを得ず公債償還の場合に於ても亦單純なる義務履行の外尙ほ大に慮らざるを得ざる所のものあり何ぞ哉他なし公債の償還は果して常に世人が之を喜ぶや否を知ることは是なり元來公債證書所有者の階級に二あり

第一 後年の爲め眞實に貯蓄を爲す者にして學理上眞正の公債所有者と稱する者

第二 賣買寧ろ射利の爲め所有する者にして投機的公債所有者と稱する者
是なり當籤の場合に於ては前者は更に他の有價證券を購入するを通例とす後者

公債證書
所有者の
階級の

も亦徒らに現金を保有する者に非ず必ずや他の有價證券に變更するは却て前者より敏なるべし故に世人が抽籤償還を喜ぶは公債價格の減少したる場合の外之あるなし果して然らば急劇なる巨額の公債償還は他の有價證券の價を貴くすること恰も馬斃れて牛を購へば牛價を昇騰せしめ牛斃れて馬に乗替ふるときは馬の價を高くすると一般にして財政上金融上共に策の得たるものに非ず廣く諸般の事情を斟酌し以て之を決せざるを得ざるなり

若し夫れ公債の償還を受けたる者の状態果して此の如しとせば例へば額面百圓の公債證書にして數年間依然として百圓の價格を保つときは誰か償還を歓迎する者あらん和蘭陀に於ては公債の償還に遭遇すれば人其不運を悲むと云ふ而して其利率僅かに二分以下とす故に世人が公債の償還を喜ぶは其價格降下し例へば其賣買實價は僅に七八十圓なるに額面價格を以て償還せらるゝ時にあり之を我國の實歴に徴するに明治の初年我公債の價格貴からず當時當籤は大に世人の歓迎する所と爲りしも明治十九年二十年に至りては其價格騰貴し平價以上に出で世人始めて償還を喜ばざるに至れり然るに米國が南北戰爭以降租稅幣制貿

債權者は
通例償還
を喜ばず

償還を歡
迎するは
下落的時
なり

易等に向ては殆ど顧慮する所なく獨り財政の都合に依り早急償還を是れ事とせしが如きは吾人の採らざる所にして假令國庫に餘力あるも能く市場の景況に注意せざれば公債の償還は却て財界に變動を起すの虞なきを保せざるなり方今財界の事權衡最も微妙にして鴻毛の觸るゝも尙ほ能く之を亂すに足る況や元金の
大なるに於ておや其注意を要する論なき耳

第三節 償還の法方

第一目 總論及抽籤償還

公債償還の方法に二あり(一時借入の如き特別の場合を除き)

- 一 抽籤償還
- 二 買上償還

是なり元來公債は一國經綸の必要より生じ金額の巨大なるは殆ど其常勢たり其巨大の金額を一時に償還するは決して爲し得べきの業に非ず又券面番號の順序を以て償還するが如きは固より公平の處理に非ざるなり是に於て財政の便宜を

謀り金融の緩急に應じ適當の額を定め抽籤に附するを以て通義とす、然れども茲に百圓の公債券あり其價格九十圓乃至九十五圓に降下するに當り尙ほ抽籤償還の方法に據るは財政上當然の注意を缺くものと云はざるを得ず、元來償還に使用する金額は國民が其義務を重じて出金したる租税より成るものなれば政府は固より慎重に之を使用せずんばある可らず、然るに平價以下にある者を平價にて償還するは暗に不利を納税者に嫁するものにして理事者當然の注意を取るものと云ふを得ず、豈に戒めざる可ん哉、加之抽籤は廣く償還金額を内外に分散す、筆醜流に投じ三軍の士爲に死を致さんことを思ふは是れ軍旅の情なり、市場の事は則ち然らず、滋味口腹に及び利潤牙籌に表はるゝに非ずんば其効用を全ふすること能はざるなり、而して其或は内國市場の逼迫するに際し資を外國に流出するの因となるなきを保せず、果して然らば只に金融に向て効力薄さのみならず或は却て不利を來すの虞なしとせず、豈に鑑ざる可けん哉、買上償還に至りては則ち然らず、資力を一局部に集中することを得るを以て金融漸やく逼迫し或局部に於て資金の需要殊に甚しきが如き場合に於ては即ち其部分に向て償還を執行し得べく、其

抽籤より
生ずる内
外市場の
關係

金融を緩和する上に於て奇功を奏する哉疑を容れず、之に反し内國に於て金融緩慢にして外國に於ては逼迫し有價證券廉價なるときは外國市場に向て買上償還を爲し内外市場を調和し併せて國庫を利するの便あり、抑々買上償還は一の奇道に屬し固より苟もすべきに非ずと雖も運用其宜きを得ば亦以て財政及金融上に小補なしとせざるなり

第二目 買上償還

一 得失及效力

買上償還は一面に於ては國庫の利害に係り、一面に於ては金融の消長に關す、請ふ先づ國庫の方より之を辯ぜん、例へば或年度に於て國は豫算上國債償還の爲め一千万圓の資金を得たりしに公債は不幸にして一割の下落を示し九十圓に下落し居るとせん、此時に際し抽籤の方法を採るときは償還高は一千万圓に止まるべしと雖も買上償還を施行すれば千百萬圓の公債を消却するを得べし、勿論買上の爲め多少價格の騰貴を來すべしと雖も尙ほ千万圓以上を償還し得るは疑を容れず、而して其買上は固より公開の市場に於て之を爲し毫も脅迫する所なし、故に公

債證書の所有者は之を民に賣るも國に賣るも財産上の利害に關することなく、其價格は政府買收の下に需要増加するの利あれば多少之を騰貴せしむるの傾向あるも之を下落せしむるの憂なく隨て賣者の爲に利あるも其害なき哉明なり、我國に於ても法規上買上償還の事ありて隨時之を施行す然るに一方に於ては買上償還を不可とする者あり、其説たるや抽籤に至る迄舊態を持續すれば公債は平價に復すべきに政府に於て百圓以下を以て買上ぐる故に其價格騰貴せずと云ふに在り、然りと雖も是れ其一を知りて未だ其二を知らざるに坐するものにして固より採に足らざるなり抑々公債價格なるものは財政上、經濟上の實力に依りて定まるべきものにして抽籤買上等の如き人爲を以て之が維持騰貴を試みるべきものに非ず何となれば抑々人爲は究まる所あり、其究局に達するに及んでは反動の爲め不測の災を來すの虞あればなり、人爲の以て恃むに足らざる知るべき耳

今之を輓近の實例に徴するに抽籤償還は必ずしも論者の論旨を證明せず、即ち三十五年五月の抽籤中其償還高の最も大なる金祿公債を以て之を見るも四月中は八十七八圓の間を昇降し月末利拂に近づくに至り八十八圓三十錢、八日より二

買上償還
を不可と
論ずるの
謬と

實例

十八日まで)の最高價を示し、五月に入り八十五圓七十錢即ち最高價と二圓六十錢の差を生じ凡そ利落價格に匹敵し、五日の抽籤に至るまで同價を保ち尙ほ十二日まで之を維持し、十四日より(八十五圓八十錢増進を示せり、三十六年二月の抽籤には少しく騰貴の模様ありと雖も抽籤後更に高價を示せしを以て之を見れば騰貴は抽籤に因するものに非ざるを知るに足れり、即ち一月中の最低は九十三圓五十錢(五、六、七の三日)にして最高は九十六圓二十錢(二、三、四、五の五日)なり、二月に入り少しく下落し一日より八日に至るまで九十六圓二十錢を保ち其より少しく騰貴し十一日即ち抽籤の前日には九十七圓五十錢となり當日には九十八圓となり翌日より十七日に至るまでは九十七圓五十錢を保ち、爾後漸次上騰し月末二十七八日には九十八圓五十錢となり、三月に入り一日二日の兩日には九十八圓八十錢となれり、同年十一月の抽籤も粗ぼ同様の事績を表はし十一月は利落ち月なるを以て二日三日には九十四圓八十錢の低價を示せしは數の然らざるを得ざる所のものあるに由る、其より二十四日の抽籤に近づくに従ひ漸次に價格を復し二十一日に至り九十七圓五錢となり、抽籤當日即ち二十四日も同價を保てり、是より月を

越へ十二月十七日に至るまで同價を保ち十八日には九十七圓八十錢の上騰を呈はし二十一日まで之を保ち復た九十七圓五十錢に歸れり。由是觀之此度の抽籤は少しく効驗ありしが如しと雖も、抑々抽籤前の騰貴は利落下落の反動に由るものたるは後の價格維持の實況を見て之を知るに足り、而して年末金融繁忙の期に際し却て騰貴を呈はしたるの事實に徴するは其全く無効なりしを證するに餘りあり。元來公債價格自然の下落を救はんが爲め抽籤償還を爲すが如きは其額小なれば効力なく大なれば則ち市場を攪亂し而かも國庫の損失となる慎まざれば可らず。

二 平價以上買上償還の不可

我國に於ては納稅者の利益を重んじ法律は特に平價以下買上の事を規定す、然るに又一方に於ては平價以上にて買上償還を爲すを得策とする者あり、其説たるや前説と其趣を同ふし平價以上の買上をなせば公債の價格大に騰貴すべしと云ふにあり、英米の如き此例に乏しからず、然れども是れ徒らに國費を増し公債價格を高うせんと欲するものにして固より採るに足らざるなり。元來抽籤償還は百圓

人為を以て公債價格を上下するは不可なり

を以て百圓の償還を爲し得るも償還の方法其宜を得ざれば百圓は百圓を償ふ能はず、平價以上例へば利落百三圓若くは百五圓を要し、甚しきに至りては平價以上一割四分若くは二割以上の高價を以て買上償還をなしたる例なきに非ず。是れ既説の如く一般納稅者に向て責を辭すること能はざるの處置と云はざるを得ず、況や平價以上の買上は世人が其舉を豫想し公債價格に非常の變動を來し財界を紊亂するの憂あるに於ておや、英國公債の利率は西曆千八百八十九年の借換以來従前の三分利は二分七厘五毛となり、同千九百三年には二分五厘に減少すべき者なり、然るに世平かに財政に餘裕あるに當り英國政府が買上償還をなせしに際しては百磅の公債が會て百十三四磅に上騰せしことあり、英國の金利固より薄しと雖も現に其利率二分七厘五毛にして西曆千九百三年には二分半に減すべき公債が平價以上一割三四分に上騰するは買上償還の結果に非ずして何ぞや、知るべし、南亞及北清事件の起りしより會て百十三四磅なりし公債の價格九十一磅に落つるの事實を顯出し世人をして一驚を喫せしめたることを、今此變動を金利と比較すれば實に同日の論にあらず、斯の如き變動は新募集と買上償還停止との外に其原

因を發見する能はざるなり

元來平價以上の買上償還は市場に變動を及ぼすこと多大なるは之を英國の近況に於て見るを得べく、現に西曆千九百一年中には銀行の資産勘定に著しき差減を生じ、爲に不便を感じし者二三に止まらず就中某大銀行の如きは半年に十萬磅の差減を生じ、某行の如きは公債が會て百十四の價格を保ちたる時九十の割合にて其擔保價格を定め確實無比と信ぜしに其價格の下落するに當り之を改定するに困難を感じ、極端の下落に達せしに際して尙ほ舊價格を存するの窮狀に陥れり、豈に夫れ之を市場の健全を保つものと云ふを得ん哉、須らく鑑みるべきの例證なり、然るに尙ほ平價以上の買上償還は證書の價格を高うするの利ありと論じ得々たる者あり何ぞ其誤まるの甚しき哉、凡そ商家の忌む所は價格の低きに非ず、又其高きに非ず、只其變動の常ならざるにあり、已を得ざるの數に出る所の物價自然の變動は之を忍ばざるを得ざるも人爲を以て前陳の如き變動を生ぜしむるは危険甚しきものにして最も怖れざるを得ず、即ち政府一朝買上を止むれば公債の價格俄然として下落し買上を施行せば其價格忽然として上騰す、誰か之を危ぶまざ

らんや、平價以下の買上償還は只に公債價格の騰貴に限度あるのみならず、又其下落を止むるの益ありて非常の變動を生ぜざるも平價以上の買上の結果は全く之に反し財政上は勿論市場に不利を生ずるものと云はざるを得ず、請ふ左に英國近年の實況を表出せん

第三表

年次 西曆	公債價格 「二分七厘五毛 「コンソール」		同月利子歩合	
	最高	最低	市中	中央銀行
一八九六	一一四、〇〇〇(八月)	一〇五、一二五(一月)	二、〇〇〇	二、〇〇〇
一八九七	一一三、八七五(二月)	一一〇、六二五(三月)	四、〇〇〇	二、〇〇〇
一八九八	一一三、一二五(一月)	一〇六、七五〇(十月)	三、〇〇〇	二、七五〇
	同	同	同	二、三七五

最高	一八九九		同	四、〇〇〇	同	二、六二五
	最低	最高				
一一一、五〇〇(一月)	九七、七五〇(十二月)	一〇三、二五〇(六月)	同	六、〇〇〇	同	五、六八八
九六、七五〇(十二月)	九七、八七五(二月)	九一、〇〇〇(七月)	同	四、〇〇〇	同	二、七五〇
九七、八七五(二月)	九一、〇〇〇(七月)	九九、〇〇〇(七月)	同	四、三二三	同	三、八七五
九九、〇〇〇(七月)	九七、二五〇(一月)	九八、二五〇(一月)	同	三、〇〇〇	同	二、三七五
九七、二五〇(一月)	九六、五〇〇(三月)	九四、五〇〇(九月)	同	三、七五〇	同	三、三八七
九八、二五〇(一月)	九三、五〇〇(九月)	九六、五〇〇(三月)	同	四、〇〇〇	同	二、一四一
九六、五〇〇(三月)	九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	同	四、〇〇〇	同	三、五〇〇
九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	同	三、〇〇〇	同	三、三七五
九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	同	三、〇〇〇	同	二、〇六三
九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	九三、五〇〇(九月)	同	三、〇〇〇	同	二、〇六三

最低	一九〇五		同	三、〇〇〇	同	二、五〇〇
	最高	最低				
九三、七五〇(一月)	九一、二二五(四月)	八六、〇〇〇(九月)	同	四、〇〇〇	同	三、〇〇〇
九一、二二五(四月)	八六、〇〇〇(九月)	八六、〇〇〇(九月)	同	三、五〇〇	同	三、五〇〇

由是觀之西曆千九百一一年七月の如きは市場に於ては例へば百圓の現金に對して利子二圓三十七錢五厘を受取り得るに過ぎざるに、二分七厘五毛の百圓公債に對し九十一圓以上を投ずるを望まざるの市況を呈し、利率の高低と公債價格の遭遇せざることを夫れ斯の如く實に異數の結果と云はざるを得ず、又英國公債總額は公債價格の最高に達せし西曆千八百九十六年には六四八、四七四、一四三磅、其最低に降りたる同千九百一一年には六九〇、九九二、六二二磅にして其差増四千二百五十一萬餘磅に止まり其差違六分五厘に達せず、而して價格の下落は二割以上に達す。前記兩年財界の情況多少斟酌せざるを得ざるものあるは論なしと雖も、斯の如きは非常の差違にして新債の募集等は此下落の主因たらざるや明かなり

又一步を進めて之を倫敦所在の我國公債價格に比するに前陳所說の誣ゆ可ら

倫敦市場
に於ける
我國公債
の價格

第一編 第一卷 公債

二六

ざるを知るに足らん抑々我公債の倫敦市場に入るは僅々數年前にありて未だ英國人士の熟知する所と爲るを得ず隨て其價格の變動一層甚しきものあるは當然の理由なるべしと雖も事實は全く之に反し其變動は英公債の如く甚しからず請ふ之を左に表出せん

第四表

年次 曆西	裏書軍事公債		同月利子歩合	
	最高	最低	市場	中央銀行
一九〇〇	一〇五、〇四二(八月)	一〇〇、〇四二(五月)	同	同
一八九九	最高	一一〇、三一二(五月)	三、〇〇〇	二、二五〇
	最低	一〇一、九〇八(十二月)	六、〇〇〇	六、七五〇
一八九八	最高	一〇六、四二〇(九月)	二、五〇〇	二、六五〇
	最低	一〇二、三四五(三月)	三、〇〇〇	二、七五〇

一九〇一	最高	一〇五、一四二(十月)	三、〇〇〇	二、七五〇
	最低	一〇〇、〇四二(六月)	三、〇〇〇	二、五〇〇
一九〇二	最高	一〇七、六九七(九月)	三、〇〇〇	三、〇〇〇
	最低	一〇四、一二五(十二月)	四、〇〇〇	三、九三七
一九〇三	最高	一〇七、四四二(三月)	四、〇〇〇	三、七五〇
	最低	九〇、三四二(十二月)	四、〇〇〇	三、六八八
一九〇四	最高	九一、一〇八(八月)	三、〇〇〇	二、八三七
	最低	七六、五六二(四月)	三、五五〇	二、四六八
一九〇五	最高	一〇六、一六八(十一月)	四、〇〇〇	三、八七五
	最低	九〇、三四六(一月)	三、〇〇〇	二、五〇〇
一九〇六	最高	一〇六、四二一(五月)	四、〇〇〇	三、五〇〇
	最低	一〇二、八五〇(一月)	四、〇〇〇	三、六二五

又倫敦市場に於ける獨佛等數國の公債價格と英國確定公債二分半の計算の價

第七章 元金償還 第三節 償還の方法 第二目 買上償還

104

倫敦市場に於ける英國公債と各國公債の比較

格とを比較するに左の如し、以て英國公債に前記特有の事情あるを知るべき耳

第五表

公債の種類	西曆千八百九十五年 乃至九十八年の平均	同上千九百三年 三月末日の價格	増減歩合(十)印は増	對投下資本に 對する實收
英國二分半利公債	一〇九、七三五	九〇、六二五	一七、一四	二七、五八
獨國三分利公債	九六、六二五	九二、	四、七八	三、二六〇
佛國同上	八八、一二五	一〇二、	(十) 一五、七四	二、九三四
奧國四分利公債	一〇二、七五〇	一〇一、	一、七〇	三、九六〇
露國以上	一〇三、	一〇二、	〇、九七	三、九二一
埃及同上	一〇五、	一〇七、四分の三(十)	二、五五	三、七二二

由是觀之英國公債は之を他國の公債に比し甚しき下落を示すものと云を得べし、然れども投下資本に對する利子は尙ほ之を他國に比して著しき差違を保ち其信用の確實なる天下に冠絶す、而して英人の調査に依るに國民一箇年の貯蓄は凡そ一億磅なりとす實に盛なりと云ふべし又倫敦に於ける最近十箇年間の諸國の公債價格は左の如し

第六表

國名	西曆千九百七年三月末			同千八百九十七年三月末		
	利率	價格	實際の利率	利率	價格	實際の利率
英吉利	三五	八五、一八八	二二、八九	三五	一一〇、五〇〇	二五
佛蘭西	三〇	九五、〇〇〇	三三、六	三〇	一〇三、五〇〇	二八、六
獨逸	三〇	八三、五〇〇	三三、三	三〇	九七、〇〇〇	三三、〇
普漏西	三五	九四、〇〇〇	三三、三	四〇	一〇三、〇〇〇	三三、三
匈牙利	四〇	九四、〇〇〇	四六、〇	四〇	一〇三、五〇〇	三三、〇
印度	五〇	一〇三、〇〇〇	三三、三	五〇	八八、八七五	四〇、六

三 部局に對する買上償還

此の如く平價以上の買上償還は多大の禍因を包含し固より採るに足らずと雖も平價以下の買上償還は常に納稅者の利益を保護するのみならず市場を調和し、瑣少の金額を以て比較的、多くの効を收むるを得るの利あり、抽籤償還の場合に於

ては既論の如く償還の金高全國に撒布し其結果宛も微雨の草木を潤すが如くに
して其雨量と同量の水を必要の局部に灌ぎたるが如き著しき効果を收め難し、而
して自國の公債多く外國の市場にある場合の如きは外國に向て送金を要するの
原因となることなしとせず然るに買上償還の方法を以て一朝金融の逼迫に際し
て其局所に資金を注入するときは大に其功を奏するや必然たり、例へば大阪市場
稍や急調を呈するときは其方面に向て直ちに買上償還を施行するは最も應急の
良策とす然れども是れ恰も按摩療治若くは皮下注射の如く市場一部の澁滯を疏
通し其苦痛を和らぐるの應急手段にして其根治法の如きは固より徐ろに之を講
ぜざるを得ざるなり

以上陳述する所に反し内國市場に於て金融緩慢を告げ且つ國庫に餘裕あるに
方り外國市場に於て我公債の價格割合に低廉なるときは、進て之を購入し以て償
還を爲すを力むべし斯の如くなれば當に内外市場を調和するのみならず併せて
國庫に少からざる便益を與ふべく、又時に外國市場に於て我公債の價格を維持す
るの効力なしとせず然りと雖も此の如きは皆是れ變に應ずるの臨機手段にして

買上償還
は内外の
市場の調
和するの
効力あり

固より吾人の衷心冀ふ所に非ず、只速に國富を増殖し正當に抽籤償還を爲すの時
期あるを望むは論なき耳

四 我國に於て買上償還を平價以下に限るの可否

我國の現行法にては前述の如く平價以下の時のみ買上償還を施行すべしと規
定すと雖も一方より之を視れば或は正直に失するの觀なきに非るなり何となれ
ば平價以上と雖も利子勘定に於て得る所あれば即ち國庫の利益となるべければ
なり、例へば六月拂の五分利付軍事公債を五月に百一圓にて買上償還するが如き
是なり、然れども凡そ財政の事は惻濟なるより寧ろ正直に過るを尊ぶ、蓋し國家百
年の事常に惻濟の人のみ之に従ふを得ば一も憂ふることなしと雖も此の如きは
實際に望む可らず、當局常に執務に活潑銳意なるを期するを得ず、法律が平價以上
の買上償還を許さざるは或は遠慮あるものと云ふを得べし、英國の實例豈に鑑み
るべきものなしとせん哉、然れども時勢の進歩は終に計算上の利益を輕視するを
得ず三十九年法律第六號國債整理基金特別會計法第六條を以て

政府は計算上利益ありと認むるときは額面以上にても買入銷却を爲すことを

我國の買
上償還

法律第六
號

得

と規定し額面以上買入の道を開けり然りと雖も法律の用語頗る謹慎にして尙ほ額面以下の買入を以て正則とするの精神言外に顯はる立法の用意周到なりと云つべし

五 抽籤償還の小不便

又抽籤償還には當籤の事實に心附かず過りて當籤證書を賣買し又は其利札を以て當籤當時の次期に於ける利拂を請求する者ありて無用の手数を費すことなしとせず卅五年五月の抽籤は金額少きも實例頗る多し斯の如きは固より賣買者及請求者の不注意より出るものにして毫も介意するの價值なしと雖も多數當籤者中には亦多少の不注意なきを得ず勿論斯の如き瑣事の爲め正當なる抽籤を猶豫するが如きは夢にだに見るべきものに非ざるも買上償還か國庫の利便となり市場の調和策となり何れの方面より見るも利ありて損なきに殊更に抽籤償還をなし瑣少と雖も前記の如き面倒を惹起するの必要は是れ亦毫も天地の間に存するなし凡そ財界の事一舉手一投足の間にも小心翼々細大留意し以て漏すことなき

を期すべきなり

第四節 公債償還に關する注意

第一目 總論

元來公債は國家の負擔なれば其償還は之を等閑に附す可らざるは多辯を要せず然れども國家は永久不滅のものにして國土廣大債額亦巨大なるを以て其負債償還の關係は個人が借金を返却する如き簡單なるものに非ず國家が公債を償還せんと欲せば先づ歳入殘餘を得ずんばある可らず蓋し此關係に於て歳入殘餘と云ふは豫算形式上の歳入殘餘を云ふの謂に非ずして一國の生存を維持するが爲に必要な文武の費用を總歳入より差引き殘る所の剩餘金を云ふものなり若し夫れ之なからん乎公債の償還は得て施行する能はざるなり然りと雖も幸にして之を得るも必ずしも之を國債償還の一途に用ふべきに非ず其償還執行に先ち須らく對照比較すべきものあり何ぞ哉

曰く減税

曰く事業の擴張

是なり、減債は此二者と其輕重緩急を斟酌し然る後之を決せざるを得ず、是れ國家の經營上三者は常に鼎足の勢を爲すべきものなるを以てなり、若し此鼎足に長短あるときは鼎は其平正を失ふを以て歳入殘餘は主として之を其短處に用ひざるを得ず、斯の如く剩餘金の使用は最も能く注意し時の實況に由て決すべくして一定不動に處理す可らず

剩餘金の
三用途の

第二目 減税

夫れ無理、有害なる租税を強徴するの結果は貯蓄の増加を妨ぐ之に反して免稅減税の結果は銀行の貯金増加となり、又は株券、債券等有價證券の價格を進め金融を幫助するの因たるを得べし、其原因の何たるを問はず貯蓄の減少は悲むべく其増加は喜ぶべきの現象たり、元來事業の資金は主として貯蓄より生ず、資金餘裕なきときは百般の事業萎靡して振はず貯蓄の緊要なる論を埃たす、例へば資本を募り一銀行を組織せん乎善良なる銀行は其資本は概ね之を準備とし預金を以て割引貸附の資に供す、即ち知る預金は營業の基金にして之が減少は大に事業の進歩

を妨ぐるを、故に獨り租税のみならず、其他直接間接に貯蓄減少するの因あるは甚だ憂ふべく其原因の發生は努めて之を避け其存在は力めて之を排せざる可らず、故に減税の結果貯蓄の増加を視るは甚だ可なり夫れ然りと雖も一方を顧みれば國に負債あり、借て而して返へさざるの理なきを以て幸に歳入に剩餘あれば減債の策亦講せざる可らず

第三目 減債

凡そ世上の事其何たるを問はず、一の偏見に依り事を處するは識者の爲さる所なり必ずや全面を通觀して終局の全きを期せざる可らず、故に以上の權衡を圖り、一年度に於ける歳入殘餘を減債の爲に用ふるを可なりと決するに於ては則ち金融の關係に着目せざる可らず、元來公債の償還は金融に如何なる効驗を生ずるものなるや、其結果種々あるべし、雖も有價證券の價格を高うするは疑ふ可らず、既論の如く公債證書の所有者は二種あるも之か償還を受たる者は或は貯蓄の爲め或は投機の爲め他の有價證券を購入する乎若くは償還金を銀行に投する乎、又は之を或る事業の爲に放下するか孰れか其一又二を擇ひ無益に消費する者は蓋

減債と減
税と減債
の及ぼす
効驗の差
違

し稀なるべし

抑々公債の償還は貨幣の供給を變更せずして有價證券を減少し以て其價格を高うする哉疑を容れず、而して其質入價格を高め隨て金融を緩和するは當然の理なりとす、又或場合に於ては銀行の預金となり其資金を増加し隨て金融を緩和す然らば即ち歳入の殘餘を得ば公債の償還を施行するを第一の利益とする乎、曰く然らず租税と貯蓄の關係亦着目せずんばある可らず、結局國債償還は主として金融界即ち貨幣市場に影響し、免租、減税は其効驗廣く全國に延及するを通例とす、故に前者の効驗は一部に厚く後者の効驗は全部に廣かりて薄く全國に涉り多少各銀行の貯蓄を増加するの効力なしとせず、然れども又減債は公債利子の支出を減じ國費の一部を減ずるを得るを以て其結果多少租税を減少し得るは當然の數にして減債の額愈々多ければ租税を減少し得ること愈々多し故に其得失を時と場合とに照し講究其宜を制し以て決行する所あらば庶幾は誤りなきを得べし、豈に努めざる可んや

第四目 事業の擴張

夫れ然り而して歳入殘餘を以て國家必要の事業を擴張する事に就ても亦大に慮らざる可らざるものあり、先づ事實に就て一國の形勢を通觀し、或點は既に進歩をなしたるも或事項は未だ幼稚なるを以て國家の力を以て之を誘導補助し、全躰との平衡を得せしむるの必要を見るは屢々之あり、故に幸にして歳入の餘裕を得ば其足らざる所を補ひ萬事平準を得て進行するは大に喜ぶべきことなり、然りと雖も天下の事常に意の如くならざるは古今の同患たり、試に貨幣市場の冀望より之を視れば、歳入殘餘あらば悉く國債償還に用ひられんことを欲すと雖も、獨り一方を見て以て事を處する能はず、國家全躰の關係如何を通觀し所謂鼎足の勢を全ふし、釜中の水をして其平準を失はしめざる様注意する必要あるを以て國債を償還するに際しては、趨勢の如何を研究すること最も緊要なり、而して償還の重要なと同時に、起債の以て慎まざる可らざる所以を知らずんばある可らず、若し夫れ國家にして漫りに國債を起さん乎、其結果徒らに國民の負擔を重大ならしめ其幸福を増進するに由なし、故に國家は大平無事の日に於て勉て節儉を行ひ、國庫に餘力を蓄へ以て負債を還附せざる可らざるは猶ほ吾人一家の會計の如し、若

し夫れ吾人にして負債あらんか身躰健全、年未だ老いざるに先ち充分に生計に注意し餘力を養ひ努めて以て義務を辨濟せざるを得ず、國家と雖も亦何ぞ異ならん哉

第五節 償還の必要

一國が既に巨額の公債を負ふに拘はらず、尙ほ進んで新債を起すが如きは國家の生存上免れ難きの必要あるに於ては實に已を得ざるべしと雖も力めて之を避けざる可らず、既に巨額の公債あれば假令多少の不便あるも忍んで公債を償還するより他に良策あらざるべし、夫れ國家は活動物たり何れの日にか事變を生ずるや豫め測り難し、故に平時に於て償還を努め、一旦必要を生じ忽然國債を起すも民力の以て堪へ得べき餘地を存するは最も必要のこととす。然らずんば一朝饑饉の如き災變を生じ、若くは戰爭の如き事變の起るや其費用は獨り租税のみを以て支へ得べき者に非ず、必ずや三四年乃至七八年に亘りて其費用を分擔せざれば國力の得て堪ふべきに非ざるなり、則ち此の如きの場合に遭遇するときは短期公債を

漫りに後
世に負擔
を遺すは
不可なり

起すの已むを得ざるを通例とす、之を最近の實例に見るに獨逸に於ては北清事件に際し其經常歳入に不足を生じ短期公債を起せり、若し是等の事件にして關係一層廣大とならん乎、八九年乃至十年斯の如き短期公債を以て之に應ずる能はず、到底長期の公債に依らざるを得ず、然れば其辨濟義務の大部分は之を天下後世の負擔に歸するの外なかるべし、是れ近時歐洲諸國の經驗たり、然れども後世は又自ら後世の負擔あるべきを以て漫に不生産的の負擔を祖先より繼承するは其堪へ難き所にして恰も個人が先代の負擔を償却せざる可らざる窮狀に居ると一般なるべし、今日經營せる鐵道、水道、電信、築港の如き頗る生産的にして有用なるも、日進の世に於ては後世より之を視れば其式迂濶にして無用の長物に歸し却て進歩の障害となるやも未だ測る可からず、故に太平無事の日に於て財政の許す所あれば力を盡して公債を償還せざる可らず、然れども亦之に拘泥すべきに非ず、幸にして餘裕あれば償還と共に減税若くは事業の擴張を計らざる可らず、故に其何れを先きにするや否やを決するが爲に時と場合とを研究するは施政家の最も注意すべき所なり、然るに公債は未だ一公債を償還せざるに又他の公債を起し、其額累積して

終に巨額となり易く、前陳の如き憂を天下後世に及ぼすの虞なしとせず、故に天下後世の爲め住々償還を急務とせざる可らざることあり。是等は實際の分析を要する所にして、博學經驗ある人と雖も時に誤りなしとせず、大に注意する所なきを得ざるなり。

第六節 償還の財源

第一目 臨時収入

公債の償還をして其効力を大ならしめんと欲せば、勢ひ巨額の資金を要し、歳計上より之を見れば、其資金を得る事頗る難事にして、市場より之を見れば、其影響頗る大なるものなしとせず、加之減債、減税及事業擴張の三者は所謂鼎足の勢ありて平均を全ふせざるを得ざるの必要あり、償還の事固より深重の注意を要す。然れども元來國債は國の債務たり、固より之が償却を忽にすべきに非ざるは既論の如し。而して公債は勢ひ増加し易く、甲公債の未だ償還せられざるに乙公債募集の必要を生じ、積累の虞あるを免れず、正に太平無事の日に於て勉めて之を償還し、他日必

要に乗じ復た之を募集し得るの地歩を造り置くは國勢の進歩上頗る肝要の事に屬す故に一時特別の収入あるときは先づ償還に充つるを得策とす。然りと雖も亦之に偏すべきに非ず、此場合に於て不幸にして天災、流疫等臨時の費用を要するものあらば、其収入を臨時此方面に使用し、之が爲に新に公債を起さざる様注意するを好しとす。

第二目 償還基金

前述の如く臨時の歳入あるときは之を公債償還に用ふるを第一の得策とす。然るに茲に又償還基金を置くの論あり、其方法は先づ或る公債を起すと同時に其償還の爲に或る財源を求め、特に之を其償還の基金とし、他に流用するを許さざるものとす。往昔英國に於ては頻繁此方法を施行し、甲公債を募集して其償還の爲に例へば車税を起し、乙公債を起して爲に髮粉税を課するが如き種々特別の基金を設けたり。然るに車税の如きは其税質の良否は暫く措き世運の進歩に隨ひ車輛其數を増加し税額隨て加はるべきも髮粉税の如きは全く之に反し、人文の發達に伴ひ其使用の減少するは自然の數にして、甲基金に餘裕を生じ、乙基金に不足を生ずる

償還基金

や疑を容れず然れども其間流用を許さざるを以て偶々國庫に剩餘金の有るあるも之を公債の償還に充當すること能はざるの奇觀を呈し、後ちビツト氏の時に至り數基金を併合して一の集合基金を構成し漸く此の不便を醫するを得たり、其他公債の募集に際し募集金若干を割き之を積立て以て償還に充る者あり、例へば資金一億圓の需用あるに當り其募集を一億圓に止めず、一億一千萬圓を募集し其一千萬圓を積立て復利法を以て増殖し償還に充るが如き是なり、然りと雖も是れ固より一兒戲たるに過ぎざるなり、斯の如きは猶ほ吾人が百圓の入用あるに際し其借入を百圓に止めず百十圓を借入れ、内十圓を銀行に預け之を増殖し以て全額の辨済に充てんとするものと何ぞ選ばん其迂愚固より論なき耳

減債基金

償還基金中最も有名なる者は復利法に依る所の減債基金なりとす、是れ一時大に賞揚せられたる者なりと雖も亦以て其可なる所以を見ず、其方法は歳計の裕かなるに當り歳入殘金を以て公債を購入し之を國庫に保有し、其利子を以て年々公債を買收俗に所謂買潰をなす者なりするを以て目的とする者なり、是れ一理あるが如しと雖も其實年々政府が公債を買ひ煽るの結果となり、公債の價格不當に騰

豫算の依り
制に依り
基金に依り
結果を以て
且つ其を得
利を避くべ
し

貴し國をして終に其目的を達する能はざるに至らしむ、且つ哉其終局に達するは頗る長年月を要するを以て、其間戰亂、騷擾、天變、地殃の如き臨時の事變あるを免れずして基金を目的外に使用するの已むを得ざる事情の生ずるなきを保せず、其終を全うする甚だ難し、故に前記の如く歳入に殘餘ありて基金を造るの餘裕あらば之を以て公債を償還し去るに如かず、然かする時は次年に於ては、利子金高の浮ぶあるを以て之を元金償還の途に供するを得べし、例へば一千萬圓の殘餘ありて之を以て甲年度には元金を償還すれば乙年度には其利子の支拂を要せざるを以て之に相當する金高は元金償還に充つるを得べく、次年度に於ては復た其分の利子を拂ふを要せず、此の如くして漸次進行すれば別に減債基金を置くの必要なく豫算編製の如何に依りて實際復利法と同一の結果を收め而かも基金取扱の費用を要せず、且つ買煽りの不利益なく又他の費用に仕拂はるゝの憂なく寧ろ減債基金を設るより短年間に於て多額の公債を償還するを得べし、故に復利法に據る減債基金法は一見不可なきが如きも少しく研究するときは容易に其不利にして且つ危険なるを知るべし、我新設の減債法能く其目的を達するや否や頗る疑はし寧

ろ之を撤し國債の整理は組換法と借換法とに據るの便且利なるに若かざるなり

第三目 官有財産併に租權の離權

國債償還の爲め官有財産を賣却するの當否

或時は官有財産より生ずる収入と其營理の爲に要する費用及公債償還の爲め減すべき費用とを對照比較して失ふべき収入より減すべき費用多きことは之を國庫の利益とし、山林等を賣却し以て公債を償還したる例あり。是れ亦一見不可なきが如しと雖も、所謂甕中の跛鼈焉んぞ飛禽を追ふを得んや

我國の實況

抑々山林、原野の如きは世運の進むに隨ひ價格増加す、其賣却の如きは經濟上及國家的重大の關係あるは勿論、單に計算上より之を論ずるも頗る考慮すべき問題にして、只に當時の賣却代と公債元利拂との比較より輕卒に其得失を決するを得ず、況や公債は他日低利に借換え得る望あるに於てをや、其實例は佛國に在り、其之を賣却してより十餘年を経過し、森林の價格非常に増加し、臍を嚙むの悔を貽せり。又我國明治初年よりの實況を見るに、京都、大阪、愛知、靜岡、長野、福島、秋田、石川、岡山、熊本、の二府八縣に於ける田、畑、山林、原野及玄米の平均市價の變動は左の如し、以て離權方法の不可なるを證するに餘りあり、但し通貨は現行の九百位金二分二厘二毛

二二に換算したるものなり

第七表 甲種附錄第二號 參觀

時期	田地 <small>一反歩の市價</small>	畑地 <small>上全</small>	山林地 <small>一町歩の市價</small>	原野地 <small>上全</small>	玄米 <small>一石の市價</small>
明治初年頃	六七、九二六	四三、八六六	七九、三一九	五〇、四一四	七、八三四
全十二年頃	一一八、四八〇	七〇、五〇七	八八、二九一	五三、九七七	一一、五六九
全二十年頃	一〇八、八二七	七二、八二五	一〇三、六四二	七一、四八七	七、二六六
全三十年頃	一五一、五二二	八六、〇六七	一一五、二二六	一〇五、二二二	一一、三九〇
全三十七年頃	一四五、九三九	八四、三六三	一三五、八二五	一二〇、八三〇	一二、二七二

今一步進めて右表明治初年頃の各價格を百とし、毎時期の比例を示せば左の如し

第八表 參觀同右

時期	田地	畑地	山林地	原野地	玄米
明治初年頃	一〇〇、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇

全 十三年頃	一七四、四	一六〇、七	一一一、三	一〇七、〇	一四七、六
全 二十年頃	一六一、六	一六六、〇	一三〇、六	一四一、七	九二、七
全 三十年頃	二二三、〇	一九六、二	一四五、二	二〇八、六	一四五、三
全 三十七年	二二四、八	一九二、三	一七一、二	二三九、六	一五六、六

租權を離
債還し國債
償還を計
るの可否

又國家が租權を拋棄し之か代償を得以て國債を償還し其失ふべき收入と償還の爲め減じ得べき費用とを比較し前者にして後者に及ばざるときは直ちに之を得策とし以て得々たるの例あり例へば地租の二十年分を一度に納むる者あらば永世其地の地租を免除すべしと定め二十年分の地租を一時に收入し以て公債を償還し失ふたる收入の高より償還したる公債の元利金高が多きときは之れを以て政府の利得とするものなり是れ公債は他日低利公債に借換を得ることを思はず而して地價の如きは世運の進むに隨ひ愈々増加し地租の負擔益々加はり有事の日に於て地租は頗る有力の財源たるを得べきを悟らざるものにして實に無謀と云はざるを得ず已に英國に於て其實例あり是等は皆思慮の足らざるに坐す

最近に於
ける償還
の方針

るものにして漫に當時の實況を以て一定不動とし將來に向て如何なる經濟上の勢力が働き居る乎を悟らず結局増減の勢を察する能はずして以て事を猛斷せしものに外ならずして其慮を缺くや多辯を要せず畢竟國債償還の事は之を古來の實歴に照し先輩諸士研究の結果に鑑み到底相當の儉約をなし歳入の殘餘を出す乎或は特別臨時の收入を利用する乎の外方法なきに歸着す只彼の借換組換の如きは決して其利用を怠る可らず故に今日に於ては先進諸國に就ては直接の償還は概ね之を行はず一般經濟殊に金融機關の發達に盡力し自然的に金利を低廉ならしめ市場の許す限り借換を執行するに力めざるはなし殊に英國の如きは年金組換法を施行し漸次元金を減少し圓滿の結果を得るを期す即ちグラットストン氏の組換の勵行西歷千八百八十九年のゴッスン氏の借換の如きは實に近世財政史上の美觀たり而して買上償還の如き時に利用すべきの方法にして時機方法其宜きを得ば又以て奇功を奏することなしとせず我國公債各事項に就ては甲種附録第三號參觀

第八章 公債費負擔の輕重及難易

第一節 元金の多少及利子拂

既論の如く公債には多くの種類あり彼の永遠公債の如きものと雖も固より國の借財なるを以て國家は出來得る丈け速かに之が辨濟をなすべきの義務あるは法律の制裁を俟つて後ち知るべきに非ざるなり故に元金の多少は人民が公債費を負擔する上に於て其輕重に大なる關係を及すこと明かなり今細かに區別して之を觀察すれば起債當時に於ける公債の種類的選擇其當を得ざるときは人民の負擔に難易の差違を生ず例へば等しく十億圓の公債なりとするも國が財政の都合上より自己の自由の裁量に依て償還を爲し得る有期隨時支拂又は永遠公債の場合と必然定まりたる年額を償還せざる可らざる有期定期支拂又は一時拂の場合とは負擔の難易に於て大なる差違あるは多辯を要せず然り而して利子は負擔問題に就て元金より一層重大なる關係を有す元金は永遠公債の如き者にありては時と場合とにより其償還を伸縮することを得べしと雖も利子に至りては固より

公債の種類に依り負擔に難易を生ず

利子は最大の義務なり

此の如き臨機の操縦を許さず元金の存在する限りは年々必ず之を支拂はざる可らず又縦令元金の額は同様なりとするも利率の如何によりて負擔に輕重を生ず即ち利率低ければ元金假令多額なるも負擔は比較的輕からず之に反して利率高ければ元金少額なりと雖も負擔割合に輕き能はず故に利子に就ては最大最重の注意を要す今便宜の爲め諸國に於ける國債元金現在高及國債費を見るに大畧左の如し

第九表 日普露は西曆千九百七年其他は六年

國名	國名	債分	頭高	國債費分	頭高
佛蘭西	佛蘭西	一一、九九、八六三、一九六	三〇五、三七六	四八三、一八〇、六三三	一三、三四四
露西亞	露西亞	八、六四六、一七九、三三三	六六、七九五	三九〇、四九六、五九九	三、〇一〇

(外に政府の保證に係る銀行株及鐵道債券あり其高約拾七億八千五百萬圓なるが如し)ノルウェヰヤ新聞の調査に據る

英	吉	利	七、七〇三、九二一、一九六	一七六、四三六	二七三、六〇八、三六八	六、三三四
伊	太	利	四、八七一、八六〇、九九〇	一四四、六五四	三三二、六三九、四三三	六、五四九
北	米	合衆國	四、七四六、〇九四、三六二	四九、五四七	四九、三六三、六〇二	〇、五七〇
普	魯	西	三、七二一、五五五、八〇四	九九、四三四	一四二、九四一、九三八	三、八〇五
西	班	牙	三、七〇一、三三三、九六八	一九八、七九九	一五六、五三四、〇八四	八、四三〇
日		本	二、一九三、三七七、四三二	四六、〇六八	一六六、一〇三、六四二	三、四七三
匈	牙	利	二、二〇九、七五五、七三三	二四、七二五	一三〇、六一一、一三六	六、二六四
奧	匈	帝	二、一九一、〇五一、五二二	四八、三四五	八八、三三三、一六九	一、九五三
奧	太	利	一、六四〇、四八八、五七七	六三、七七七	六四、八三五、一〇七	二、四八一
獨	逸		一、六三三、三六六、五五五	二六、七三六	五九、〇八二、八四六	〇、八九五

(外に大藏省發行紙幣あり其高約五千七百三拾六萬圓)

白	耳	義	一、三三七、八三九、五三六	一七五、六五三	六四、三四一、〇九九	八、九四九
---	---	---	---------------	---------	------------	-------

和	蘭	九三七、〇五八、三五七	一六五、七六七	二九、七六七、三八七	四、九三三
---	---	-------------	---------	------------	-------

第二節 政府歳入との比較

政府全躰の歳入と比較對照し公債費は其幾何に當れるやを見るも亦一方法なり。元來公債費は元金償還高の多少によりて大に差異を生ずべしと雖も茲には主として利子支拂の高と政府の歳入(精しく云へば租稅收入)とを比較するものとする。然らざれば勤儉力行して歳入の餘裕を致し元金償還を勉むるが爲め公債費の増加する者と不注意にして償還を怠り元金累積して利子金額大に増加し爲に公債費を増加する者との區別を見る能はざるの結果を來す可ればなり。

今國家全體の費用を行政軍事國債の三費目に分ちて觀察し、國債費が全體の費用の三分の一以上に當るが如きことあらば負擔は頗る重しと云はざるを得ず、何とならば此場合にありては國民の負擔する費用の約三分の一は公債證書の所持人に歸し、國家が文武必要の事件に投じ得べき金額は總歳入の三分の二に過ぎざ

元金償還
は此關係
に於ては
公債費外
とす

方今文明の租税は、國の力に依りて賦せらるるに過ぎず。其の端を以て、此の概法を以て、便か見らる。

ればなり。故に甲乙兩國を對照して共に等しく三億圓の歳入あるを知るも、甲は其歳入中三分の二を以て文武事業に充て三分の一を公債の爲に使用し乙は其歳入の多量を文武事業に使用し頗る輕少なる部分を以て國債の費用に充つるものとせば、甲乙兩國に於ける内外施設の効力大に差異あるや論を俟たず慎まざるべからざるなり。又國の總收入は民力に餘裕ある場合と其之なき場合とにより全軀の關係上重大なる差違を來すものとす。然れども方今文明世界の實況は國費大に増加して無理なる租税尙且つ徵收せられんとするの有様なれば多く租税の負擔力を殘さざるを通例とす故に各國に於ける民庶の負擔は先づ一樣に其資力一抔と見るを得へし果して然らば此方法は公債負擔の概況を知るに頗る便宜あるものと云ふを得へし。

第三節 國民の收入との比較

國民の歳入の幾分が公債費負擔の爲に使用せらるゝかを知るを得は公債費負擔輕重の實況は明了なるへしと雖も、元來國民の歳入は種々の構成分子より組織

諸國の富の調査

せられ其實を知ること甚た難く、大財産の場合に於ては其所有者と雖も殆ど歳入の實額を知る能はざることなしとせず。古來各國の富の額を調査する者頗る多しと雖も孰れも漠然として確實なるを得ず、輒近の調査に依るに諸國に於ける富の一人宛は

第十表

英 國	二、六四七圓餘	佛 國	二、二五五圓餘
北米合衆國	一、九九九圓餘	獨 國	一、三九五圓餘

等なり、然りと雖も斯の如きは多くは想像に基き固より確固たる根據のあるなし故に知り難きの國民の歳入との比較を試みんより寧ろ一步を退きて國の總收入と國債費との比較に依るを以て勝れりと信す、強て完全を求めて實際爲し難き事を遂行せんより、不完全ながらも一步を退き眼前捉へ得べき事實と數字とにより多少之を斟酌し以て公債費負擔の輕重を見る方寧ろ事實に近附くことを得へし

第四節 起債の原因

第一目 生産的と不生産的との差違

公債の原因が生産的(現實の生産的なるを要す)なるか、不生産的なるかに由て公債の負擔に大なる差違を生ず、公債か生産的事業に原因して起るときは概して其事業より利益を生し之を以て其元利を支拂ふとを得るか故に經濟上より之を見れば此種の公債の爲め生ずる費用は眞實の負擔に非らずと云ふことを得へし之に反して不生産的事業の爲に起る所の公債は眞實の負擔にして多くは後世に傳はり財政上に不利の結果を來すの虞あり

今之を實例に徴するに彼の濠洲殖民地は一人の公債費負擔高世界第一等に位すと雖も、其公債は主として財源開發の爲に起れり中には學校開設の爲に起り直接生産事業に原因せざるが如しと雖も抑々國民教育の發達は生産事業を援くること多大にして是れ亦全く不生産的と云ふを得ず元來生産事業に必要な要素は土地、資本、勞力の三者なり而して文明世界に於て三要素の主位を占むる所の資本を比較的低位を以て外國若くは母國より得以て事業を起し其利得を以て元利を支拂ふて尙ほ餘あらば實際負擔なきの結果を來すべし勿論形式上元利の支拂

は一方に於て歳出の款項に上ると雖も其實他方に於て事業より生ずる所の利潤か歳入として入來るを以て之を差引計算するときは國民は實際負擔を爲さるると同様なり我國の實例に於ても明かに此事實を知ることを得へし、即ち京濱間鐵道の敷設に要したる資本の如きは之を英國に募り其元利支拂は國の負擔なりしに相違なきも此の鐵道より得る所の利得極めて多く結局之が爲め人民は負擔をなさず却て利得する所あるに至れり、又歐洲に於ても諾威、瑞典の公債は多く鐵道敷設の爲め起りたる者にして之が爲め國民の負擔を増すを見ず、由是觀之に起債原因の考究は如何に必要なかを知るに足ん

第二目 明治二十七八年前の我國の實況

此點に關しては我國は日清戰爭以前に於ては頗る好地位を保ち金祿公債の如きは封建時代に於ける祿制を廢し封祿に代へ賠償的に公債證券を舊有祿者に付與せるものにして之か爲め毫も國民の負擔を増加せず、其他起業公債中仙道鐵道公債、兩種の金札引換公債の如き皆事業の發達を目的とするものに非ずんば即ち事の整理を企圖するものに屬せり、獨り征討費借入の不生産的に屬せしものあり

しと雖も、是れ實に免れ能はざるの勢に原因し已を得ざるものと云ふへし然りと雖も、征討費借入金は今や償却し終りて其跡を留めず、彼の海軍公債の如きも固より直接生産的と云ふを得すと雖も、外國貿易と海軍とは離る可らざるの關係を有し、後者の前者に應援する固より大なり然れば是れ亦全く不生産的と云ふを得ず。其他整理公債の如きは借換の爲に起たるものにして國民の負擔を軽減したるものなり、然りと雖も戰後國債の情況一變し復た往時の如く良好なる能はず、是れ世運の進歩に伴ひ周圍の情況に促さるゝものにして固より已むを得ざるに出るものとす、爾後國債の募集に就ては大に留意すべきものあるは多辯を要せず

第五節 内外債の區別

第一目 外債は公債費を重ふするの傾向を有す

國債の額は等しく十億圓なりとするも、其内債なると外債なるとに依りて金融に關係すること少なからず、隨て人民の負擔に影響することなしとせず。元來公債の募集を内國に於て試るときは應募者は内國人にして其元利は内國に於て之を

支拂ふを得べしと雖も外債なるときは募集當時は外國より資金輸入し來るも、元利は現金又は貨物を以て之を外國に支拂はざるを得ず、外債は當初は市場を緩め後には金融を緊縮し而して外國爲換の相場を騰貴するの傾向を生ず、故に假令元利支拂の金額に於ては毫も異なる所なきも外債多ければ國民の負擔稍々多きを加ふることなしとせず、豈に慎まざる可ん哉

第二目 債權國と債務國に於ける輸出入の關係

債務國は自然に輸出超過の國となり、債權國は輸入超過の國となり、經濟事情の調和を得結局恰も方今の印度と英國との關係の如くなるは實に一朝にして出來得べき事に非ずして、債務國か此順況に進むは大なる注意と勉勵を要するは論を俟ず。若し夫れ債務國にして經濟施設の順序を誤り、紙幣を増發し貨幣市場を紊亂するが如きことあらん乎、輸出入其平衡を失し生産事業舉らず非常の困難に陥るは史乘其例に乏しからず、故に一國の公債は内外債其幾部を占むるかに注意して觀察を爲すこと頗る必要の事に屬す、而して爰に最も注意すべきは債務國は輸出超過となり、債權國は輸入超過となるは兩國間に於ける貸出借入の事實止みたる

債權國に及
於て輸出の
入る情況の
順序

第八章 公債負擔の輕重及難易 第五節 内外債の區別 第一目 外債は公債費を重ふするの傾向を有す 第二目 債權國と債務國に於ける輸出入の關係

一時は債務國の方
多し却て輸入

後に於て債務國が生産的に其借入金を使用し其目的を達せし後に起る所の現象にして、債權國が貸出を進行し債務國が借入を繼續する期間に於ては借入の終りたる場合と輸出入の事情を異にし正反對の傾向を生じ債務國は輸入多く、債權國は輸出多き事是なり、例へば鐵道布設の爲め印度が英國より一年百萬磅宛十年間合計一千萬磅を年一割の利息にて借入る、場合を假定して之を見るに、其第一年に於ては英國は普通貿易より生ずる支拂義務の外に現金にて百萬磅若くは一部は現金其他は條鐵、機關車等にて右の百萬磅に該當する物を印度に輸送せざるを得ず、第二年に於ては英は利子十萬磅を印度より受取り、差引九十萬磅を現金若くは物品を以て輸送するを要す、斯くして逐次年を重ねるときは英國は印度より受取るべき利子の金額漸次に増加し、第十一年目に至りては英國の受取るべき分は印度に向て輸送すべき分と同額となり、第十一年目よりは英國は送るものなくして利子のみを受くるに至るべし、茲に於て印度の鐵道事業成功せば印度は輸出超過の國となり、英國は輸入超過の國となる然れども是れ只趨勢を示すに止まるものにして、若し債務國に於て注意を怠り事業挫折するが如きことあれば、元利支拂の

爲め現金の輸出を要し其國經濟の基礎を危うするの虞なしとせず、要するに外債必ずしも惡しきに非ず、即ち外債を以て事業を起し得る所の利得を以て其元利を支拂ひ事業の利得永遠に存続するが如き場合に於ては外債亦大に利益あり、然れども一度外債の目的を謬るときは、其害實に大なる者あり、慎まざるばある可らず

第九章 公債の募集が經濟上に及ぼす影響

第一節 巨額の起債は資本の分配を紊亂す

國債の募集は一般經濟界に多大の影響を及ぼすを以て深重の注意を要するは論を俟たず、今其大體を約言すれ、巨額の起債は流動資本と固定資本との關係に變動を惹起し、併て資本の分配を紊亂するの結果あり、請ふ少しく之を辯せん、例へば東京灣に築港するが爲に五千萬圓の公債を起さん乎之に應ずるの資金は特別募集に非ざる以上は全國より東京に集中するや論なく、而して其財源は何れより

公債の募集は資本の分配を紊亂す
其影響を及ぼす

來るやと云ふに我國目下の實況に於ては其大部分は全國銀行の預金たるや論なし。果して然らば全國預金の大部分は募集金と化し去て東京に集まり、築港の要材及勞力亦主として東京及其附近に求めらるゝは必然の勢なり。斯の如くして多額の資本勞力一方に集中せられ以て資本の所在を變動するときは從來國中に普及せる流動資本は其額を減じ甚しきに至りては固定資本と均衡を失ふなきを保せず。而して募債の額愈大なれば其結果愈不良なるは多辯を要せず。凡そ生産事業は固定資本と流動資本とが權衡を得るに由りて始めて其効果を呈はし物品を産出す。物品出で、市場賑ひ、市場賑て生産事業勃興す、而して能く其間に介在し一方に於ては預金を受け一方に於ては貸付割引をなし資金需給の媒を爲すは銀行を措て他に之あるなし。然らば即ち銀行をして常に預金に飽かしめ以て流動資本の源泉を涵養せざる可らず。然るに屢々巨額の公債を起し流動資本培養の源を涸らし遂に固定資本流動資本の平衡を失はしめ金融の圓滑を缺くに至らしめは假令ひ公債を得たるに得色あるも其實天下の經綸を誤る者と云はざるを得ず。公債の額少なれば障害少なるべきも屢々巨額の公債を起すは甚だ不可なり。今一方より之

を觀れば募集に際し應募の爲め多少真正貯蓄を増加するの勢なきに非ざるべく佛蘭西の如きは其實跡なきに非ずして巧に市場を操縦するときは聊か起債の害を小ならしむるを得るも固より此小事を以て大牀を動すを得ず、而して我國經濟界の情況の如きは未だ此域に達せざるなり

然れども巨額の公債に化する者亦敢て悉く流動資本即ち銀行の預金のみならず、外國の應募するものも多少之あるべく、内國素封家が應募の爲に其金庫を開くこと亦之なきに非るべし、今公債の財源に付き試みに指を屈すれば大要左の如し。

- 一 銀行其他郵便局等の預金
- 二 素封家の在庫金
- 三 應募の爲め國民が儉約貯蓄したる資金
- 四 外國人が應募する金高
- 五 有價證券殊に國際動産の輸出

等是なり。夫れ然り然りと雖も前記三、四、五號の如きは我國に於ては其効力甚だ薄く尙ほ未だ頼とするに足らざるなり

第二節 外國有價證券の所有と國債應募力

との關係

第一目 英國の外國投資

佛國の償金支拂の場合の如きは種々の事情ありて外國人の應募非常の巨額に達し、大に同國の經濟を調和し普通巨額の公債を起すより生ずる所の災害を減少せしこと意外の度合に達せり。元來一國が在來所有したる所の外國の有價證券を輸出して之を自國の公債に移替するは甚だ好ましきことに非るも巨額の公債を募集するの必要あるに際しては亦是れ已むを得ざるの數なりとす、而して之に由りて巨額の起債より生ずる禍害を軽減するの効驗あり、然りと雖も我國の如き未だ其域に達せず必要あれば資を内外市場に募集せざるを得ず、豈に遺憾ならずや英國の如きは西曆千八百八十年代資金を外國に放下せし者既に二十億磅即ち凡そ二百億圓の巨額に達し同千八百九十八年に於けるギッフェン氏の調査に依れば同年英國が海外より受けたる利子勘定は九千萬磅なり、今其利率を平均四分とせ

英國が海
外より受
取る所の
利子金高

ん乎、元金は當時已に増加して二十二億五千萬磅即ち凡そ二百二十五億圓にして爾後の景況は、倫敦經濟雜誌、銀行雜誌等に散見し之を知るに難からず、今是等の材料に依りて之を觀るに爾來英國は毎年外國に放下し來りし金額二三億乃至五六億圓にして卅八年六月十日の「スタチスト」新聞の調査に依るに其高二百五十億圓の巨額に達す、其利子歩合は高低固より同一ならずと雖も平均之を四分とするを得べし、果して然らば方今英國は毎年外國より十億圓内外の利子支拂を受る者とす、加之英民の海外へ出店し居る者の純益年々二三億圓を降らず實に英國は毎年睡眠中識らず知らず外國より十二三億圓を得るものとす、其他英國の利得たる運賃保險料、爲替手数料、船舶賣却代等數ふるに違あらず、夫れ既に此の如くなる時は經濟の事實に安全にして、國民は海外より輸入する利子のみを以て巨額の內國債に應ずるを得べし、且つ其元金を內國債に換替するも亦容易の業たる耳、是れ英國の經濟財政が杜國の戰爭及北清の事件起るも殆ど痛痒相感ぜざるもの、如くなる所以なり、此の如きは平素外國へ資本を放下し居らざる國に望む可らず、國際債權を有せざる國に於ては瑣少の事件起るあるも直ちに資金を內國市場に徴し

金融上變調を惹起し或は外國より借金をなすの必要あり況んや債務國於てをや

第二目 佛獨等の外國投資

佛國の如きも西曆千八百七十年の戰爭前に於て既に多額の外國有價證券を所有せしを以て古今未曾有の事變に際會し巨大なる償金の支拂を要せしも非常の困難を感せず其處置を全ふするを得世人をして驚歎措く能はざらしめたるは尙ほ吾人の記憶に新たなり爾來星霜を経る三十有餘大に國勢を恢復し單に露國のみを以て之を論ずるも其有價證券及事業にして佛資の放下に係るもの已に約百億萬法、伊、奧、西等諸國に放下する者亦頗る多く其合計三百億法を越ゆ而して獨逸の海外放資も亦輒近既に佛蘭西を凌ぐの勢あり盛なりと云つべし、白耳義の如き亦頗る露に投資す

第三目 北米合衆國の趨勢

北米合衆國も亦漸次外國に放資す輒近其英獨の公債に應じたるが如きは一新現象と云はざるを得ず然れども是れ英國の貧しきが爲に非ずして南亞事件の起るに方り倫敦市場に輸入すべき金の減少するを慮り以て中央銀行の正貨準備の流

出を豫防せんが爲め特に公債を米國市場に募りたるものにして英の此措置は實に用意周到なるものと謂ふべし然れども米國の市場富裕を致し資を外國に投じ得るの地位に到りしに非ざれば焉を能く斯の如くなるを得んや而して米國は獨り英國のみならず既に獨逸等にも投資し今哉進んで我國及露國公債にも應募せり

第四目 結論

要するに國際資本の共通は國際動産後に説明すべし力の依るに非ざれば圓滿に行はるゝを得ざるなり夫れ之を利用するを得ば假令巨大の公債を起すも内外公債の乗替に過ぎずして市場に著しき變動を及ぼさず銀行家其他の資本家は従前外國より受取りたる元利金を自國の政府より受ることとなり單に其囊裏の輕重より論ずれば或は却て便利を得る場合なしとせず而して債額巨大ならざれば乗替を爲すの要なく外國より受る所の利子を以て自國の公債に應ずることを得べし然れども巨額の公債を起すときは納税者は之より生ずる所の費用を負擔せざる可らず其國家全軀の不利なるは固より論を俟たざるなり又外國爲替に變

動を生ずるは實に已を得ざるの數なりとす即ち従前は物品の輸入超過は毫も介意するに足らざりしと雖も、已に債權者の地位を去りし以上は輸入超過に對しては現金の支出を要し、爲替に變動を生ずべきを以て力めて物品の輸出を圖らざる可らざるなり

元來債務國は物品の輸出超過せざれば債務の辨償を果す能はざるは自然の數にして、其輸出輸入に超過するに非ざれば出入の平衡を得る能はず故に通常一國が債務國となれば、先づ其輸出超過して貿易の狀況一變し初めて一定の常況を現すに至るべし、即ち債權國に於ては物品の輸入超過し、債務國に於ては其輸出超過するを通則とす。英國と印度間及英國と濠洲間の貿易は則ち此の模範を示すものにして實に坦々たる軌道を往くものとす、我國近年の景況は頻りに變轉を現す國民たるもの宜しく注意せざればある可らず、抑々需給自然の原則は嚴然犯す可らざるものありて少しく注意するときは貿易の情況をして常勢に復せしむるは容易なるべし、茲に之を詳説するは問題外に渉るを以て今之を絮説せず、要は債務國に於ては物品の輸出其輸入に超過するを必要とす、夫れ債權債務の關係に依り物

債權國及債務國に於ける輸入の關係

貨輸出入の常況を異にするは自然の趨勢にして夙に世人の熟知する所なり、然りと雖も一方に於ては借入進行し他方に於ては貸付進歩しつゝある間は一時前述せる通則と正反對の結果を生ずるは是れ亦勢の然らしむる所なり、而して鐵道敷設の如き事業に對し工業國か農産國に貸付る場合の如き最も然りとす

第三節 生産的募集

巨額の公債を起すときは結局元利支拂の爲め國民の負擔を増加し、資本の所在を轉じ國際の債權債務の關係を變更するを以て大に慎まざる可らざるは勿論なりと雖も、生産的に生じたる國債は假令外國債たるも例へば其利子五分にして一割の利益を得るの結果を來し、而して一國の土地と勞力とは既に十分にして資本のみを借りたる場合の如きは外債亦良好の結果を生ずるものと云つべし、濠洲殖民地、諾威、瑞典の如き即ち其好例なり、然れども只單に生産的なるを以て巨額の公債を起すも妨げなしと云ふが如きは甚だ不可なり、彼のアルゼンタイン共和國の如き公債を起す早きに過ぎ利子を拂ふべき事業の利益舉らず數年の間頗る困難

單に生産的なるを以て好むを得ずと云ふ

を感じ財政を悲況に陥らしむるの一原因を成せり、豈に鑑みざる可んや。

元來國家の經營は此の如く單純なるものに非ず、所謂百年の計は常に之を忘るゝを許さずと雖も亦常に之に依り得べき者に非ざるなり、要するに事其目的に副ひ所謂時と所とに依り其宜きを制すること猶ほ聲の響に應ずるが如くならずんばある可らず、乃ち一時の瀾縫或は其要なしとせず、倒行逆施亦或は忍ばざるを得ざるなり、其方便の如きは豫め之を一定する能はずと雖も其目的に至りては常に君と國とに報じ、社會衆庶を救ふに存せざるを得ず、而して其事に當るや百折不撓の精神を要す、古人曰く深く信じ篤く行ふと、深く信ずるは廣く學ぶに在り、篤く行ふは責を身に任ずるに在り、人たる者博く學ぶに如かざるなり。

第十章 非常準備と國債との關係

第一節 國際動産の所有と準備金との比較

英國の資力に富むや既説の如し而して歐洲大陸殊に獨逸の如き三十年以前ま

では資力尙ほ薄弱なりしも輓近劇かに頭角を顯はし英國の鑿に倣ふて更に之を凌駕するの勢あり、夫れ露國は輓近外資輸入を以て名あり佛國との關係のみを以て之を見るも佛資の露國公債に投ぜらるゝ者既に約百億法に達す、元來佛の露に放資するの多きは半は政治上の理由に出るものなきに非ざるも、要するに外國へ放資するには自國に餘力あるに非ざれば能はず而して平日自國の餘資を他國へ貸出し置んか、有事の日に當り其効果極めて大なり、佛國の如き大敗衄の後と雖も財政上經濟上意外に困難せざりしは平日多額の國際動産を所有せしに職由す、方今諸國に於て些少の變事起る毎に動もすれば増税若くは募債を要するが如きは畢竟非常準備なきに由る、然れども準備金設置の事たる抑々亦至難の事に屬し容易に爲し得べきの業に非ず、英佛の如き平時多額の國際動産を所有するは眞に羨むに堪へたり、今や宇内の文明日に進み天災地殃を外にして世は太平を常とし、兵亂は稀に有る所にして凡そ五十年に一たび之に遭遇するものと豫想するも亦不可なかるべし、然らば即ち非常準備を置くの必要安くにかある、寧ろ平素貿易其他の事業を盛大にして國際動産の如き有益品を吸收せば、平日は市場鞏固にして百

業發達伸張し以て國富を増加することを得べく、有事の日に於ては國際動産の換替をなし以て、其急に應ずることを得べくして、非常準備あると同一の効果を收め國家の利益之より大なるはなし

貨幣銀行の制度を全ふする亦國家急あるに方り大に功あり、後に説く所を參看すべし、然り而して費用の儉約固より必要なるも、國家の衰運をも省みず教育、兵事、警察、衛生等百般の事業を放棄する能はず、素より適當に費用を注ぎ、字内の諸強と對峙せざる可らず、元來一國の儉約は猶ほ一家の儉約の如し、夫れ人類の飲食衣服を要するは到底免る可らず、只無用贅澤の費用を省き、家計相當のとを爲すを要す一國の事亦然り、文武必要の事業に對しては必ず相當の費用を支出せざる可らず、故に今日に於ては國家の用度多端にして、非常準備を積むの餘地ある者殆ど稀なり、只沿革上僅かに之を保有する者は歐洲に於ては獨逸及諾威、瑞典あるのみ、露國亦一種の準備を積むと雖も、是れ寧ろ紙幣準備にして、本章に所謂準備に非ざるなり、我國は幸に償金の殘額五千萬圓を特種の基金とせしを以て、偶々臨時事件の起るに際して之を其費途に充し、と既に再度に及べり、夫れ國にして國際動産を所有

するあらん乎、國債募集の必要ある時は忽ち之を換替して以て費用に充つるを得べく、正に非常準備を有すると異なるなし、吾人亦努力して此地位に進まざる可らず

第二節 中央銀行の正貨準備を強大にするの必要

今や非常準備金を置く甚だ困難なるを以て、中央銀行の力を強大にし、其正貨準備を裕かにするを以て最も必要とす、是れ嘗に金融上商業上の信用を厚ふするのみならず、亦大に國家の威信を保つ所以なり、故に中央銀行準備金の事は已に銀行問題より轉じて國家問題に遷れり、即ち其在高の多少は國の強弱を示し、嘗に内外市場に伸縮自在の駆引をなすの力に差違を生ずるのみならず、一旦事あれば中央銀行準備金は實際非常準備の動作を爲すを得べし、故に方今何れの國と雖も概ね準備金制度を止め、中央銀行を強大にするの方法を探るに至れり、是れ固より緩急に應ずるの良法にして、我國の制亦之に則とる、理論は暫く之を措き、一國としては戦争は何時にても之を辭せず、又敢て攻守を擇ぶを要せざるの地位に居らざる可

中貨銀行
正貨準備

らず、若し夫れ此勢力あらざらん乎、貿易自由ならず、外交意の如くならず、遂に人後に立つの已むを得ざるに至らん。凡そ天下の事一に腕力に歸す、結局砲數多くして且つ大なるに如かず、一步を進めは鐵丸を放つよりは寧ろ金丸を放つに如かざるなり。既論の如く平常中央銀行の準備力を強ふし以て内外の事變に備へば則ち別に非常準備金なしと雖も實際之あるに等しく其効用に至りては兩者の間敢て差違あることなく而かも其經濟上の効力に於ては實に雲泥の差あり。故に平日努力して國際動産を吸集すると中央銀行の準備を強ふるとは實に肝要の事に屬す。漫に文武百般の事業に減縮を加へ以て國運の進歩を阻礙するを顧みず、又は無理なる増税をなし民力を減じ故らに非常準備金を積むが如きは固より其必要を見ず、只々貨幣制度を純良にして中央銀行正貨準備を強大にし常に之を涵養するの道に注意し遺算なきに至らば則ち可なり。然れども増税に依らず、起債に依らず、又過度なる儉約等に依らずして別に天地間に湧出するの現金あらば其出納の法を嚴にし非常準備を構成するも亦不可なし。然りと雖も若し此の如き意外の金あらば別に國家必要の事業に使用するの途固より少しとせず、只之を濫用浪費するより寧ろ準備金とするの優れるある耳。

第十一章 公債に關する契約の變更

第一節 債務不履行の場合に於ける國と會

社との比較

公債償還の順序方法及之に就き注意すべき事項は既に之を陳述せり、依て今一步を進めて、若し不幸にして事實上償還を爲す能はざるが如き事情の發生せる場合に於ては之を如何にすべきやに就て少しく述ぶる所あらんとす。元來本問題は債權者債務者間の定約を變更することを得るや否やの純理を經とし債務者が實際償還を爲す能はざるの窮地に陥り又如何ともする能はざるの場合に於ては事情を酌量し變更を爲すの得失如何を緯とし論究すべきものにして所謂實地問題に屬し單に純理のみを以て論究する能はざるなり。元來契約の變更は容易ならざる事に屬し債務の關係に於て殊に然りとす。然りと雖も政府が事實債務の履行を

爲し能はざるの究局に陥りたる時は特に整理の道を求むるの外他に方法の講ずべきものなきは恰も一大會社が業務不整理の結果其債務を完済する能はざる場合に於て或は債權者に請ふて辨済の延期を求め或は資産全部を取纏めて之が整理をなし而して後ち新たに事業を整理し以て債務の辨済をなし結局債權者をして其損失を少なからしむと一般國家も亦萬已を得ざる場合には之と同様の手段を取らざる可らず不幸にして斯の如き窮局に際會するときは債權者は利率を減じ或は元金償還の年限を延期し或は數年の間利子の支拂を猶豫し之に整理の餘裕を與へ其金額を元金に加ふる等其他種々の方法を講じ以て一方に於ては債務者をして出來得る丈け辨済をなし得るの手段を盡さしめ他方に於ては債權者の損失を少なからしむるを以て双方の便益とす

然るに之に反して若し一般に契約の存立を楯として債務の履行を強制するが如きことあらば債務の辨済は遂に不可能の事となり恰も會社が支拂を停止し破産をなすの場合の如き慘況を呈出し結局債權者も亦意外の損失を蒙るに至るべし豈に夫れ之を得策とするを得ん哉蓋し此の如き場合に處するの要は双方

探るべき
の方法

の利益を謀り双方の損失をして可成少なからしむるの方法を講ずるにあり今其實例を求むるに西曆千八百七十六年の埃及の場合の如き其最も有名なるものなり當時同國の財政困難に陥るや各國の債權者は自己の利益を保護する爲め一委員を組織して其財政に干渉し以て双方の利益を圖れり

第二節 擔保物の選擇

斯の如き場合に於て債權者の最も注目する所は關稅の收入なりとす蓋し關稅は之を徵する容易にして徵收機關を債權者の手裏に收むる亦甚だ難からず加之不換紙幣流通の國と雖も關稅の支拂は正貨を以て之を爲すを通例とす故に之を債務國內地諸稅に比するに徵收に困難なく而かも其實力に疑ひなき正貨を以て收入を得るの便あり内國稅の徵收に至りては即ち然らず抑々内國稅は其關係地域廣大にして領土の全部に普及し其徵收は外人輩の能く爲し得べきの業に非ざるなり元來租稅を以て債務の擔保に提供するが如き國に於ては財政急を告げ不換紙幣の發行あるを通例とす

關稅を以て
償還の
財源とす
るを便とす

果して然らば困難更に一層の多きを加ふべし、然るに此の如き場合に於て債權國政府は債務國の内政に干渉し自國人民の爲め債務國政府をして不換紙幣の發行を廢止せしむるを得べき乎、方今學理の研究漸く事物の真相を穿ち個人の權利主張の爲め國家が國際問題を提起するの不當なるは既に一定不動の論となり、債權國の大利害に關する場合の外干渉政畧は輿論の容易に許す能はざる所のものに屬す、豈に復た往昔と日を同ふして論ずるを得ん哉、其他鐵道收入の如き不換紙幣の影響は之を免る能はずと雖も、債權の擔保としては是れ亦好箇の一財源たり何となれば徵收の便は獨り關稅に及ばざるのみにして遙かに他の内地收入以上にあり、而して線路延長の如何に依りては收入亦必しも小額に止らざればなり、畢竟債權の擔保は具體的にして占有し得べきを要し、徵稅權の如き無形物は其實用と爲すに足らざるなり、債權國が其選を苟もせざる素より其所とす

第三節 整理の精心及目的

是等の方法に依るも尙ほ不幸にして債務者が其義務を完済すること能はざる

ときは定約の變更をなすの外他に方法の存するなし、其關係恰も會社が倒産に瀕するに當り債權者債務者間の定約を變更して之が整理をなすと同一なり、然れども定約の變更は最後の手段にして固より萬止むを得ざるの場合の外之を用ひ得べきものに非ざるなり、債務者が不幸にして契約の履行を爲し能はざる場合に於て若し前述の方法に依て債務の整理をなさざるときは公債の價格に大なる影響を及ぼし其價を消滅せしむる歟或は非常なる下落を來す歟二者孰れか其一に歸せざるを得ずして、其所有者をして全く空券を擁すると同一なる狀況に陥らしむるの結果を見るに至るなきを保せず、是等の損害を救はんが爲に定約の變更てう調和方法を採りて全く消滅せんとする公債の價格を復活せしめ相當なる價格に立ち歸らしむるを要す、斯く定約の變更を許すの精神は債務者を助けて其辨濟力を養はしめ、以て債權者の損失を少なからしむるに在り、故に是等の目的を達する能はざるが如き條件を以て定約の變更を爲すが如きは固より策の得たるものに非ざるなり

第十二章 地方債

第一節 國債と地方債との區別

第一目 地方債の期限

國債と地方債とは其素質に於て異なる所なく唯債務の主體が國なると地方團體なるとの區別あるに過ぎず、則ち前者は其負債一國全般に涉り、後者は一地方に限局す、故に地方團體に長期の負債を起すを不可とす、歐米諸邦の事例皆然り、我國に於ても亦地方債の期限は三十年を以て最長期とす、之に反して國債には永遠公債の如く其償還を未必問題に委する者あり、斯の如く地方に長期の公債を許さざるは如何の理に由るか、是れ翫味すべきの問題なり、他なし、地方團體が一たび公債を起し未だ其償還を了せざるに相踵て起債せんか、長期間内には負擔累積して終に非常の巨額となり、地方團體の財政爲に困憊を極むるの虞あるに由る、國債に在ては其負擔全國に亘るが故に其額多少増加するも憂稍や薄し、例へば九州地方の經

濟悲況を呈し國の收入に減少を來すことあるも、東北地方は之に反して好況を示すことありて所謂相互保險の實行はれ彼此相補ふを得べく全國を通じて饑饉其他の天災に遭遇すること極めて稀なり

地方債は賠償作用を缺く

多の場合に於て國債と原因を異にする

然りと雖も地方債は其負擔一地方に限局するが故に一地方に於て年稔らざるか、或は不幸にして水災風害、疫病等交々臻り或は一地方に於て商業沈滞若くは恐慌の不幸を見るか、又之を大にしては兵亂騷擾之を小にしては百姓一揆等の如き不幸なる出來事有んか、其衝に當る地方の經濟は直に悲況に沈淪し其收入を減少し地方團體は元利の支拂に頗る困難を感ずるに至る無を保せず、故に國債と地方債との間に期限長短の區別あるは財政上當然の事に屬し毫も疑の存する者なし、地方債の原因は國債と異なるもの多し、即ち後者は主として國防戰亂等に起因し前者は土木教育等の如き地方的事業の爲に起るもの多し、既に其原因に於て異なる所あり焉、其取扱に於て異なる所なきを得ん哉、而して又地方債と雖も其起因の如何に依り其注意を異にせざるを得ず、請ふ少しく之を辯せん、抑々事業の性質上一旦の投資能く久しきに堪へ其目的を達するものあり、之に反し事業擴張の

地方債も
原因に由
り其長短
を異にす
るを要す

必要ある毎に資金を要し前債の償還を終らず残額尚ほ多きに更に公債を起さざるを得ざるものあり即ち公園の設備學校の建築の如きは大牀に於て世運の進歩に伴はざるを得ざるも一變直ちに其設備を大にして増築をなすの必要なく一たび設備すれば長く其目的を達するを得屢々投資を要せざる者あり是等の爲には稍々長期に亘る公債を起すも不可なることなし然りと雖も上水道下水道電氣鐵道等の如き市街の成長に伴ふて延長せざる可らず給水の分量を増すか爲には組織の擴張を計らざる可らず交通機關の如きも人口の増加に伴ひ隨時其擴張を要す故に是等事業の爲には數次の投資を要す今是等に對して長期の起債を許すときは假令其事業より幾分の利益を生ずるとも尙ほ一時元利の支拂に困難を生ずるの虞なしとせず其經營に注意を要するや論を俟たず

第二目 地方債と國債との間に存する法律上の差違

又國債と地方債とは之を法律上より觀察するときは其間の關係異なる所あり即ち地方團體が其公債の元利を支拂はざる場合には債權者は民法上の權利を主張し債務者を相手取りて訴訟を提起するを得べくして地方團體は其公債を取消す

北米合衆
國州債と
他州債と
の地方
債との區
別

ことを得ず然れども國が其負債を法律を以て取消し自ら身代限をなすときは債權者は之を訴ふるに所なし是れ主權の發動たる法律を以て起せし公債を等しく主權の發動たる法律を以て取消すものなるを以て其德義上の批難を免れ能はざるは勿論實際財政上より看るも非常に不得策なるべしと雖も而かも法律上不可能の事に非ず然りと雖も法律を發するの權能なき府縣市町村の如き公法人は其根底に於て法律が附與せし起債權に基づき募集せし負債を法律以外の方法に依りて取消すことを得ず只北米合衆國の州債は公債の分類より之を言へば地方債たるを免れずと雖も州即ちステイトなる者は或る範圍内に於ては完全なる主權を有する國にして自ら憲法を定め自ら總督即ちカブルノルを選び自己の議會を有し州内に於ては完全の効力を有する法律を發するの權利を有す故に自己の法律に依り起せし公債をば自己の法律を以て取消すことを得るや疑を容れず

第三目 各國に於ける地方債に關する法制の差違

前記の如く北米合衆國の諸州は其州内に於て立法權を有するを以て往時は之を濫用して州債取消なる不徳を敢てせし實例あり、ミンシッピ外三州の如き即

第十二章 地方債 第一節 國債と地方債との區別 第二目 地方債と國債との間に存する法律上の差違 第二目 各國に於ける地方債に關する法制の差違 一〇

ち是なり而して利子支拂を停止せしは五州の多きに及べり。今哉其反動として州債には最も嚴密なる檢束を加へ州の憲法を以て或は目的を限り、或は金高を限るの規定を設くるに至れり。メリランド州の如き即ち是なり。元來憲法を以て公債の目的、金額等を規定するは當然の範圍を逸脱せしものにして所謂牛刀も管ならず頗る不倫の觀ありと雖も其目的たる合衆國の如き政黨政治を以て立つの國に在ては、黨派の變動に依り法律の改廢容易なるが故に最も尊重すべき憲法を以て是等の事項を規定し以て豫め朝令暮改の弊を矯むるにあるものゝ如し。此他地方債に關する法制は區々に出で英國に於ては地方債法なる根本法ありて詳細なる規定を設け獨佛は我國と同じく府縣市町村制中に必要の條項を編入せり。以上何れの方法に依るも不可なるなけん而して英國法亦大に參照の値あり。

第二節 地方債の原因

第一目 市街の成長

方今世界の趨勢を案ずるに大都會の成長は頗る迅速にして轉瞬の間既に其觀

を新たにす。是れ地方債の彌々必要なる所以なり。請ふ少しく其然る所以を辯ぜん。抑々世運の進歩に従ひ運輸通信の機關發達し人文の中心頗る遠大なるを致せり。往時徒歩跣足以て事を辨ぜし時代と人車を驅るの時とは人文中心の範圍既に異り、進んで汽車、汽船の世となりては勢ひ人文の中心一層廣大とならざるを得ず。我國に於ける東京市、大阪市の如き、北米合衆國の紐育人口四百十一萬餘シカゴ二百四萬八千餘、英國の倫敦リバプールの如き其廣袤往日の比に非ず。中に就き倫敦の如きは人口四百五十萬餘、附近場末を取込むときは六百五十八萬餘を含有し西曆千九百二年、獨都伯林は二百四萬餘にして勞働者宿泊に家なきを歎ずと云ふ。因に云ふ伯林は人口二百五十萬に至るの目的を以て諸般の計畫をなす。斯の如く世運の進歩停止する所を知らざるが故に之に應ずる設備を要し資金の需要日に月に急なり。是れ地方債の増加する所以の一なり。

第二目 自治躰の發達

自治制の發達は之に相應するの設備を促す。是れ地方債の増加する所以の二なり。何を以て爾か云ふ。元來市街に集中し來る者の中に就き如何なる種類の人民が

其大部分を占むるやを尋ねるに租税を負擔し得る者は寥々星晨の如くにして市費増加の原因となる者甚だ多し。今試みに之を例説せんに茲に市の附近に一製造所の新たに設立せらるゝや八百乃至千人餘の労働者瞬時に之に向ふて集中すること宛も水の低きに就くが如し、是に於てか警察、衛生、學校、運輸、通信等に關する諸般の事務繁多を加へ道路の修繕、點燈、掃除、上水、下水の設備等に巨額の費用を要し、市費大に増加すべきは自然の勢なり。然るに労働者輩より巨額の租税を徵收するは固より不可能の事に屬し、市費負擔の増加は勢ひ主として中流以上の一部人士に歸せざるを得ず、然るに是等の人士亦獨り殆ど無限に増加する所の費用を負擔する能はざるは最も見易きの數なりとす故に市の維持の爲め他に有力にして且つ確實なる収入を索めざるを得ざるは方今の趨勢なり。

第三目 市設事業増加の傾向

自治體の發達既説の如し、是に於てか近時水道、點燈、市街鐵道の如き經營にして學術上に所謂獨占的事業と稱する者は概ね市の事業に歸するの傾向を生じ、現に歐米の文明國に於て着々此方針を執りて其歩を進むるを見る。元來前記の諸事業

は一人一たび先鞭を着くるときは他の者が同時同處に於て之を經營するも、到底前者と同様の利益を獲る能はざるの特質を有す、而して是等獨占的事業は市の進歩するに隨ひ非常の利益を生ずるものなるが故に之を市に收めて收入の源泉となすは市の經營上極めて便利にして方今の事態殆ど必要の事に屬す、今之を近時の實況に徴するに北米合衆國に於て一千立方フヒートの瓦斯を生産するには平均五十仙の製造費及固定資本の補填費五弗を要するのみ、故に一千立方フヒートの瓦斯を一弗の價にて賣却すれば既に一割以上の配當をなすこと容易の業たり、然るに之を二弗若くは二弗半、甚しきに至りては三弗を以て賣りたることあり、是於て近比紐育市にては瓦斯製造を市の事業とし方今の半價を以て之を市民に供給すべしとの説あり、獨占的事業の收利に適合する以て見るべきなり、又伯林の瓦斯局は公設にして西曆千九百一年の純益は六百四十六萬餘馬にして市金庫に百六十三萬餘馬の仕用料を支拂ひ同千九百四年に於ては純益四百八十七萬餘馬にして租税及保險料四十六萬餘馬を支拂ひ、税を拂へば使用料を止むる契約なり、別に減債基金百二十八萬餘馬、保存及修繕費百一萬馬を積立てたり而して瓦斯の

價格は一立方メートルに付き十ペニヒ乃至十六ペニヒなり、西曆千九百二年に於ては同市市街鐵道の延長は二百九十九哩にして乗客總數二億九千五百萬人なりし、而して同年の配當は七分五厘にして成規に従ひ伯林市へ九十七萬六千圓を納付せり豈に盛ならず哉

獨占的事業の利益大なること凡そ斯の如し今之を民設に一任するときには需給の關係上公衆は非常に高價なる瓦斯代、車賃、給水料等を支拂はざるを得ざるに反し之が經營に任ずる會社又は組合のみ巨大なる利益を獲るに至り、一方に於ては市民は高價の代價を拂ふて辛く瓦斯、給水、電氣鐵道等を消費又は使用せざるを得ざるに他の一方に於て又重税の負擔を要す天下豈に斯の理あらんや、然るに今是等の事業を市に移し市其利益を收め、一方には公衆に私設會社が爲し得るより少しく廉價を以て市設の機關を使用するを得せしめ、他方には其得たる純益を以て諸種の施設の費用に充當せば、大に市税を軽減するを得ると同時に市の經營維持を完ふすることを得べし。方今歐米諸邦概ね此方針を執りて進行しつゝあり、今瓦斯供給の一事を以て之を見るも、英國の瓦斯事業の如きは西曆千九百年に於て公

設二百三十一、私設四百五十にして、獨逸は同千八百九十七年に於ては私設二百七十四、公設三百七十四に達し、瑞西は公設十一、私設十九にして其他の諸國皆之に類す。然れども又一方に於ては斯の如く、公設事業の増加は方今諸國に於て地方債増加の強力なる一原因なり是れ蓋し大勢の免れざる所にして我國に於ても輓近地方債大に増加し三十一年末の二千三百四十八萬餘圓より三十九年末の七千七百五十八萬餘圓となり、大阪の如きは同期間に三百七十餘萬圓より二千五百五十餘萬圓に増加し而して東京は五百三十八萬餘圓より二千二百十萬餘圓に増加せり、是れ一般の趨勢にして或程度までは到底免れ能はざる所なりと雖も亦以て輕々看過すべきに非ざるなり。又英國輓近の實況を見るに西曆千八百九十八年の調査に據るに當時既に地方債増加の勢を示し二十年間に人口の増加二割三分半、地方税を負擔すべき財産の増加二割六分七厘五毛にして地方債の増加は十二割に達せり、而して輓近の實況に就て之を見るにハマスミス市に於ては西曆千八百八十八年より同千九百五年間に人口二割賦課財産四割二分を増加し公債は二十八割を増加せり、而して倫敦に於ては西曆千九百五年の一人當り市費負擔額は五ポンド

借入の新案

七志七片にして之を十年前に比するに約五割を増加せり、是に於て英國貨幣市場も其前途を憂慮し地方債に對して頗る警戒を加ふるの勢あり、然れども地方費の需用は之か爲に止むべきに非ず、益々資金の供給に苦み終に市町村通知預金なる一新法を按出し拂戻の請求には數日前最長期は六ヶ月前の豫告を要す、直接に銀行等より借入るゝことを止め公衆より預金を爲し以て所要の金額を得聊か利子の負擔を軽減せんとするの目的に出る者なりと雖も、若し民設の預金機關と競争を惹起すことあれば其利は害を償ふ能はざるへし、慎ますんはある可らざるなり、今一步を進めて米國の景況を見るに、兄たり難し弟たり難し、則ちウエスト、ハムに於ては西曆千八百九十年より同千九百二年までの間に市税八割を増加し、同所に於ては方今卅九年千八百弗の不動産にして一年百弗の賃貸價格を有する者五十三弗三十五仙の租税を負擔しシカゴにては同様の財産二十八弗十八仙ポストンに於ては二十八弗八十仙紐育に於ては二十五弗八十八仙を負擔す米輕きに非ざるも、尙ほ英の重きに到らず、畢竟斯の如く市税の増加するは公設の事業の爲め年に地方債の増加するもの之が主因たらざるを得ず、而して公設事業は之に依り

米國

衣食するの徒を生じ其一般公衆に利益あると否とを問はず、頻りに其成立擴張を望み、特に其使用の爲めに利を受ける者彼等に合同し多數にして之に關係なく又其利益を受けざる者の利害を顧みず、漫然公設事業の擴張を主張し、市政若くは選舉場裏等に於て不測の弊害を生ずるなきを保せず、紐育の「タムニホール」の如き其適例なり、夫れ官業公業は負擔を國民一般、若くは當該市町の士民に及ぼし其利益を受ることの厚薄有無を問はず、故に利害の偏重すること時に或は免れ難きの通弊なり、其事業にして多數民庶の需用に添ひ相當の收入を生ずれば、則ち可なるも、若し夫れ然らざるを得ざらん乎、大に寒心すべきものあり、私設事業に於ては、則ち然らず、其成功は固より之を冀望せざるを得ず、而して其失敗は間接に社會に影響すべしと雖も、累を一般納税者に及ぼさず、其厚薄輕重識者を待たずして明かなり、只其監督を嚴にし、事物をして其目的に添ふの實を擧げしむるの要ある耳

第三節 地方債の効力増加の方法

第一目 轉貸法

第十二章 地方債 第三節 地方債の効力増加の方法 第一目 轉貸法

地方債募集の方法にも亦種々あり、或は地方政府が直接に募集するあり、或は英國の如く轉貸法に依るものあり、蓋し轉貸法とは先づ國が借金をなし之を市町村等の公法人に貸付するを謂ふ斯の如くして國が元利支拂の爲め要する費用は市町村等より國に對して償ふべきは勿論なりとす、抑々地方債元利の負擔は一地方に限局す、故に地方債券は全國の市場に於て賣買取引せらるゝこと甚だ稀にして其小市町村の發行に係る者殊に然りとす、又信用の點より事を看るも例へば國に對して五分利にて貸付くる者も地方團體に對しては七分利若くは八分利に非れば貸付をなさざるは蓋し市場の常情なり、我國に於ても斷然轉貸法を行ひ地方債を國債に切替へ債權者中切替を肯んせざる者あるときは償還に際し漸次に切替ゆべし三箇年若くは五箇年据置き其の間に第四編第一章第十六節に論ずるが如く中央の財政を整理し地方の財源を涵養し然る後償還に着手せば地方は切替の爲め利子を減じ中央は地方より實費を徴して之が爲に特に費用を増加せず頗る便宜なるや疑を客れざるなり、抑々國家の信用は地方團體に比して高位に居るを以て國は地方より幾分か低利にて借金するを得べし、轉貸法は比較的鞏固なる信

用を利用して地方費の負擔を緩和するを目的とするものにして事物の關係其當を得たりと云ふべし、英國に於ては夙に此方法を利用して中央に工事貸付局を設け自ら債券を發行して地方に貸付し今哉卅九年其高積んで五千五十四萬餘磅に達す、而して利率は目下百磅に付き三磅十三志なり、佛國に於ても之と類似の方法行はる、例へば鐵道敷設の爲め資金を要する會社あれば政府は國債を募集せし爲に得たる金額を會社に貸付け以て鐵道を敷設せしめ、二十五年三十年等一定の期間中其會社をして鐵道事業を經營せしめ、一定の期間滿了に至れば其事業は國に歸するか或は期限を更新して引續き其會社をして之に當らしむるか、又は他の會社をして之を經營せしむるかは時の必要と事情とに依りて異なる者とす、此方法たる畢竟事業の經營を會社の熟練に任せ國の信用を利して低利の資本を得ることとを目的とするものにして、所謂長を取り短を補ふ者なれば施設其宜を得ば良好なる結果を見るや疑を容れず。

凡そ公債は金額小なるときは市場の立物たるを得ずして賣買の機會甚だ少く隨て其價格貴きを得ざるものとす、國債は其額概ね大なりと雖も地方團體の發行

地方債買證
は實買
に便なら
ず故に買
融上金の
保し格少

せし者は其金額比較的僅小なり故に地方債券は市場に賣買せらるゝこと少く隨て貸付の擔保物に供するに便ならず例へば某縣の公債證書にして其總額五十萬圓なる者を市場に賣出すとせん乎之を購買せんとする者殆ど之あるなし偶々之あるも價格頗る廉なるか又は或府縣に於て戸籍財産等に就き利害關係を有する者に外ならざるべし是に於てや我國地方債の利率は概ね六分以上に昇り國債は五分以下にして其差頗る大なるに拘らず前者は其賣買自由ならず國債と雖も金額の小なる者は尙ほ賣買の圓滑を缺く況や地方債をや今若し英國の如く轉貸法を行はんか市場に出づる者は國債證券にして地方債券に非ざるが故に金額大に信用鞏固にして高價を保ち擔保品たるの實力隨て大なるを得べきは疑を容れざる所なり

第二目 證券用紙の供給

英國に於ては地方債券の爲に國が用紙を供給することあり是れ我國に於て曾て國が國立銀行紙幣を製造して之を銀行に交付せしに類似す當時銀行紙幣の用紙は國が製造して之を各行へ交付せしが故に百四五十の銀行が發行せし紙幣は

銀行紙幣の名の下に一團となりて流通せり若し各國銀行が各自各種の紙幣を製造して之を發行したらんには管に其流通の圓滑を阻害せしのみならず印刷費を増加し又十分に紙質を選択すること能はず且つ防贋の注意に缺くる所なきを得ざりしならん地方債證券用紙供給の事たる之と同じく智巧の方法と謂はざる可らず若し轉貸法の行はれざる場合には此方法を探るも可なり而して用紙の代價の如きは無論地方團體より納付せしむるものとす若し印紙税を徵すべき場合には之を用紙の代價中に包含せしむれば徵税法を簡便にするの利あり

之を要するに地方債に對する市場は狹隘にして其賣買不自由なるが故に隨て擔保品たるに適せず是れ前記の如き種々の方法を講じて幾分地方債の効力を大ならしむることに努めざる可らざる所以なり目下地方債は其利子國債に比して迥かに高率なるに拘らず市場の勢力たること能はざるの憾あるを以て我國に於ても機を見て轉貸法等を實行して地方團體の利子の負擔を輕減するの必要あり然れども斯くするときは國の費用自ら増加するを以て地方團體は無論其實費を國庫に拂込まざるを得ず國は又之を元金償還に充て速かに債務額を減ずること

を思はざる可らざるなり。今や我國は地方債の増加其勢を成すの秋なり。今にして注意を怠らば他日非常の困難を感ずるの虞なしとせず。遠き慮なければ近き憂あり。須らく先進の事例に鑑み、折衷斟酌以て劃策する所なかる可らず。

第三目 地方債に關する特別機關

轉貸法等の利益ある凡そ斯の如し。然れども天下は廣大にして其事業を國家に一任し他に方法を求めざるは未だ以て其精を盡したりと云ふを得ず。故に今一步を進めて白耳義の町村銀行に則り協同相互救済の主義に基き地方團體を糾合して一團とし其餘裕を集めて以て過不足を補ひ、之に與ふるに特權を以てし、之に負ふはすに特種の任務を以てせば彼是相待つて遺憾なきを得ん。抑々白耳義の町村銀行なる者はフレヤ、オルバン氏の主張に係り西曆千八百六十年甫て設立せられ、其創立以來昨年(卅六年)に至るまで同行取扱に係る町村等募債總額二億七千五百二十七萬四千二百法借入地方團體の數二千二百四十四個なりとす。今白國の地方自治團體總數は二千六百十八個我國の市町村は北海道、沖繩、臺灣及諸島廳を除き一萬二千九百七十二個にして外に水利組合等の自治團體ありなるを以て其八割五

分強は既に町村銀行の餘澤を得しものと云つべし。而して西曆千九百三年の實況は借入町村數三百十七個にして其金高は二千三百三萬七千六百法なりとす。由是觀之町村銀行が公共の爲に貢獻する所實に偉大なりと云つべし。其定款の概要は之を附録に掲載せり。請ふ參觀あれ(甲種附録第四號參觀)。

第四目 地方債の特別財源

國か或目的を以て公債其他の財源に依り基金を設置し之より府縣に貸付けて特定の事業を經營せしむことあり。佛國の道路基金、學校基金等は其最も顯著なるものなり。佛國の學校基金の如きは其名高きと共に幣害亦著し、然りと雖も其方法たる國の信用を以て地方團體の會計を幫助するの趣旨に基くものにして理に於て不可なる所なし。蓋し諸般の施設上利害相伴ふは天下の常勢にして、徒らに弊害をのみ是れ慮り利益を興さるゝは志士の與せざる所なり。世に利益あるものは之を興すに躊躇す可らず、而して弊害一たひ生するあらば速かに之を矯正せざる可らず。否らずんば國家の進歩焉ぞ期待するを得ん哉。夫れ只事の弊害を生せんことを是れ慮り、徒らに言に敏にして行に鈍なるは東洋人士の常習にして、而かも弊一